

「スパルタの海」

上之郷利昭

発行者 真野義人 発行所 東京新聞出版局

—海から甦る子供たち—

家庭内暴力、登校拒否—情緒障害児に救いの手はあるのか？ 戸塚ヨットスクールが挑んだスパルタ教育の現場に、ノンフィクション作家の第一人者が始めて踏み込んだ衝撃のドキュメント。

冬の海に浮かぶ小さなヨットに懸命にしがみついた子供たち—愛知県知多半島の先端にある戸塚ヨットスクールは、現代の子供たちをむしばむ心の病に、海とヨットと鉄拳で真っ向から取り組む。ふと我が子は...と子供の心をうかがいたくなる感動の人間ドラマ。

(※帯より引用)

鉄拳が舞う朝の浜辺

「こらあーッ！ 見えないと思って、ズルけるんじゃないッ！」

屈強な身体つきのコーチが、少年の太ももを力いっぱい蹴りあげる。ヒューッと悲鳴をあげて泣き崩れる少年。だが、コーチは手をゆるめない。

「こいつッ、泣けば許されると思ってなのかあッ！」

再び、太ももがいやというほど蹴りあげられる。

火のついたように泣き叫ぶ少年。

「オイッ、顔見せてみる。涙なんか出ていないじゃないかッ。ごまかすんじゃないッ！」

今度は胸ぐらに鉄拳が打ち込まれる。

グウォツとうなって、少年は倒れた。

まわりの子供たちはその凄まじさに怯えきって、懸命に腕立て伏せを続けている。だが、身体のなまりきっている子供たちのなかに、この厳しい訓練を無事乗りきる者は1人もいない。1人、また1人と崩れる子供たち。その身体をコーチたちの足蹴りと鉄拳が情

戸塚ヨットスクール

け容赦なく見舞う。子供たちの泣き声と悲鳴は、さながら阿鼻叫喚(あびきょうかん)の図である。

三河湾を望む愛知県知多郡美浜町河和の海岸。

あたりがまだ静まりかえった午前6時のこの長閑(のどか)な砂浜で、毎日繰り返される光景は、実に異様である。

この異様な光景は、半農半漁の温厚な人々が住む河和の海岸に「戸塚宏ジュニアヨットスクール」が開かれて以来数年間、ずっと続けられている。

戸塚宏—この名前を知っている読者も少なくないだろう。

昭和50年、沖縄海洋博を記念してサンフランシスコ—沖縄間の1人乗りヨットレースが催された時、愛艇「ウイング・オブ・ヤマハ号」を駆った彼は、『太平洋ひとりっち』でつとに有名なヨットマン堀江謙一らを抑え、41日と14時間33分という驚異的な記録で、この孤独なレースに優勝した。

名古屋大学工学部機械科卒の戸塚は、大学時代からヨットの魅力にとりつかれ、卒業後も知多半島をペースにヨットに乗り、

ヨットの費用のために仕事をするという生活を続けた。知多半島にちなんだ「チタⅡ世号」「チタⅢ世号」で内外のさまざまなレースに出場、優勝しているレーシングヨットの第一人者。国際的なヨットマンである。

彼のヨットスクールはいまや登校拒否、家庭内暴力、非行など、今日最も問題になっている情緒障害児を治す学校として、そうした子供をかかえて悩む親たちの間に熱烈な信奉者を生みつつあり、北海道から九州まで全国から情緒障害の子供が集まっている。

徹底したスパルタによって甘え切った子供たちの精神をたたき直す——あたりが静まりかえった河和の海岸で、毎朝繰り広げられる異様な光景は、その厳しい日課の始まりなのである。

ヨットの訓練が情緒障害児の治療に効くとわかったのは、ひよんなことからだった。

昭和50年秋に沖縄海洋博記念レースに優勝してから約1年後、戸塚は子供たちにヨットを教えるための日曜・休日スクールを開いたが、たまたまそのなかに登校拒否の子供が1人まじっていた。

それは愛知県内のかなり裕福な家庭に育った中学生の男の子だった。登校拒否に困りはてた両親が、気分転換のためにヨットにでも乗せて遊ばせてみては、といったていどの軽い気持ちで戸塚のヨットスクールに子供を参加させたのだった。52年5月の連休のことである。

ところが、数日間の訓練を終えて自宅に帰ったその中学生は、親が何もいわないのに連休明けから学校へ通い始めたのである。驚いた両親から戸塚のところへ報告と感謝の連絡が入った。

その子供はまともに目をあわさず、返事をせず、他の子供と交わらず、ヨットの訓練に必要な雑用をさぼって親のそばにくっついていて、態度がなまいき。一目見て嫌な感じのする子供だったので、戸塚は印象に残ってはいたが、登校拒否だったこと、しかもそれがヨットの訓練の結果治ったことなど全く知らなかった。

この話が新聞に伝えられたのがきっかけとなって、戸塚のところへ情緒障害児をかかえて悩む親たちから次々助けを求める依頼が

舞い込むようになり、いつの間にか健全な子供たちのためのヨットスクールとしてよりも、情緒障害児治療のヨットスクールとして、そうした子供を持つ親たちの間で知られるようになった。

このヨットスクールには、一種異様な雰囲気がかたよっている。中学生を中心に上は高校生から20歳を超えた青年まで、男女十数人が合宿所に寝泊まりしながら訓練を受けているのだが、ここにはこの年代の健全な子供たちの世界のように笑顔がない。朗らかな笑い声がない。感情と感動を失ってしまった無機質な人間のようにうつろな目で、疑わしそうな視線を投げかける。口をきかない、挨拶をしない。他人に危害を加えることはまずないのだが、知らない者にとっては、何をやられるかわからない不気味さを感じさせる。

精神病院ほどではないけれども、ふつうの世界から行った者にとって、その異様さはただごとではない。

実にさまざまな子供がいる。カギっ子でテレビばかり見ていて、体まで奇形になってしまった登校拒否の男の子。兄妹そろって登校拒否になってしまった頭の良すぎるかわいい女の子。空手をやっていて、父親をぶっ飛ばすのが日課だった家庭内暴力の男の子、ヤクザの情婦、麻薬中毒、麻薬の運び屋に堕ちてしまった立派な教育者の娘。親の体面のために登校拒否、家庭内暴力を9年間も放置され、精神病院へ入れられる直前でヨットスクールに最後の望みを託している23歳の青年……。

愛知県知多郡美浜町の観光会館だった古い建物を借りているヨットスクールの合宿所は2階建て。2階が8畳と20畳くらい大きな部屋に分かれていて、校長である戸塚以下コーチ数人が8畳に、子供たちが大きな部屋に起居している。階下は台所と手洗い。

畳は敷いてあるが、布団はない。昼間着ていたトレーニングウェアのまま、寝袋のなかにもぐり込んで眠るのである。

ほとんどが家庭ではハレものにさわるように扱われていた子供たちだが、ここではその甘えが許されない。

登校拒否、家庭内暴力の子供の特徴は夜型になってしまうことである。

家族の起きている昼間は布団やベッドにもぐり込んでいて、寝し
ずまるとソソコソ起き出し、テレビを見たり、深夜放送を聴いたり、
冷蔵庫から何かをひっぱり出して食べたり。

だが、朝 6 時にたたき起こされ、フラフラになるまで 1 日中厳しく
しごかれるこのヨットスクールに来ると、子供たちは夜 9 時を待ち
かねてぐっすり眠りについてしまう。

起床は朝 6 時。自分の寝袋をすばやくきちんとたたみ、階下に
駆け下りて建物の前に整列、点呼。点呼は脱走者がいないかど
うかを確認する意味もある。

点呼が終わるとすぐ、百メートルほど離れた海岸へ出て、砂浜
を軽くランニング。それから 7 時すぎまでのたっぷり 1 時間が、子
供たちにとっては悪夢のしごきを受ける体操の時間である。

腕立て伏せを中心に、腹を支えにして頭と足を弓なりにそらせ
る背筋の運動、逆にシリを軸にして両手両足を 45 度の角度に
上げたままの状態を続ける腹筋運動、屈伸、掌を結んだり開い
たりする運動、2 人 1 組となり、相手に足を持ってもらい手だけ
で階段を上り下りする運動など。

よほど鍛えぬかれたスポーツマンでないかぎり、子供でも大人で
もたっぷり 1 時間のこの激しい体操に耐えられる者は皆無である。
しかも、くたばるとその場でコーチの足蹴りか鉄拳が、いやというほ
ど身体に打ち込まれる。甘やかし放題に育ててきた親たちが見た
ら、おそらく卒倒してしまうのではあるまいか。

登校拒否、家庭内暴力、非行といった情緒障害児は例外なく
甘ったれであり、いやなことは人一倍逃げようとするのが特徴だ。
学校から逃げ、勉強から逃げ、友だちから逃げ、甘い親につけ込
む。

その甘ったれたちを逃げ場のない所へ追いつめて、体力と精神
力を鍛え、ヨットでさらに本格的な鍛錬を積むための基礎作りを
する。

倒れては蹴られ、鉄拳を受けては立ち上がる。子供たちは泣き
わめきながら否応なしに厳しいしごきに悲鳴をあげ、耐えさせられ
ていくのである。

ヨットは冬の海ほど訓練に適している。それも風の強い方がいい。
風が強ければ操作がむずかしく、転倒しやすい。転倒すれば冷た
い海に放り出され、早くヨットを起こし、はい上がってうまく操縦し
なければ、ござえ死んでしまうからである。

転倒するのは学校が悪いのでもなければ、友だちが悪いのでも、
親が悪いのでもない。自分が悪いからだ。自分の操作が未熟だ
からである。だから死にたくなければ、だれに文句をいうのでもなく
自分で自分を鍛える以外にない。

「先生、ボク死にます」

と戸塚にいった少年がいる。

世の中、生きていてもつまらないし、こんな苦しい訓練をやらさ
れるくらいなら、いっそ死んだ方がまだ、と真顔でいうのである。

家でも同じようなことをいい、親たちは真っ青になって、どうかそん
な軽はずみだけはしないでくれと拝むようにして頼んだので、子供
はますますつけあがった。

ところが、戸塚やコーチたちには、その脅しが通じないことが、や
はり子供だからわからなかった。

「そんなに、死にたいか」

と戸塚がいうと、その子はいとも簡単に「ハイ」と答える。「よし、そ
れなら来い」といって冬の海に連れ出し、ヨットに乗せた。

「本当に、死にたいんだな。男に二言はないな」

と戸塚が念を押しても、また「ハイ」と答えた。

子供を 1 人乗せたヨットは波にもまれ、やがて転倒した。ござえ
死ぬほど冷たい冬の海である。少年は思わずはい上がろうとした。

救命用の高速ヨットに乗ってその模様をじっと見ていた戸塚とコ
ーチたちは少年のヨットに近づいて行った。そして、はい上がろうと
している子供を海中に突き落とした。浮かびあがってくると、再び
頭を押えて海中に突っ込む。

万一のことがないよう慎重に相手の様子をうかがいながら、

「さあ、死んでいいゾ！」

と何度も同じことを繰り返す。たまらなくなった子供は遂に、

「助けてエ！」

と悲鳴をあげた。ここが急所の押えどころである。

「男に二言はないといったろうが。このウソつきめが！」戸塚らはここぞとばかり悪口雅言を浴びせかけながら、なおも子供を海中に突っ込むことをやめない。

「もう、2度といわないか」「いいません」「本当だな」「本当です。助けてください！」

これでこの子の甘えと突っばりは完全にうちくだかれてしまった。

彼は2度と「死ぬ」という言葉を口にしなくなり、戸塚らに対して従順になった。

岐阜県のある市に住む父親から、中学生の息子をお願いしたいと申し入れがあった。登校拒否が昂進して、家庭内暴力を併発する状態にあるという。

夜8時すぎ、1日の訓練を終えてからコーチが車で子供を迎えに出発した。河和のヨットスクールから目的の市まで片道約2時間の道程。相手の家には10時ごろに着く予定である。この時間を選んだのは、子供を連れ出す時、隣近所にわからないようにとの配慮からである。登校拒否や家庭内暴力は子供にとっても家族にとっても、自慢できる話ではない。どの家庭でも内々のうちに事を運ぶことを望むものなのである。

車にはコーチが2人と、子供1人が乗って行った。連れ出される子供は必ず猛然と抵抗するから、屈強なコーチであっても1人では無理である。2人で連れ出して車に押し込み、1人が運転して、1人が見張っていなくてはならないからだ。

コーチに同行する子供はオトリの役割である。同行者にはヨットスクールに来ている子供のなかでも模範生が選ばれる。連れ出される子供は、いわば仲間の姿を見て多少は安心する。

目的の家に着くと、暗い玄関が開いて父親が出てきた。夜10時すぎの地方都市。あたりは寝静まっているかのように静かだ。

子供にはヨットスクールへやることは予告されていない。言い含めて納得するような子供なら迎えに行かなくても親に連れられて

来るだろうし、第一、ヨットスクールで荒療治を受ける必要がないかもしれない。

なかにはパットを振り回したり、寝込みを連れに行ったらフンの中に隠し持っていたナイフを振りかざして飛びかかってきた子供さえある。この子供もパットを振り回して暴れる恐れがあるといわれていた。だから、親は極秘のうちに事を進めていたのである。

ひそかにヨットスクールへ連絡をとり、指示されたトレーニングウェアその他着替えなどいっさいの支度を整えて、迎えの車の到着を待っていたのである。そのようにして子供を送り出す親の気持ちは、どのようなものであろうか。

父親の案内でコーチたちが子供のいる2階へ、そつと上がっていた。階下では母親と年老いた祖父母が不安なまなざしでながめている。まるで子供の死刑の執行を待っているような表情であった。

2階の子供は異常な気配に感づいてガバッと跳び起き、窓際にへばりついて身がまえた。顔面は蒼白。それだけでなくとも部屋に閉じこもりつきりで真っ白な顔から、さらに血の気がひいていた。父親に向けられた目は、怒りに燃えていた。うつろな目が怒りをたたえと異様なすごみを帯びるものだ。

「鍛えられて、男らしくなってこい」

父親が自分にいきかせるように、震える声でいった。

「イヤだ！行かない！」

父親が説得しながら1歩近づこうとすると、息子はますます窓際にへばりついて動こうとしない。何も知らされていないくとも、自分がどこかへ連れ去られることだけは、わかっているようだ。

「おとなしく連れていってもらいなさい。そして、男らしくなって帰ってきなさい」

父親はそう説得しながらも内心まだ迷いのあることが、弱々しく興奮したその声にうかがわれた。

子供はそれを見逃さない。

「イヤだアーッ！」

父親の同情を誘うように大声で叫んだ。

その瞬間、コーチのこぶしが子供のみぞおちに打ち込まれた。グウツツとなりながらも必死に抵抗する子供に、なおも強烈なパンチが続げざまに数発。

戸塚やコーチによると、ここが重要な勝負どころだという。この相手にはかなわない、いうことをきくしか仕方ないと、最初の出会いの時に思わせなくてはならない。しかもそれは、理屈抜きに、体で覚えさせなくてはならない。甘ったれ、世をすね、親のいうことも、先生やまわりのいうことも聞かなくなったような子供には、理屈や説得は通用しないし、無用だというのである。

しかし、子供も抵抗をやめない。

もう1人のコーチが子供の手を引っぱって、階段を引きずり下ろそうとする。子供は手すりにしがみつき、

「お母さあーん、助けてエーッ！」

と大声で叫ぶ。

ドドドッ、と物すごい響きをたてて、子供が階段を引きずり下ろされて行く。

「キャッ！」

悲鳴とも、なんともつかぬ異様な叫び声をあげて、母親が子供に追いつこうとした。年老いた品のいい祖父母も、真っ青な顔でわなわなと震えながら孫の方へ行こうとする。

「おじいちゃんも、おばあちゃんも、お前も、やめなさいッ！」

父親は、かろうじて残っている威厳をふりしぼるかのよう制した。しかし、自らもうろたえていることを隠すことはできない。

「よろしく、お願いします」

父親は、支度しておいた子供の荷物をコーチに渡しながら、深々と頭を下げた。ふつうなら子供の身支度は母親がするものであろう。あるていどの覚悟をしていたというものの、あまりにも、すさまじい異常な光景に、母親はどうてんしてしまい、なにも手につかない状態だった。

子供が車のバックシートに押し込められると、パターンと音をたててドアが閉まり、エンジンをいっぱいにかした車は、静まりかえった闇のなかへ消えて行く。4人の家族が、まるで祈るような姿で何度も腰をかがめながら、車の後姿を見送っていた。

車が走り出すと、子供はおとなしくなってしまった。もはや抵抗してもムダだと観念したのか、ついさっきまであれほど激しく暴れた子供とは思えないほど静かにしている。

コーチと、迎えに来た仲間の子供の間にはさまれ、身を硬くしたまま目を閉じている。時折、どこを走っているのかを確かめるように、上目づかいに窓の外を見やるが、外は一面の暗闇。行き交う車のヘッドライトが時折り目に入るといのである。

子供の家を出発したのが夜中の12時少し前。片道2時間の道程を、車は河和のヨットスクールに向けて再び、ひた走る。運転しているコーチも、子供を監視しているコーチも、その朝6時に起きて夕方の6時すぎまで、まる1日、激しい体操とヨットの訓練で疲れきっているはずであった。迎えに同行した子供の方はさすがに疲れたのか、スヤスヤと眠っている。彼も朝6時から一睡もしていなかったのだ。

「どこへ連れて行くんか！」

たった1度だけ、子供が車の中で口を開いた。

「行ってみればわかる！」

と、コーチの返事はとりつく島もないほどそっけない。もはや甘えられる相手はだれもいなくなったとあきらめたのか、彼はヨットスクールに着くまでひと言も口を開かず、じっと目を閉じていた。

河和の合宿所に子供を乗せた車が降り着いたのは、夜中の2時に近かった。校長の戸塚宏も他のコーチたちも、起きて待っていた。生徒たちはみんな寝静まっている。

新入りの生徒は合宿所2階のコーチたちの部屋に連れて行かれた。身の回りの検査。お金は取り上げてヨットスクールが管理する。子供に現金を持たせておくと、車や電車に乗って逃げ帰ってしまうことだってある。金を取り上げておけば、脱走したところで、そう遠くまでは行けないからである。

子供は、あまりに急激な環境の変化に茫然としてしまっている。彼はおそらく、戸塚ヨットスクールの名前を聞いたこともないだろう。

明日からどんな生活が待ち受けているのか。不安と恐れ。

ふつうの子供なら表情に現わし、口にするそれらの感情を失ってしまったかのように、この子供はうつろである。

「オイ、もう寝ろ！」

戸塚の声にうながされて、子供は無言、無表情のまま、指定された寝袋の中へ、大儀そうに体を入れた。彼の寝袋はコーチ部屋の押し入れの中に用意されていた。初日の子供は興奮していて、脱走その他なにをするかわからない。押し入れの中なら、監視と封じ込めが容易だからである。

そして、戸塚やコーチたちが交代で不寝番をする。翌朝は6時からの日課に全員、同じように参加する。まずこのパイタリティと気迫に、子供たちはけおされるのである。

情緒障害児と海（前）

子供が脱走した。

厳しい訓練に耐えきれずに、逃げたのである。

情緒障害の子供は常に現実の厳しさから逃避して、甘やかせてくれる人のところに救いを求める。この子もおそらく、そうだろう。

これだけきつい訓練を課していれば、脱走者が1人や2人出ても不思議はない。しかも、相手が現実逃避の得意な情緒障害児ばかりなのだから、全員が脱走したとしても不思議はない。ならば監視を厳しくしているかという、全くそうではない。合宿所の入り口は四六時中開けっ放し。校長の戸塚もコーチたちも、新入りの生徒が入ってきた時のような特殊な場合を除いて生徒たちと一緒に寝てしまい、不寝番はいない。脱走しようと思えばいつでもできるのである。

これは戸塚の考えであった。

脱走するような人間の監視に神経を使うのではなく、脱走しない人間にすることが重要なのだというのである。

脱走するような人間、つまり情緒障害児たちは基本にはルーズなくせに、瑣末(さまつ)なことうるさく干渉するような環境のなかで発生している。いわば辻つま合わせに汲々(きゅうきゅう)とした事なかれ主義の時代の申し子のようなものであるから、ヨットスク

ールでは全く逆に、精神力の鍛錬という基本にはあくまで厳しく徹底するが、その他についてはおおらかに、こだわらない。

だから、子供が逃げても神経質に大騒ぎをしたり、世間体を気にすることなど全くない。

「どこへ行ったのかなあ、あいつ。ちょっと捜してみるか。そのうちどこで見つかるよ」

といった感じである。

もちろんつまらないことで騒がないというだけであって、捜索は真剣に行われるし、子供のことは一番心配している。

まわりの生徒たちに確認してみると、2人の生徒が明け方にその子が合宿所にいるのを見ていた。1人は、午前5時15分ごろにゴソゴソと着替えをしているところを見たといい、もう1人はそれから15分後の5時30分ごろにふと目を覚ましたら、その子はまだいたといった。子供がいなくなっていることが発見されたのは午前6時起床直後の点呼の時だから、脱走はわずか30分の間に行われたことになる。

お金は、子供が入所してきた日に取り上げ管理しているから、タクシーや電車に乗れるはずがない。が、合宿所の自転車が1台、姿を消していた。となれば、自転車で30分くらいで行ける範囲ということになる。海上に逃げないかぎり、名古屋方向だ。

コーチたちは何台かの車に分乗して可能性のあるいくつかの道を捜索に出発した。

その日の夕方近くになって、合宿所に電話が掛かってきた。脱走した子供の母親からで、合宿所に戸塚を訪ねてくるという。

子供は名古屋にいた。

母親の話によると、どうやら現金を巧妙に隠し持っていたらしい。自転車で名鉄沿線のどこかの駅まで走り、そこから名鉄に乗って名古屋へ出たものと推測された。

その日の朝から車に分乗して捜索に出ているコーチたちは、可能な範囲をシラミつぶしに捜してついに発見できないまま帰ってきていたのだが、電車に乗って行けばつかまらないはずである。捜す方は、お金は持っていないから自転車で30分そこそこの範囲、と考えていたのである。

その子は九州から来ている中学生だった。

彼は名古屋から九州の父親の勤め先へ電話を掛け、すぐ迎えに来て欲しいと助けを求めた。子供は甘い父親に直接訴えるのが効果的であることを読んでいたのである。

子供の計算どおり父親はあわてて勤務先の役所を早びけし、母親を伴って飛行機に飛び乗り、子供の指定した名鉄新名古屋駅へ駆けつけた。

そして、子供の話を聞くと、すぐ連れて帰ることに決め、自分は子供とともに名古屋にとどまって、母親だけを戸塚の所へ差し向けたのである。

ここに父親の人柄と性格が現れている。

息子を、スパルタ教育で名高いヨットスクールに預けるに当たっては、彼は予備調査をしている。覚悟を決めたわけだ。そのうえで、問題児のわが子の更生をお願いしたのである。

ならば、自分の子供が脱走したとわかった時、彼がまずとるべき措置はヨットスクールへすぐ電話を入れて子供が無事であることを伝え、そのうえで大変迷惑をかけたことを詫び、父親としていまからとるべき行動について相談するなり、自分の考えを申し述べるということではなかったろうか。

ヨットスクールでは戸塚をはじめ全員が脱走した子の身を案じて捜索に当たり、他の生徒たちは午前中、日課のヨット訓練を休んだ。息子1人の脱走によってこれだけの人々が心配し、迷惑をこうむっていることに、この父親は全く思い至っていない。彼は某県庁のかんりのポストの役人である。

河和の合宿所へ姿を見せた母親はふくよかで、温厚そうな女性であった。

「どうでしょう。せつかくだから、もう少し辛抱をしてみませんか。きっと、よくなりますから」

と、戸塚は何度も母親に説得した。彼女は戸塚と夫の間にはさまって困っているようだった。

「先生、主人に会って、直接語していただけるでしょうか」

しばらく考えた末、母親はいった。

父親と息子は名鉄新名古屋駅の改札口近くで、母親の帰りを待っていた。父親は母親とは対照的に、やせて背が高く、こめかみに青筋が浮かんでいるのが見えるほど神経質そうな感じである。彼は、戸塚が来ることを全然予期していない。

戸塚と2人のコーチは子供に感づかれぬように注意しながら近づいて行く。子供がその姿に気づいて逃げようとするのと、2人のコーチが飛びかかって押え込むのとがほぼ同時だった。

「人の子に、公衆の面前で何をするんですか」

父親は青筋をたてて怒った。

「お父さん、お世話になった戸塚先生……」

と、とりなす母親に父親は目を丸くして戸塚たちをながめた。

戸塚もコーチたちも真っ黒に潮焼けした身体によれよれのトレーニングウェア、ゴムぞうりばき。戸塚は飛行機に乗るにも、ホテルに泊まるにも、このいでたちである。父親と戸塚は初対面だった。

ふつうなら初対面の挨拶などがあるところだろうが、父親は息子からあることないことを聞かされているうえに、目の前で子供を取り押えられて怒っている。戸塚の方も、いま子供を連れて帰られては、これまでなんのために訓練をしてきたのかと、父親に対して怒っていて、険悪な出会いとなった。

「せつかく立ち直りかけている子供をダメにしてしまうつもりですか」

と戸塚。

「これからもまた、ひどい目にあって、そのたびに勤め先へ電話がくるようでは迷惑するんですよ。こうやって勤めを休み、高い金を使って出てくるのでは、たまったもんじゃない。連れて帰ります」と父親。

「訓練の厳しいことは前もってお知らせしてあったはずだし、子供は苦しさから逃れたいためにウソをつくんです。そのことはお父さんが1番よく知っているはずでしょ。それに、迷惑だの、高い金を使ったのというけど、みんな自分の子供のことじゃないですか。そんな子供に育ててきたのは誰でもない、あなた自身だ。そして、私に鍛え直して欲しいと頼んだ。途中で、ぐちこわすのはやめてくれませんか」

「私の育て方が間違っていたといわれれば、仕方がない。しかし、私は連れて帰ると子供に約束した。子供も学校へ行くからと約束した。やはり、約束は守らんと、子供との信頼関係が……」

「あなたの子供さんはウソをつくんです。今日もウソについて逃げ出し、両親を呼び出した。それを治さないまま連れ帰って、約束を守るという保証がどこにあるんですか」

「とにかく、私なりのやり方でやってみます」

「そのやり方がダメだったから、私のところへ寄りこしたんじゃないんですか」

雑踏のなかで父親と戸塚の激しいやりとりが1時間以上も続き、名鉄新名古屋駅構内の時計の針は午後9時を大きく回っていた。

勤め帰りのサラリーマンやOLのなかには、たまに、何かと、向かいあって立つ2人の婆に一瞥(いちべつ)をくれる人もあったが、ほとんどは気づきもせず家路を急いでいる。彼らのうちの誰かを無作為に抽出してプライバシーの領域に踏み込んでみれば、それぞれに問題をかかえているのかもしれないのだが、とりたてて光を当てないかぎり群衆の顔は無表情であり、互いに、他人事には無関心である。

戸塚と父親の関係も、つい数日前までは全く無機的であった。

どうせ他人の子供のことだ、放っておけばいいじゃないかと、ふつうの人間ならいいくなるほど、戸塚は熱心、かつ執拗に、父親に食い下がっていた。

彼は遂に、

「お願いします。あと少し預らせて下さい！」

と頭を下げた。

話が逆ではあるまいか。本来なら、不肖(ふしょう)の息子を持った親の方が頭を下げるのが筋というものであろう。

戸塚はなぜ、こんなにまでして情緒障害児を治療しようとするのか。彼を動かしているものはいったい、何なのか。

その戸塚に対して父親が返した言葉は、

「あんた、本当に治せるんでしょうね？保証できるのですか？」

というものであった。

父親は、息子を預けるに当たって、前もって戸塚ヨットスクールの実績と実態を調査し、そのうえで預けようと決断したのである。自分の子供がかわいいのはどの親も同じだが、父親はこの時、冷静な判断力を失ってしまっているようだった。

だが、明らかにふしつげな父親の言葉に対しても、戸塚は怒るでもなく、

「大丈夫です。治してお返しします」

といいった。

はったりとさえ思える強い口調である。戸塚のこの自信は何によって支えられ、こんな危険な賭けとさえ思えるようなことをいってまで、戸塚はなぜ、障害児の治療にこだわるのか。

2人が話しあっている所から少し離れた新名古屋駅構内の一角。

父親と戸塚のやりとりを、脱走した子供は不安な顔つきでながめていた。

この少年にとって、2人の話しあいの結果は、彼の今後を左右する重要な意味を持っていた。心地よい甘えの生活に戻ることができるのか。それとも、再びあの厳しく苦しい訓練のなかへ放り出されるのか。

少年のころもとなげな目は、千々(ちじ)に乱れる父親の心に訴えかけていた。その朝、脱走直後、助けを求める電話をした時のように、父親は必ず自分を救い出してくれるに違いないと見抜いていたのかもしれない。

「やはり、連れて帰ります」

と父親はいった。

「もう、かまわんで下さい。あとはどうなっても、私の責任ですから」

彼は哀れな姿でしゃがみこんでいる息子に視線を移した。

「最後にいいます」

と、戸塚が厳しい口調でいった。父親は振り向いて戸塚を見た。

「苦しむのはあなたではない。子供さんなんですよ」

戸塚は続けた。

「あなたは先に死んでしまうからいいかもしれない。しかし、立ち直れないままで残された子供に対して、あなたはどのように責任をとるんですか。いま、好かれなくとも、将来感謝される道を、なぜ選ばないんです。いまのあなたの甘さ、優しさを、子供は将来、きつとらむんです。わかりませんか？」

2人は、黙ったまま、しばし睨みあっていた。への字に結んだ戸塚の口もとがピクピクと動き、父親の顔面は蒼白である。緊迫の一瞬であった。

最初に目をそらせたのは父親である。

戸塚は無言のまま、くると背を向けた。

そして、少し離れた所にしゃがんでいる少年に向かって大まかに近づいた。少年は、コーチに押えられたままの格好で、怯えたように後ずさりしようとした。

戸塚はそのままスタスタと歩いて行った。少年は黙って下を向き、両親は茫然と、遠ざかって行く戸塚の後姿を眺めていた。

「優しいだけではダメなんだ。誰かが悪役を買って出てやらなければ、子供たちは救われない」

コーチたちと並んで歩きながら、戸塚はひとりごとのようにいった。

彼らが河和の合宿所へ帰り着いたのは午前零時近くだった。

翌日、少年の母親が再び合宿所を訪れた。戸塚たちが帰ったあと、子供をもう1度ヨットスクールに預けた方がいいのではないかと話しあったがダメだったと報告し、前夜の非礼をわびた。

戸塚は前夜の激論を忘れたように快く対応した。そして、帰りかけた母親に、

「万一の場合は、いつでも連絡して下さい」

といった。

母親はふっくらした身体を小さくしながら、何度も礼をいって去っていった――。

ヨットスクールの日課。

起床午前6時。

「カツカツ、カツカツ……」

コーチが木ヅチで木片をたたくと、広間の寝袋からトレーニングウェアのままの子供たちがモクモクと起き上がり、戸外に出て整列、点呼。脱走者はいないかの点検だ。

百メートルほどの所にある砂浜に出て軽くランニングのあと、1時間たっぷりをかけて、厳しい体操。それは十種類に及ぶ。

午前7時ごろ朝食。

女性コーチの吉田恒美や山口伸子が女生徒に手伝わせて体操の間に作った朝食だ。運んだり、配膳したりするのは全生徒だ。食事は、ぜいたく病を治すため、質素を旨とする。

食後は手分けして後片付けと掃除。

9時少し前、海岸へ。

まず、艀装(ぎそう)。ディングーと呼ばれる1人乗りヨットに、各自乗れるよう帆をつける等の装備を整えるのである。そして、海へ。

午前中いっぱい訓練。

三角形に配置されたブイの外側約1,000メートルを1周するレースを何度も繰り返す。訓練の内容と意味は後に詳述するが、これが戸塚ヨットスクールを特徴づける治療法である。

正午ごろから1時間、昼食と休憩。

午後1時から再び海へ出てヨットの訓練。

夕方5時から5時半までの間に、海岸に戻ってヨットを片付け、合宿所で水を浴び、着替え。

夕食は6時すぎから。支度その他は、朝昼食と同じ。

午後7時すぎ、近くの旅館『角屋』へコーチに引率されて、もらい湯。

風呂から帰ると、当番は夕食の後片付け。他は自由時間。

洗濯する者、マンガを読む者。テレビ、ステレオ等いまふうの娯楽、いっさいなし。

勉強はヨットスクールではすすめていない。勉強とテストでダメになった子供たちだから、1度きれいに忘れることが回復に効果的である。

ただし、親からぜひこと頼まれ、合宿所から学校へ通っている子供には、コーチが交代で10時ごろまで勉強を教える。

就寝は9時すぎから各自、自由。家では夜中にステレオをガンガン鳴らしていた家庭内暴力の子供も、パタン、グー。不眠を訴える者、皆無。

コーチも疲れはてて綿のように眠る。

年中無休。元旦も全く変わりなし。

「病気は元旦だからと休んでくれないんだ」

と戸塚はいった。

戸塚ヨットスクールの教課の中心は、なんといっても、ヨットである。

1人乗りの小さなヨットに情緒障害児たちが乗り、連日、朝から夕方まで競争を繰り返す。小さなヨットは、ちょっとした風にも、ささいな操作ミスによっても、すぐ転覆し、子供は海中に投げ出される。

ライフジャケットをつけているから、溺れることはないが、いつまでもつかっていると、水の冷たさが身にしみる。

情緒障害児の治療には冬の海が最も効果的、というのはそのためである。

転覆しても、コーチは助けてくれない。

ヨットを起こすのも、海からヨットへはい上がるのも、錨(いかり)を上げて再びヨットを操作するのも、すべて自分でやらなくてはならない。

凍え死にそうな冷たい水につかっているか、ヨットを動かすかの二者択一を迫られる。

転覆したのは親が悪いからでも、新しい担任の先生が気に食わないからでもない。

自分の技術が未熟だからである。

だから、転覆するのがいやなら、コーチや先輩たちのやり方を見て、一所懸命に覚えなくてはならない。

自分の未熟さ、能力の限界を思い知り、自分が生きるために必要と感じて、自ら学はうとする。

「それが教育です」

と、戸塚はいう。

「教育とは教えないこと」

とも彼はいった。

「しかも、われわれのやり方の優れている点は、海とヨットがそれをやってくれることです」

周知のように、ヨーロッパでは、英王室をはじめほとんどの国でヨットが王室のスポーツとして、採り入れられている。

日本ではその貴族趣味とカッコよさにあこがれるおもむきがあるが、実は、単なる遊びとしてではなく、王室といえど支配することがかなわない大自然の中で、ヨットを操縦することによって人間としての限界を知り、その自己と闘う精神力、判断力を養い、指導者としての人間形成に資するとともに、欲求がすべて満たされた環境の中で生命力が枯渇するのを防ごうとする企図が、こめられているといわれる。

マイホームという日本の王城はヨーロッパのそれに比すべくもなくつましいが、父親の生命力の衰え、母親の過干渉、欲しいものはほとんど手に入る物質的豊かさ、わずか30分間に人を殺したり夢がかなえられると錯覚させるテレビ番組の休みない襲来は、精神力の脆弱(ぜいじゃく)な"王子"たちを作り上げるには不足のない環境であるといえる。

情緒障害児と海（後）

戸塚ヨットスクールで使用されている1人乗りヨットは「かざぐるま」と命名されており、帆の上部に黄とオレンジ色を交互に配した風車のマークが入っている。

艇の長さ 3.43m、幅 1.32m、帆の面積 5.18 m²。

艇の形がスリムな割に帆が大きく、船首が細くとがっていて、水につかっている部分が少ない。

上手に乗れば大変スピードの出るヨットだが、それだけに転覆しやすく、操縦が極めてむずかしく設計されている。

国体優勝の記録を持つコーチの加藤忠志でさえ、「かざぐるま」を乗りこなせれば、他の1人乗りヨットは簡単」と語っているほどである。

このヨットの考案者は戸塚自身である。

現在、子供用のヨットとして最も人気があり、普及しているのは、船体が箱型になっていて、帆が小さなタイプである。

スピードは遅いが、安定していて、乗りやすい。

人気の秘密は、簡単に乗れて、楽しめるということ。もちろん、設計段階から子供の人気を得られるよう考案されている。

だが、戸塚はこの種のヨットの設計思想および、それが子供の訓練用として幅広く使われていることに対して批判的であり、戸塚の「かざぐるま」はその対極をなす発想と設計によって作られている。

「従来のものでは、子供が簡単にヨットに乗れるものと錯覚し、慢心してしまう。海と自然をなめてかかる。まるで、子供を甘やかすために作られたようなもので、その意味では実に迎合的、まさに今日の社会を反映したような発想のヨットだ。子供を鍛えるには、常に困難に立ち向かわせなくてはいけない。困難に挑戦してこそ、進歩、向上があり、精神力が養われるのだから……」

1人乗りヨットの中で最も技術を必要とし、操縦が困難といわれる「かざぐるま」考案の思想を、戸塚はこう語っている。

情緒障害児の特徴は自尊心、虚栄心が異常に肥大していることである。

経験と実態を伴わず、異常に肥大した自尊心は現実の困難に直面すると、ひとたまりもなく崩れてしまう。だが、自らの非を認めることのできない彼らは、極端に自分の殻の中に閉じこもるか、スケープゴートを見つけて家庭内暴力、非行、校内暴力に走る。

情緒障害児の治療は、まず、肥大した自尊心を粉々にするところから始めねばならないが、操縦の困難な「かざぐるま」は、そのためには実に効果的な条件を備えているのである。

とはいっても、「かざぐるま」は最初から情緒障害児の治療と訓練を目的として、設計されたものではない。もともとは、健全な子供たちを対象にヨットを教えようとして作られたのである。

戸塚宏が、少年たちにヨットを教える学校をやってみたいと考えたのは、昭和50年秋、沖縄海洋博記念太平洋単独横断ヨットレースに優勝した直後のことであった。

大学でヨットを知って以来、自分がそれまで模索して探り当てることができなかった“何か”があると、魅入られてしまった戸塚は、その素晴らしさを少年たちにも伝えたいと願った。

彼はその話をヤマハの川上源一に相談したところ、川上は支援を快諾した。

川上は、戸塚が優勝した沖縄海洋博記念レース出場に当たってクルーザー「ウイング・オブ・ヤマハ号」を戸塚の思いどおりに建造、提供したのをはじめ、50年当時で合計5千万円の援助をしていた。

こうして、レース優勝で有名になった戸塚の名を冠した「戸塚宏ジュニアヨットスクール」が51年秋から52年春にかけて全国8カ所に開校、新聞、テレビでも紹介され、健全な子供たちでにぎわっていた。

ところが、52年4月、健康児の中にたまたま、まぎれこんでいた登校拒否の子供が、ヨットの訓練を受けた後、学校へ行くようになって両親が狂喜していることが新聞に報じられたのがきっかけで「戸塚宏ジュニアヨットスクール」はいつの間にか情緒障害児を治す学校として全国に知られることになってしまった。

そして、はからずも、健全な子供を鍛えるために設計されたはずの「かざぐるま」が、情緒障害児の治療に非常に効果的であることがわかったのである。

「つまり、子育ての目的は、健全な子供であろうと、情緒障害児であろうと同じなんです」

戸塚は、情緒障害の子供を数多く訓練するようになって、そのことに気づいたという。

「われわれのやり方を批判する学者、専門家、教育評論家、学校の先生方に対して、私は逆に質問するんです」

と戸塚はいった。

子育ての目的は何だと思いますか？

これが、戸塚の質問である。

「これまで、私が質問した全員が、答えに窮しましたね。子育ての専門家たちが自分なりの答えを持ってないでいて、他人を批判するなんて、無責任ですよえ」

そして、戸塚はもう1度、いった。

子育ての目的は、何だと思いますか？

「子育ての目的は——と私が尋ねると、ほとんどの人は、目的といても色々あるから、というようないい方で言葉をにごしてしまう。しかし」

と戸塚はいった。

「目的はたった1つだと思うんです」

彼は、自分の考えを確認するようにちょっと間を置いてから、

「それは精神力をつけることです」

といきった。

「言葉をかえていえば、自分の持っている能力を100%生かす能力——だと私は知っているんです」

あるいは、環境適応能力、もっと積極的に、いかなる状況をも克服できる力、自立心といってもよいかもしれない。

「そして、その精神力を養うのにヨットほど素晴らしいものはないと私は思うんです」

戸塚ヨットスクール

と戸塚はいった。

「実は私自身、今の時代だったら情緒障害になっていたかもしれない。そんな自分を根底から覆したのがヨットだった」

戸塚は小学校から高校まで成績はトップクラスにあり、とくに数学は抜きん出ている。両親は過保護ではないが、温厚で、彼は経済的にも不自由のない平和な家庭のなかで、なに不足なく過ごしてきた。

成績に慢心し、怖いものなく、それでいて、心は完全に満たされることなく、何かを模索しながら探り当てることができず、いらだっていた。

情緒障害の子供たちと同じ心理状態である。

その彼が、大学のヨット部に入ってから別人のように変わった。雄大な自然の営みの中で、自分がいかに微力であるかを思い知ったのである。

戸塚は懸命に自己と闘い、自己を鍛えるべく努力を重ねた。

そして、この克己のきわみが、太平洋単独横断レースだった。

「これはレースだ。レースである以上、勝つ」

と戸塚は思い定めた。

たとえば勝敗の重要なポイントは艇の軽量化である。戸塚は、必要最小限以外の飲み水を全部捨てたのをはじめ、歯磨きのチューブも日数分以外は捨て、歯ブラシも柄を半分は切るといった徹底した軽量化を図り、食事も宇宙食をとった。

そして、41日間のほとんど、1日4時間の睡眠時間を、目覚ましを掛けておいて15分刻みに眠り、ヨットの方向、速度、帆の具合などを確認するという離れ業をやったのけた。

他を圧倒的に押さえての優勝はその成果だが、驚嘆すべきは勝つという目的のために41日間、15分刻みに寝起きたその恐るべき精神力の強靭さと忍耐力である。

朝の体操は戸塚ヨットスクールの教程のなかでも、ヨットの訓練に劣らないほど重要な意味を持っている。

約 1 時間のうち最も多くを費やす腕立て伏せを中心に、腹筋、背筋、屈伸、握力など十種類に及ぶ体操は、戸塚が大学のヨット部で教わったものを基本に、体験を踏まえて改良を加えてきたものである。

体操の第 1 目的はヨット操縦に必要な筋肉の鍛錬を含め、基礎体力をつけることにある。

戸塚によると、情緒障害児が対象の場合、重要なことは、かなり鍛えられたスポーツ選手でなければこなせないほど激しく厳しい体操に挑戦させられ、しごかれることによって、忍耐力、精神力が培われ、そして困難を克服したという自信が徐々に芽生えてくることである。

さらにしごきを通じて、生徒がコーチに従うという関係が確立される。

精神力のある正常な者であれば、自らの意思によって困難に挑戦し、克服しようと努力するが、その力のない彼らはコーチによっていやがるのを無理にやらされることになる。怠けても、逃げてても骨身にこたえるパンチが待っている。コーチには体力、知力、技術、経験等、あらゆる面でかなわないことを子供たちは肌で覚えさせられるのである。

「一人前でない子供の自主性を尊重するとか、対等に話し合うなど悪しき平等主義」

と批判し、命令と服従こそが教育と子育ての基本原則であると主張する戸塚たちの考え方が、この体操を通して具現化され、それがヨットスクールにおける全生活を律している。

たとえば、ヨットの上達した生徒に未熟な者を教えさせることがある。

生徒同士でも教える方は絶対。教わる方は年上でも威儀を正し、礼を尽くさねばならない。悔しかったら努力して早くうまくなれ、というわけだ。

生徒が合宿所の 2 階の広間から階下へ上り下りする時には、コーチ室の前へ直立不動の姿勢で立ち、

「下へ降ります」

「上がりました」

と大声でいって礼をしなくてはならない。声が小さかったり、姿勢が悪かったりすると、

「やり直し！」

と、何度でもやらされる。

空手で親をぶっ飛ばしていた家庭内暴力も、校長室を占拠して「コラ、校長！」と脅迫していた校内暴力も、ここではひとたまりもなく、丸ぼうずの従順な子供に変えられてしまう。

戸塚ヨットスクールへ連れてこられるのは、情緒障害のなかでも「SOS」の出た重症の子供がほとんどである。

彼らは例外なく、たった 1 度の腕立て伏せも満足にできないばかりか、身体と手足をピンと伸ばすことさえできない。

今日、あまりはやらない言葉に「健康な身体に健全な精神が宿る」というのがあるが、まさに、心がひねくれていると身体までねじ曲がっていることがよくわかる。

そして彼らは、コーチから体操をやれとしごきを受けると、決まって大声でわめく。

家庭にいた時と同じように、大騒ぎをすれば許され、苦しさから逃げられると思っている。

泣けば、

「いい子、いい子……」

とあやしてもらえと思いつている幼児と同じで、なかには厳しくしごかれると本当におしゃぶりを始める子供がいる。

身体ばかり大きくなって、精神的には幼児性を脱していないというところだろう。

しかし、不思議なことに、ヨットと体操を雨の日も風の日も毎日繰り返す、鉄拳、足蹴り、罵声、怒号……コーチの厳しいしごきを受けているうちに、彼らは、徐々に、身体と手足がピンと伸びはじめ、わめき声が少なくなり、唇をふるわせながら苦しみに耐えようと努めるようになる。

すると、感情の通わなかった目に少しずつ表情が出はじめる。わめくだけで涙の出なかった目から、ポトリと一滴の涙がほおに伝わ

り落ちたら、立ち直りのきざしが見えはじめたことを物語る。やがてその子供は、ヨットレースに勝つと、戸惑いながらニッと笑ってキョロ、キョロと周囲を見回す。

これを何度か繰り返しているうちに、子供は喜ぶことを覚え、目が輝きはじめ、自信が芽生え、積極的行動に出はじめる。

逆に、非行や暴走族の子供にはやさしさや、いたわりの心が生まれる。そして、回復とともに、男は男っぽく、女は女らしい身体つきと心根に変わっていく。

朝のランニングを見ていると、回復した子は先頭を、入ってきたばかりの子は必ずぴりっつを、走っている。象徴的な光景である。

しかし、しんがり走っている子供も厳しいしごきに耐えて、やがては、先頭を走るようになるだろうことを、この合宿所に長くいると、ある種の自信をもって予測できるようになってくる。

ヨットには大別して2種類ある。

1つはクルーザー。

もう1つはディンギー。

クルーザーは、外洋の航海(クルージング)に使われる。

戸塚宏が昭和50年、沖縄海洋博記念太平洋単独横断ヨットレースに優勝した時の「ウイング・オブ・ヤマハ号」。堀江謙一の「マーメイド号」。戸塚や堀江たちと同じレースに、日本女性として初めて太平洋単独横断に成功した小林則子の「リブ号」などは、いずれもクルーザー。

エリザベス女王の夫君フィリップス殿下、チャールズ王子をはじめ英王室諸公やヨーロッパ各国の王室、英国の元宰相故ウィンストン・チャーチルらが大西洋を優雅に旅した、あるいは旅する船も、ギリシャの海運王オナシスがジャクリーン・ケネディを地中海洋上に招いたのも、クルーザーである。

これに対しディンギーは1人から、せいぜい3人乗りの小さなヨットを指す。

発生的にはクルーザーに積み込んで、クルーザーと遠浅の海岸とを結ぶ連絡用の小舟として生まれた。ところが、この小舟がやがて単独でレース、ないしレジャー用として広がりはじめ、オリンピックや国体の種目として採用されるまでになった。外洋航海用のクル

ーザーと違ってディンギーは海岸からそれほど離れていない沖合でレースを競ったり、乗って楽しんだりする。ディンギーには種類が無数にあり、だれかが新しいタイプを考案すれば1種類ふえるといった具合。その中で値段、乗りやすさ、その他さまざまな条件によって大衆的に広まったものが、大きなレースの種目として採用されたりする。カッコよさで人気が出たウインドサーフィンがディンギーの1種として、オリンピック種目に採用されたのなどは、その典型である。

戸塚ヨットスクールで日々の訓練に使用されている「かざぐるま」もディンギーの1種で、戸塚宏の考案によってヤマハの技術陣が製作した。

ヨットスクールで、ディンギーを乗りこなせるようになった生徒はやがてクルーザーに乗せてもらえるようになり、クルーザーを操って太平洋へ数日間のクルージングに出してもらえるようになると、親のもとへ帰れる日が迫りつつあることを物語っている。

ヨットの上達とともに情緒障害も治っていくわけで、戸塚の言葉を借りれば「すべては海とヨットがやってくれる」のである。

戸塚ヨットスクールへ入校した生徒は、1日目から朝の体操に参加し、ヨットに乗る。

体操、食事、後片付け、掃除を終えて8時半ないし9時少し前に浜辺へ出て、まず艀装(ぎそう)。

前日、訓練を終えたあと満潮時の波にさらわれないよう堤防わきに立てかけて片付けておいたヨットを、先輩たちにならって砂浜の水打ち際まで運び出し、帆を広げ、ロープを張り、舵をつけ……ヨットを乗れるように装備することを艀装という。

新入生は、艀装にかかるまでに4種類のロープの結び方や部品の名称を先輩に教えられる。

艀装を終えると、いよいよ海へ出てヨットに乗る。これも、最初の1、2回だけ先輩に操縦してもらって同乗、今度は逆に先輩に同乗してもらって自分が操縦。それが終わると、すぐに自分1人で乗られる。

非常に厳しいスケジュールであり、相当優秀な健康児でも最初から上手に乗ることは不可能に近い。

多くの子供は前夜、不意打ちを受けてヨットスクールへ連れてこられている。テレビ、ステレオなんでもそろった甘え放題の親元から一転して廃屋のような合宿所へ。粗衣粗食、寝袋でゴロ寝させられたかと思うと、朝早くから体操でしごかれ……自分に何が起きているのかさっぱりわからなくなっているところへ、ロープの結び方、ヨット各部所の名称、乗り方、組み立てなどを1度にまくしたてられ、海へ放り出される。その間ずっと、アホ、パカ、間抜け呼ばわりで、ヘタをすれば鉄拳の風なのだから、子供がどうてんしたとしても無理はない。

そこが戸塚式教育の狙いであって、頭と心を大混乱させて、今までグズグズ考えてきたつまらないことをさっぱり忘れさせ、頭の中を空っぽにしてから精神を鍛え直し始めるわけだ。

ヨットの訓練は浜辺から沖合 1~2 キロの海上に、マークのパイプ 3 個を三角形に浮かべ、全長約 1,000m の周囲を早くまわるレースを何度も繰り返す。

スタートラインの所に錨(いかり)を下ろしたカッターに乗ったコーチが全体を見てマイクで指示し、2 隻の高速艇に乗ったコーチが子供たちのヨットのそばまで走ってきて特訓。時には海をこわがっている子供のヨットにわざと高速艇をぶつけて転覆させ、子供を海へ放り込む。

訓練に適すのは風速 6~7m の風の日。無風の夏の日など、ヨットは怖くないし海に落ちても快適だから、あまり訓練に適した条件とはいえない。冷たい風が吹き、海が荒れて冬型の気候に入りはじめると、子供たちにとっては厳しいが、しかし、最も効果のあるシーズンとなる。

戸塚ヨットスクール開校

伊勢湾と三河湾にはさまれた愛知県知多半島は京と江戸を結ぶ最短距離上にある。源頼朝の父義朝は平治の乱に敗れて東へ落ちのびようと伊勢湾を舟で渡り、この半島を横断してさら

に三河湾へ出るためにこの半島の野間という所に上陸、休養中を逆臣の謀叛にあって斃(たお)れた。江戸時代に入ると、徳川の膝元であるこの辺りは、尾張の米を江戸に運ぶ千石船の基地として栄えた。三浦綾子の小説『海嶺』は、その千石船で難破、漂流して日本最初の和訳聖書を完訳した、この辺りの 3 人の漁師の物語である。

戸塚のヨットスクールのそばに『角屋』という旅館がある。

伊勢、三河両湾を結び知多半島を横断する内海街道と、半島を縦断して名古屋方向から突端に至る師崎街道の交叉する角にあるところから名付けられたものだが、この『角屋』旅館も、千石船で栄えた時代から続く老舗らしくさまざまな歴史を刻んでおり、この家の主は父の叔母から、荒神山の争いで斃れた吉良仁吉の生首を、清水次郎長の輩下たちが持って泊ったのを見たという話を、直接聞いているという。

新幹線でくれば名古屋で名鉄河和線に乗り換え、その終点である河和駅まで特急で 45 分。

名古屋へ 45 分、東京へ約 3 時間の所要時間と交通の便利さを考えれば大都市に近い位置にありながら、都会の喧騒にわずらわされることなく長閑(のどか)で平和な海浜の閑村のたたずまいをとどめ、人々もまた三河湾に面した温暖な気候と田園、豊富な海の幸に恵まれて、気ぜわしく殺伐とした「現代」とかかわることのない生活を送ることができたかに見えた。

その長閑な海浜に忽然と「現代」が姿を現わし、温和な人々を驚きと騒動の渦に巻き込むようになったのは、5 年ほど前からのことである。

海辺の近くに住む人々は、海岸で毎日、早朝から繰り展げられる異様な光景に驚きの声を噛み殺し、目を被った。

真っ黒に陽焼けした肌が潮光りに光った屈強な若春たちが、いやがる色白の少年少女たちを、走れないとっては怒鳴り、体操ができないとっては殴る、蹴るの暴行を加え、いたいけな子供たちは悲鳴をあげて逃げまどっているかに思えたからである。

何軒かの家には子供たちが血相を変え、助けを求めて飛び込んできた。

「おばさん、助けて下さい。ボク、殺されます！」

見ると、顔や腕にアザやスリ傷がある。

可哀相に、と思っているところへ、トレーニングウェアにゴム草履の男たちがドヤドヤと押しかけてきた。

「すみません、子供を渡して下さい」

「誰ですか、あなたがたは」

「この子を親元から預っている者です。返して下さい」

「こんなに怖がっているのに、渡せません」

こんな光景が何軒かの家で繰り展げられた。

車を走らせている時、

「お願いです、乗せて下さい。殺されるんです！」

と、怯えた子供にヒッチハイクを頼まれ、交通費と小遣いまで恵んで逃亡を手伝ってやった人も、何人もいる。

駐在所にも助けを求めて子供が飛び込み、引き渡しを求める潮光りの男たちとの間で何度も応酬が行なわれた。

「あの連中はいったい、何者だろう」

と謀る声の人々の間に広まっていった。

「まるで、暴力教室みたいだ」

それにしても、と人々は、また考える。

「あの連中が住んでいるのは河和区の建物ではないか。すると、誰か町の有力な人が後についているに相違ない」

やがて、人々の耳にこんな人々の名前が聞こえてきた。

美浜町長 橋本喜久雄

同町議会副議長 岩本鋼一

同町教育委員長 辻顕吉

美浜ガス社長 横田忠彦

「ヘエ?! 町長さんたちがねえ。すると、あの連中はいったい、何者……?」

大都市においてさえ今日でもまだ十分な認識があるといえる状態にはほど遠い「情緒障害」とその子供たちについて、今から5

年も前にこの長閑な海浜の人々に知識と理解を要求するのは酷な話であった。

しかし、そうした閑村の中にこそ、むしろ時代の流れに対する鋭敏な嗅覚を持った人々がいたといえるかもしれない。

きっかけは、この地の有力者たちの社交的集まりである美浜町ライオンズクラブの創立10周年記念行事であった。

町の「赤ひげ」的存在である医師の辻顕吉は、教育委員長を長年にわたってつとめるとともにライオンズクラブの中心的メンバーであるが、彼はその記念行事に戸塚宏を招いて町の子供たちに講演を聞かせてはどうだろうと提案した。

戸塚宏はその頃「時の人」であった。

昭和50年に開かれた沖縄海洋博。それを記念して催されたサソフラスコ——沖縄間の太平洋単独横断ヨットレースで、戸塚は、『太平洋ひとりぼっち』で知られた堀江謙一を大差で引き離して優勝してから間もない時である。「リブ号」に乗って参加した小林則子が、競争は論外だったとはいえ、日本女性として初めて、ひとりぼっちで太平洋を横断する記録を作ったのもこの時であった。

辻が感嘆したのは、なによりも戸塚の強靱な精神力であった。「ウイング・オブ・ヤマハ号」を駆ってサンフランシスコから沖縄まで太平洋上を41日14時間33分の孤独な闘い。その間、彼は「勝つ」という目的の為に睡眠を1日4時間に削り、しかも、舵と帆から目を離す時間を最小限にとどめるために、目覚しを掛けておいて15分ごとに目を覚まし、帆と舵を調整してまた眠るという体力の限界に挑戦し、医学者をして「不可能だ!」と叫ばせたほどの強靱な意志の持主である。

町の校医を長年つとめ、かねてから子供たちの体力と精神力の脆弱さを憂えていた辻は、戸塚にいたく感動し、ライオンズクラブ創立10周年を記念する行事には、町の子供たちにぜひ、戸塚の口からその感動の記録を語ってもらいたいと思ったのである。

辻の提案は受け容れられた。

戸塚はムービーフィルムを見せながら苦闘の記録を語るとともに、彼がそれに乗って太平洋を横断し、優勝したヨット「ウイング・オ

プ・ヤマハ号」を美浜町河和の港へ回航し、子供たちを試乗させて湾内を帆走してみた。

戸塚宏から、
「河和の海岸で子供のためのヨットスクールを開きたいのだが」
という相談を辻が受けたのは、それから間もなくのことである。

戸塚もまた、子供たちの体力、精神力が脆弱になっていることを深く憂えていた。体力、精神力が極端に衰えた場合は、知力、人格まで破壊されるようなことになるのではないか。

その頃、彼が「情緒障害」の存在など知っていようはずもない。しかし彼は自分自身の体験を通して漠然とそう考え、ヨットの訓練を通じて子供たちの体力、精神力を鍛える、そういう学校を開きたいと考えていたのである。

辻顕吉は戸塚の話に共鳴し、彼のヨットスクールを実現させてやりたいと思った。それは将来、必ずや美浜町にとって誇り得るものになり、町に貢献する存在になるはずであった。

教育委員長である辻が町の有力者たちに話すと、町長橋本喜久雄、町議会副議長岩本鋼一、美浜ガス社長横田忠彦らが直ちに賛意を表し、協力を約してくれた。彼らもライオンズクラブの有力メンバーであり、先の創立 10 周年記念事業の際には、戸塚の講演に深い感銘を受けていたのである。

海岸でヨットの訓練を行なうについては漁業権の問題が大きいが、これは町長の橋本と副議長の岩本が漁業組合との間に立って了解を得てくれ、ヨットスクールの合宿所については海岸のすぐ近くにある旧河和観光館と呼ばれる古い建物を岩本一家の尽力で借りることができた。

こうして「戸塚宏ジュニアヨットスクール」の河和合宿所は開校したのだが、開校後時たらずして、戸塚のヨットスクールは大変な社会的反響を呼び起こすことになった。

ある時、合宿にきた子供たちの中に登校拒否の子供が 1 人、混んでいた。父親が、気分転換のためにヨットにでも乗せてみるか、といった調子で寄こしたのだった。ところが、それまでどれだけ説

得しても叱っても学校に行かなかった子供が、ヨットの合宿を終えて帰ると、翌日から自主的に登校しはじめた。

それを伝え聞いた登校拒否の子供を持つ父親が、試しに同じことをやってみると、その子供も学校へ通いはじめたというのである。

その時点で戸塚は、嫌な感じの子供がいるな、という程度で、登校拒否の子供が入っていたことを全く知らなかった。

ところが、新聞記事が出た直後から、登校拒否児童を抱えて悩む全国の家庭から申し込みが殺到した。戸塚のヨットスクールは今でも普通児を対象にした日曜、春夏冬休みの合宿を行なっている。しかし、2 人の登校拒否児童が回復したのをきっかけに、その後、家庭内暴力、校内暴力、暴走族、一般的非行から、最近では精神病かもしれないと思われる者までを対象にした治療矯正が行なわれている。

戸塚はそれらすべてをひっくるめて「情緒障害」と呼んでいる。つまり、登校拒否も非行も情緒障害が原因で起こる 1 つの現象にすぎない、というのである。

戸塚ヨットスクールは、戸塚宏と数人のヨット仲間がささやかに始めたものであり、とくに情緒障害の子供たちをほとんど専門的に預かるようになってからは、社会的要請の方が彼らヨットマンたちの支え得る能力をはるかに超えた重圧となっている。

学者、カウンセラー、学校など、専門家といわれる人々や教育関係者の圧倒的多数から無視され、批判されながら、ジェンナーやパストゥールのように手探りで情緒障害者の治療矯正に必死に取り組んでいる戸塚たちを支えているのは、辻、町長、横田らを中心とした美浜町の人たちである。

登校拒否、家庭内暴力……（前）

「お父さん、こげん話が出とつとよ！」

原明子の母親の恵美子は新聞をワシづかみにして、店にいる夫の三郎の所へ飛んできた。

それは、長崎新聞の夕刊である。

彼女は新聞を開き、3面の記事を指さした。

<ヨットで登校拒否を治療>

こんな見出しで戸塚ヨットスクールのことが大きく紹介されている。厳しい訓練の過程で、1人の登校拒否児童が死亡するというショッキングな事故も報じられていた。しかしその一方で、多くの登校拒否児童たちがこの厳しい訓練によって治療され、親たちから喜ばれている——として、さまざまな例が挙げられ、訓練の様相も描かれていた。

「お父さん、これしかなかと！」

と、恵美子はせきこむように、夫にいった。

「アッコば、この学校にやってみんとね！」

長女の明子が登校拒否症にかかって以来、両親は、効果があると勧められた治療方法には、それこそワラをもつかむ思いで、すべてすがってきたのだが、明子の症状は悪化する一方だった。

「これではない」

「これも違う」

恵美子は、それらの治療を受けるたびに、どこか違うような、娘の病気の治療にはもっとふさわしい別の方法があるような気がして、釈然としない思いが残っていた。その思いが、この新聞記事を読んだ時、ふっ切れたような気がした。

なぜ、そう思ったのか。

恵美子は筋道を立てて説明することができない。

しかし、明子の病気は、医者や薬の対象ではない。精神を鍛え直すといった何かスカッとした方法がふさわしいのではないかという気が、漠然としていたのである。

「ウム?!」

記事を読み終えた父親の三郎は、腕組みをしたまま、大きく首をかしげて、考え込んでしまった。

新聞記事のいうように、本当に治る例もあるのかもしれない。

しかし現に、子供が1人死んでいる。男の子でも死ぬような厳しい訓練のなかへ娘を放り込んで、もしものことがあったらどうするのか。

父親の方が冷静だったといういい方もできる。しかし、同じ家族でも、被害を受ける度合いによって反応の仕方が異なる。娘と四六時中つき合い、最も被害を受けている母親は迷うことなく、スパルタ訓練による治療に賭けようとしていた。

それに比べ、仕事に出ていて少しは娘の状態から目をそらせることのできる父親には、母親ほどの緊迫感がなかったのかもしれない。

三郎は迷った。

「親戚に相談ばしてみる」

と彼はいった。

長崎市鍛冶屋町で楽器店を手広く営む原三郎の長女明子が最初に登校拒否を起こしたのは、中学3年の時だった。3学期の期末試験が明日から始まるという日の朝、突然、学校へ行きたくないと叫び出したのである。

「わたしはダメな人間だ。生きていく望みがなくなった」

両親が何を聞いても、明子はそうやってシクシク泣くばかりだった。

明子は期末テストだけは受けた。それを受けないと高校受験の資格がなくなるからという両親と担任の先生の説得が効いたのである。もともと五百人近くいる学年全体で10番以内、調子のいい時にはトップを争うほど勉強の出来る子だったから、テストには自信があったのかもしれない。

が、このころから明子は急速におかしくなり始めた。

それまでは店を手伝うこともあったが、このころを境に部屋に閉じこもることが多くなった。昼と夜が逆転し始め、夜、家族が寝静まってから起きてきて、冷蔵庫をあさるといった生活が続く。勉強好きだった子供が学校の本を読まなくなり、母親に、同じような記事の載った女性週刊誌を何冊も買ってこさせて、徹夜で読みふける。

パジャマを買ってきてくれと母親にいう。買ってくると、これは気に食わない、あれも気に入らないと突き返して、何枚でも買わせる。

食事の時、食卓に足を乗せてふんぞり返り、
「こんなまずいものが食べられるか！」

と食器をひっくり返す。

家族がそろってテレビをみていると、部屋から出てきてわざとチャンネルを回してしまう。

時計、指輪、ネックレスといった母親の高価なアクセサリーを持ち出して、捨ててしまう。

母親が店番をしていると、居宅にある別の電話からわざと何度も電話を掛けてきて、客の応対ができないように妨害をする。

気にさわるようなことを何かいたり、したりしようものなら暴れ狂うから、家族はハレものにさわるような扱いである。ご機嫌をとるために好きなピンポン台を備え付け、相手をする、フラフラになって倒れるまでやらされる。明子が「いい」という前にやめようものなら、ピンポン台はひっくり返す、ラケットは投げるの大暴れである。

明子は遂に1万円札を持ち出して火をつけるところまでいってしまった。仏間の方で紙の焦げるようなキナ臭いにおいがするので父親が行ってみると、蒼白な顔の明子がメラメラと燃える1万円札を持って仏壇の前に立っていた。

こんなことを毎日やられると、家族も狂ってしまう。明子を殺すか、一家心中をするか——父親は連夜、浴びるように酒を飲んで荒れ、一家はギリギリのところまで追いつめられていた。

明子は映画、とくに洋画が好きである。

「映画へ行かせてくれれば、店番をする」

高校2年で再び登校拒否を起こしてから、明子は母親の恵美子に提案をした。

明子の家は長崎市で商店を営んでいる。

この時点では、明子は学校へ行かないということが異常なだけで、それを除けば、ふつうの女の子とそれほど変わらなかったといっ
てよい。

しかし、父親の三郎は明子の提案を蹴った。

「学校にも行かないで、何をたわけたことをいうか！」

父親としては、しごくもつともな言い分である。

明子が暴れ狂うようになったのはこのころからだが、その兆候は中学3年の期末試験直後にさかのぼる。

試験が終わった翌日から卒業まで、パタリと学校へ行かなくなった。友達や先生が何度迎えにきてくれても、ガンとしてきかなかった。

それでいて、高校の入試は受けた。不思議な現象である。優秀な生徒の集まる長崎市内の県立高校に、500人中71番で合格した。3学期に全然受験勉強をしないで、である。

そして、1年間は無事登校した。

両親はホッとした。

ところが、高校2年になったとたん、再びパタリと学校へ行かなくなったのだ。今度の登校拒否は本格的で、症状が悪化し、一種の家庭内暴力を伴うようになった。

最初の登校拒否の理由を、なだめすかしてうまく引き出してみると、友達が自分だけをのけ者にし、いじめるからだと本人はいった。先生がその友達に尋ねてみると、そんなことは絶対はない、と主張した。ヤブの中だが、ともかく本人はそういうことを理由に挙げた。

高校の1年生の間だけ登校したのは、登校拒否を起こす以前、つまり中学2年まで一緒だった仲のいい友達がまた同じクラスになったからだと言った。

高校2年になって再び行かなくなったのはクラス替えがあって、仲の良い友達とまた別れてしまったからだと言った。

登校拒否や家庭内暴力など情緒障害児の特徴は甘えと、環境への適応能力欠如が表裏一体となって存在することである。

明子の場合も、自分の好きな友達と同じクラスでなかったから、というのは身勝手、甘えである。嫌だなあというくらいの気持ちはだれにでもあるが、登校拒否児童は自分に甘く、このため学校へ行かないというところまで突き進んでしまう。

本来なら、どんなクラスであろうと、新しい環境に自分を適応させていかなくては、生存競争に生き残ることはできない。それができないほど明子は精神力の弱い人間に、どこかでなってしまったのである。

明子を回復させるために打つ手は、もはやないように両親には見えた。

最初に訪ねたのは長崎市内の精神科医である。

医師は「自律神経失調症」と病名を書いた。

そして、精神安定剤と睡眠薬を注射した。明子は、その直後だけは気持ちが少し落ち着き、よく眠るが、薬が切れると以前よりひどくなる。親にはそれが一時しのぎの療法にしかすぎないように思え、繰り返すと麻薬のように、段々悪化していくのではないかと不安になった。

通院はやめてしまった。

次に紹介されたのは大学病院である。

医師は明子にいろいろ聞こうとするが、明子は一言も答えない。仕方なく母親の恵美子が代わって通院し、経過、症状を報告して指示を仰ぐ方法に切り替えたが、医師としても決め手となる有効な措置が見つからないようであった。

「念のために、入院させてみましょうか」

と担当医はいった。

「以前、入院させるぞと脅したら、びくりにして学校へ行くようになった子供の例がありましたかね」

ありがとうございます、と丁寧に礼をいって、母親の恵美子は以来、病院へ行くのをやめた。そんなことでいうことをきく状態は、とくに過ぎているように思えた。となると、本当に入院せざるを得なくなる。また注射を打たれ、症状が悪化していよいよ本物の精神病に近づいてしまうようなことにでもなると、明子を廃人に追い込むようなものである。

その次は、日本屈指といわれる高名な専門家の主宰する病院。情緒障害児ばかりを共同生活させながら治療の効果をあげている、ということだった。

一流の専門家と聞き、最後の頼みの綱と思った両親は、すぐにも寮に入れるようフトンまで車に積んで行ったのだが、その高名な医師は明子に向かって、

「自分から治ろうとする意思がなくてはダメです。今度からは1人でいらっしやい」

といい、両親に対しては、自分の著書の名を挙げ、よく読んでから来るように、と告げた。

「1人でいけるような状態なら、苦勞するか！」

失望した両親は再びその専門家を訪ねることはしなかった。もちろん、明子が1人で出かけて行くはずもない。

「万策、尽きたな」

と父親の三都は悄然(しょうぜん)として妻にいった。

「アッコのことは死んだもんとってあきらめんと仕方なか」

恵美子は目を真っ赤にしたまま黙っていた。

困り果てた人たちがよくそうするように、2人は祈祷師の門をたいた。

戸塚ヨットスクールに明子を入れるかどうかについて、三郎は親族の意見を聞いて回ったが、賛成する者は1人もいなかった。

「お前、あそこで子供の死によったことば知っとつか」

親類の1人はいった。

「知っとる、知っとるから迷うとる」

と彼は答えた。

「シゴキの激しかけん、子供が死によったと。アッコもそげんして死んでしもうたら、どげんすつとね」

三郎は娘を諦めたつもりだった。あらゆる手を尽くしても明子の症状は悪化する一方であった。諦めたのなら、死んだつもりでヨットスクールへ入れてみればいいではないか、と自分にいいかせて

みた。だが、もしものことがあったら、どうすると問いつめられて迷うのもまた親心である。いかにひどい状態にあっても、娘が可愛くないわけがない。

考えあぐねた三郎は、ふらりと酒を飲みに出た。

行く先はいつものように知人の永尾幸治の経営する店である。

永尾は東京の大学を出た、大きな造り酒屋の社長でありながら、立ち飲みのお店を開いて客と話をするのが楽しみという気さくな男だった。三郎とは8年越しのつきあいで、明子のこともなにくれとなく相談に乗ってくれていた。

「アッコちゃんのことは、つらかりうが、突き放した方が本人のためだ」

彼が戸塚ヨットスクールの件を持ち出したのに対して、永尾はいった。

「突き放せばいずれ、ちゃんとした人間になって帰ってくる。可愛い、可愛いで甘やかしてばかりいると、いつまでたっても立ち直れないよ」

今日初めて打ち明けるのだが、実は自分の身内にも同じようなことが、かつてあった、と永尾はいった。

「だから、あんたの気持ちはよくわかる。わかるからこそ、突き放した方がいい」

永尾の身内の場合も突き放したことによって、本人は立ち直ったという。

「ありがとう」

三郎は永尾のところで造っている『峰の雪』を冷やでグイッとあけると、家へ急いだ。

「母さん、アッコはヨットスクールへやることにする」

三郎は妻の恵美子にいった。母親は、やっとその気になってくれましたかといった表情で、ホッと胸をなでおろした。

2人は明子を呼んでヨットスクールの話をして聞かせ、お前がちゃんとした人間として立ち直るためなのだから、お父さんたちのいうことをきいてくれ、と頼むようにいった。

「よかとよオ」

意外にも明子は抵抗せず、無感動にいて、ジロリと両親を見た。

「お父さんも、お母さんも、わたしば殺すとね」

* *

むしむしする暑さが残った夜、新入りの若者がヨットスクールを脱走した。ヒッチハイクして、車を3回、乗り換えながら東名高速道路を東京方面へ。逃げ込んだのは、東京郊外にある中学時代の同級生の家であった。同級生の父親は、さっそく大阪にある若者の実へ電話を入れ、父親を呼び出した。

「息子さんは、ヨットスクールへ戻りたくないといっていますか……」

「息子を、ヨットスクールの方々に引き渡してほしいんですわ」

大阪の父親は繰り返す、同じことをいい続けた。

同級生の父親は、大阪の父親がなぜ頑固にいい張るのか、わからなかった。彼はちよつと突き放すような調子でいった。

「あなたは冷たい父親ですなあ。息子さんがこんなに嫌がっている所へ、どうしても帰れというんですか……」

「すみません、ヨットスクールへ……帰して下さい……」

大阪の父親の、しぼり出すような声に、深い苦汁と哀願がこもっている。

同級生の父親はなにかしら胸に響くものを感じて、ようやくとりなすようにいった。

「それじゃ、もう1度、息子さんと語り合ってみましょう。しばし、私にまかせて下さい。また、ご連絡します」

受話器を置いた同級生の父親は、かたわらにいる若者の方に向き直った。

「お父さんは、どうしても、君にヨットスクールへ帰るように、といっておられるが……」

若者は青白い顔をこわばらせ、

「イヤです！」

と叫び出さんばかりの声でいった。

「どんなことがあっても、ボクは帰りません。お願いします。ボクをヨットスクールの人たちに引き渡さないで下さい。あそこへ帰れば、ボクは殺されてしまいます。お願いします！」

親子の間で、なぜ、こんなにも食い違っているのか。

一瞬、同級生の父親の表情に戸惑いが浮かんだのを若者は見逃さなかった。

「何度もいったとおりです。本当なんです」

若者はたたみかけるようにいった。

「もう1度、ボクの体のアザや傷を見て下さい。これはヨットスクールで受けた暴行によって出来たものなんです。ふつうの人間に耐えられるようなものではないんです」

若者の訴えは、一見、理路整然として説得力があるように思われた。

「お願いします。ボクをヨットスクールへ帰さないで下さい！」

「随分時間がかかるなあ」

激しく降りしきる雨をながめながら山口孝道は、ひとりごとのようにつぶやいた。

「本当だ。あれから1時間半はたつんじゃないか」

横田吉高は、はじき飛ばばされてくる雨滴を避けながら応じた。

2人は戸塚ヨットスクールのコーチである。

彼らは若者の行方を追って、その日の夕方5時、神奈川県に近い東京郊外にあるマンモス団地に到着した。若者が逃げ込んだ中学時代の同級生の家が、そこにある。

早い時間に踏み込むと、若者が暴れた場合、近所の手前、相手の家に迷惑をかけることになる。2人は約3時間、外で待ち、夜の8時にその家を訪ねて若者を引き渡してくれるよう頼んだ。

大阪に住む若者の父親は戸塚ヨットスクールに対して、息子を捕まえ、連れ戻してくれるように頼んでおり、2人のコーチはその依頼を受けて若者を引き取りに東京までやってきたのだった。

だが、その家の主婦は、

「ちょっと待って下さい」

と怪訝そうな一瞥を残して中にひっ込んだまま、さらに1時間半以上が経過している。

時計は午後9時半をだいぶ回っていた。

「この家の驚き、わからんわけでは、ないがな……」

山口と横田は薄暗い電灯の下で顔を見合わせた。目の前を、雨が激しい勢いで落ちてゆき、コンクリートにはねかえっている。

彼らはよくこんな場面に遭遇していた。

この家の人たちはおそらく、逃げ込んできた若者の、素直で勉強のよくなる少年時代の姿しか知らないはずである。

自分たちの息子と仲良しだったその少年が、何年か後に突然、逃げ込んで来て、殴る、蹴るのひどい暴行を受けた、殺されるかもしれない、助けて下さい！と涙ながらに訴えたら、だれだって彼のいうことを信じるだろう。

若者は昔日の可愛い子供の姿を髣髴(ほうふつ)させるように色白で、利発そうな顔だちをしており、その彼が訴えながらめくって見せた体にはアザと傷の跡が残っている。

しかも、

「引き渡していただきたい」

と、その若者を引き取りに訪れた2人の男は、真っ黒に日焼けした肌と屈強な肉体、トレーニングウェア、ゴム草履ばき。

上下そろいのダークスーツにネクタイを締め、カバンを下げて毎日、同じ時間に満員電車で会社へ通う青白い顔が圧倒的多数を占める近代社会の住人たちにとって、突然、扉をたたいたこのエイリアンを、自分たちと同等、あるいはそれ以上の教育と教養を身につけた一流のヨットマンであると理解するのは、不可能に近いことかもしれない。

電話のベルが鳴った。

脱走した若者の大阪の実家へ出向いていた東秀一が受話器をとった。東京へ行っている山口と横田からだった。

東も戸塚ヨットスクールのコーチである。

「まだ話し合いが続いているんです」

東京のモヤを尋ねた東に2人は報告した。

「あの男を相手にいくら話し合ってたって無駄なんだけど、ふつうの人にはわからない。もう1時間半以上、どしゃ降りのなかで待たされ、イライラしているところです」

東の耳に、電話を通して激しい雨音が聞こえた。東のいる大阪はもっと激しい暴風雨の圏内に入っていた。北東に進む台風の影響が東京の方にも出はじめているのだろう。

「そちらの方で息子さんの引き渡しが無事完了し、河和の合宿所へ向かうことが確認されるまで、私は大阪にとどまります。ご家族の方はそれを望んでおられるので……」

東は山口と横田に告げた。

「引き取りが成功し次第、また電話を入れます」

と、山口と横田はいった。

「ご苦労さま……」

東京と大阪は、どちらからともなく相手をねぎらって電話を切った。大阪へ来た東も、東京へ向かった山口、横田も、ヨットスクールを出発してから、まる1日以上眠らないままの緊張が続いていた。

若者が脱走したことがわかった直後、コーチの東と横田は河和の合宿所を車で出発、深夜の名神高速を飛ばして、大阪の若者の家に真夜中すぎに到着した。

横田コーチは、その後若者が東京へ逃げていることが判明してから東京へ移動することになるのだが、この時点では東に同乗して大阪へ向かっていた。

「息子が合宿所から真っすぐ家へ帰って来るようなことになると、私たち一家は皆殺しにされてしまいます」

と、脱走した若者の父親が悲痛な声で助けを求めたからである。

その若者は長髪、白面の優等生タイプで、体力はないが、策謀にたけていた。

戸塚ヨットスクール

どんな策略をめぐるかわからないので、コーチ2人が両親とOLの妹、計3人の家族の護衛に駆けつけたのである。

深夜、屈強なコーチが2人姿を現したのを確認すると、家族は張りつめていた気持ちがふっとゆるんだように、ヘナヘナとその場にすわり込んでしまった。

息子が脱走したという知らせを受けてから2人のコーチが到着するまでの数時間、一家3人はいつ息子が現れ、襲いかかってくるかもしれないという恐怖に、家じゅうの入り口や窓に鍵をかけ、文字どおり肩寄せ合ってそれぞれ入り口や窓の方を睨みながら、ガタツという音がするたびにハッと身がまえるという極度の緊張状態の中に置かれていたのである。

20歳のその若者は登校拒否症が極度に悪化し、悪質な家庭内暴力をふるうようになっていた。

はっきりと登校拒否を始めたのは高校に入ってからであるが、両親、とくに母親の記憶によると、中学に入る時に原因の1つが発生していたのではないかという。

父親はさる大手企業のかなり上の方の地位にあり、転勤が多かった。

小学校6年の時、一家は金沢市に住んでいた。情緒障害児の多くがそうであるように、この子供も成績がよく、勉強の好きな、まじめでおとなしい少年だった。

中学は金沢大学の付属を受け、見事にパスした。

付属は優秀な子供の集まる中学であり、本人も親も大変喜び、満足していた。

ところが、不運なことに付属合格の直後、父親が急に東京へ転勤することになった。父親にとってその東京転勤は栄転だった。

両親は悩んだ末、いったんは父親が単身で東京に赴き、残る家族はしばらくの間、金沢に住む別居生活をすることに落ち着いた。

が、父親が転勤と同時に胃潰瘍を患い、手術しなくてはならなくなった。父親1人を放っておくわけにはいかず、一家は東京郊外に住宅を求めて移り住み、子供はやむなく中学を入りなおした。

子供はこの時、付属中学を変わりたくないと強硬に抵抗し、東京の新しい学校へ行くのを嫌がった。後にして思えば、これが登校拒否、家庭内暴力につながる最初の大きな原因だったのではないかというのが母親の話である。

しかし、この子は中学では登校拒否を起さなかった。

勉強がよくでき、いうことをよくきく、模範的生徒で、近所の親たちは、

「ああいう子を友だちに持ちなさい」

と自分の子供に勧めるほどであった。

その1人に、今度、この若者が逃げ込んだ家の子供がいたのである。したがって、その後のことを何も知らないその家族が、逃げ込んできた若者のいうことを全面的に信用するのも無理からぬ話であった。顔立ちも、話す内容も、利発で育ちのよいかつての少年の面影を残している。肉親に対する時だけ、この若者の心がハイドに変わっていることを、外部の誰も気づいていない。

実は、このジキルとハイドこそが、家庭内暴力の特徴であるのだが……。

彼が高校へ入る直前、一家は東京から大阪へ移った。彼が登校拒否を始めたのは、高校入学後のことである。

自分で選んだ高校だったが、入ってみると自分が予想していたよりはるかに水準の低い学校だというのが不満蓄積の原因だと、母親はいつている。

それでも悲惨な家庭内暴力は、まだ起きはしなかったのだが……。

この若者が目を覆うような家庭内暴力をふるうようになったのは、本人が大学へ入ってからのことである。

高校の1、2年生の時には、時折り学校を休んだ。3年になると登校拒否がかなり激しくなり、3学期などは、ほとんど学校へ行かない状態だった。

それでも並の生徒よりはるかに成績がよく、大学は開高健の母校でもある大阪市立大学にストレートで合格した。

3年生のころ、すなわち他の生徒たちが受験勉強に懸命の日々を過ごしている時期、彼は昼間眠り、夜は番組が終わるまでテレビを見、それでも足りなくて深、深夜放送を聴きながら、マイコンをいじり回すような生活を送っていたのに、である。

大学の専攻は理学部数学科。

子供のころから計算にめっぽう強く、やがてマイコンいじりが3度の食事より好きになった。

「大きくなったら、何になるの？」

「IBMへ入って、コンピューターやるんだ」

この答えは、子供のころからずっと変わらなかった。

情緒障害に共通している特徴の1つを挙げると、数字にやたらと強くて、常識あるいは良識がおそろしく欠如しているということである。

戸塚ヨットスクールには、日常の言動、理解力、その他人間としての能力が、幼児と変わらない、知恵遅れのような中学生がまぎれ込んでいる。

ところがこの子は不思議なことに、誰が何番の番号のついたヨットに乗って海へ出たか、生徒の全員について見事に記憶している。

もう1人の若者は、日常的な行動については世間に出ると全く通用せず、使いものにならないが、数字のこととなると、2ケタ同士の掛け算がたちどころに出来るのである。

総じて、英、数、理、国、社の5科目、それもペーパーテストがよくできるのに実験や音楽、体育、家庭科などが極端にダメな子供、クイズと計算はできるが、応用と実務が全くダメな子供が情緒障害になりやすい傾向がある。

夫の地位や給料、貯金の計算にたけ、子供の試験の点数や成績、先生のことは必要以上に気にするくせに、家族にコロッケ、カレーライス、インスタントラーメンばかり食べさせるのは気にならず、掃除、洗濯がまるでダメというママゴンがいる。そうした大人たちが増えている社会だからこそ、情緒障害児が深刻な社会問題として浮かびあがってきているのだ——と専門家たちも指摘している。

脱走した若者はクイズとペーパーテストの社会が作りあげた「最も優秀な作品」なのかもしれない。

登校拒否、家庭内暴力..... (後)

母親の話によると、さしたる受験勉強もせず簡単に大学へ入学できたことがこの若者の不満をかりたて、さらに激しい登校拒否と家庭内暴力に向かわせたのだという。

「京大へ行く」

と彼はいいだした。

学校にも満足に行かないでいて大阪市立大学へストレートで合格できた自分の能力からすれば、京都大学理学部の合格は可能ならずであり、将来、IBMで出世するためにはやはり、市立大より京大でなくてはダメだということである。

この若者は、合格した市立大学に約3ヶ月ほど、行ったり、行かなかったりしたあと、予備校に入った。

そのために親は約30万円を支払ったという。

ところが今度は、その予備校へも行かなくなってしまった。こうなってくると、京大へ行きたいから市立大をやめたのかどうかも怪しくなってくる。情緒障害の人間は、自分が何もしないための理由と、それを他人のせいにする口実を次々に見つけ出す異常な才能を持っているのである。

コンピューターが好きだから、IBMに入りたい。IBMで出世するには市立大より京大が有利だ。だから市立大をやめ、京大受験のために予備校へ行きたい。

一見、理路整然としているかに見える。甘い親はこれにコロリとだまされてしまう。

ではなぜ、最初から京大に挑戦しなかったのか。彼は市立大という安全な場所に逃避したのではないか。逃避した自分に腹がたって、市立大をやめてしまった。だが、京大に受かる自信はもともとなかったから、予備校に行かず逃避したのではないか。

彼はもし京大卒業後にIBMに入り、出世できなかつたら、やはり東大出でなくてはダメだと逃げるだろう。

予備校に行かないことを親から指摘されると、彼はそれが親のせいであるという理由を作り出そうとした。

父親に向かって、予備校に行くための三条件を提示したのである。

- 一、勉強がしやすいようにマンションを買い与える。
- 二、車を買う。
- 三、月々30万円を支給する。

父親は彼が高校へ入る前に会社を勇退し、事情があつて東京の土地家屋を処分して一家は大阪の郊外へ移り住んでいた。退職金と土地家屋処分によって相当の資金を父親が持っていることを、彼は知っていたのである。

この若者はそれまでも理由を見つけては父親から金をせびり取っていたが、奇妙なことに彼はそのすべてを貯金し、キャッシュカードまで持っていた。

だが、父親もさすがに今度の要求は蹴った。

その答えが、家庭内暴力である。

この若者の家庭内暴力はなまじ知恵がまわるだけに、やり方が実に陰険だと、家族は嘆いている。

たとえば、夜寝ていると、布団の上からわざと手足をふんづけて通り過ぎて行く。それをとがめると、

「エッ?! ボク、何かしたのオ?」

と、わざととぼけてみせる。

洗った手についている水を廊下や障子にまき散らす。

そして、

「エッ?! だれがやったんだろう?」

と、またとぼける。

ささいな事のように思えるかもしれないが、これに類した神経をさかなでされるようなことを、毎日のようにやられると、家族は精神的に参ってしまう。

それに、むら気で、ついさっきまで家族となごやかに話をしていたと思うと、2、30分後には狂ったように暴力をふるう。

「バアさん、あいつ、きょうは会社に行かないらしいぜ」

ある朝、彼が2階から降りてきて母親にいった。

母親を呼ぶ時には、バアさん、ババア、くそババア。

父親に対しては、ジイさん、ジジイ、くそジジイ、オイ、こら。

親のことを第三者に向かっていう場合は、彼、彼女、あのヒト、奴(やつこ)さんたち……。

おやじ、おふくろといった血の通った呼び方は全く聞かれず、まるで他人のことを話しているように冷ややかである。

「あいつ」といわれたのは妹のことである。2人きょうだいで妹はOL。会社を休むというので、母親がどうしたのかと2階に上がって娘の部屋をのぞき、アッ！と立ちすくんでしまった。

ベッドの上に白眼をむいて倒れているのである。

あわてて119番。病院へかつぎ込まれて、命はとりとめたのだが、妹は、

「もう、家にはいたくない。兄さんが怖い！」

と、真っ青になってガタガタ震えていた。

兄が理由もなく突然襲いかかり、

「オレをバカにするのか！」

といきなり首をしめたのだという。心配した両親は近くに部屋を借り、娘を住まわせることにした。

すると今度は暴力の対象が母親に向けられる。弱い者順である。父親が止めに入るのだが、年老いた父親の力では20歳の若者に太刀打ちできず、投げ飛ばされてしまう。弱いと見てとると、父親にも襲いかかる。

殴る蹴るの暴行を加えたうえ、馬乗りになって首をグイグイしめつける。危険を感じた父親がやむなく110番。すると息子はサッと受話器を取り上げて、こういった。

「父が耐えがたい暴力をふるうので、正当防衛のためやむなく反撃を加えました——」。

両親はついにたまりかね、戸塚ヨットスクールの門をたたいた。新聞やテレビを通じて以前から知っていたのだが、死亡事故が起こるほど厳しくしごく所へ自分の子供を入れることには躊躇があった、と告白した。

「よろしく願います」

両親は校長の戸塚宏に頭を下げた。第三の死亡事故が起こらないという保証はなく、それが自分の子供ではないといいきることもできないにもかかわらず、彼らは自分の子供を厳しいしごきのなかへ投げ込もうとしている。

この家族も一家心中を思いつめた。そして、そこまで追いつめられてやっと、戸塚ヨットスクールへ入れるふんぎりがついた。

「死んだつもりになって、入れてみよう」

と両親は思ったのである。

「早ければ早いほど治しやすいんですがねえ」

つまり初期であるほどたたき直すための体罰は少なく済むと訪ねてくる親たちに戸塚はいつも残念がるのだが、ヨットスクールに連れてこられる子供たちは必ず、重症になってからである。

戸塚ヨットスクールの鉄拳は、いわば重症患者を蘇生させるための劇薬なのである。

ある朝、たまたま河和を訪れていた中年の婦人が海岸を散歩していた。

浜辺ではいつものようにヨットスクールの、朝の激しい体操が行われていた。容赦なく打ち込まれる鉄拳と足蹴り。「ハイーツ」と悲鳴をあげる子、「ご免なさい、許して下さい」と泣き叫ぶ子。情緒障害のひどい子ほど、大声をあげて逃れようとする。

婦人は思わず「暴力はやめなさいッ！」と大声で叫んだ。

「何もわからんくせに、部外者は黙つとれ！」

真っ黒に日焼けしたパンツ1枚の男が鋭く睨みつけたかと思うと、泣き叫ぶ子供を婦人の目の前で海へ放り込んだ。

「んまアッ！」

婦人は怒りに震えていた。

怒鳴りかえした男は戸塚である。まるで孤立無援の戦いを世間に対して挑んでいるかのように、こういう時の戸塚の目もまた、ギラギラと怒りに燃えている。

戦後民主主義教育のなかで暴力は悪であると信じきってきたこの婦人に代表される「社会正義」と、一家の生死、子供の再起を賭けた戸塚たちの闘いとの間には、あまりにも、大きな断層がありすぎる。

若者の両親もカウンセラーの所へ通い続けていた。

「子供さんが学校へ行かないからといって、驚いたり、無理に行かせようとせず、子供さんの気持ちになって、心を開いて話し合しましょう……」

こんなアドバイスを受けているうちに、子供は悪化の一途をたどっていたのである。

「あいつ、逃げたのか！」

「なにッ、キツネもいない!？」

コーチたちが騒ぎだしたのは、若者が戸塚ヨットスクールに預けられて3日目の夜だった。

夕食後、みんなが風呂へ行っているすきに若者は脱走した。風呂は、近くにある『角屋』という旅館の好意でもらい湯をしているので、全員が1度に出かけると、合宿所は一時留守になることがある。

実はその日の夕方、若者を理髪店へやった。頭を丸坊主にするためである。

彼は面長な白い顔にパリリとたれ下がった長髪を手でかき上げるのが、得意のポーズだった。

ヨットスクールへ連れてこられる情緒障害の子供たちにとって、頭髪は残された唯一のおしゃれ、プライドの象徴であることを戸塚は訓練の過程で発見していた。

服装は貧富の差なくトレーニングウェアにゴム草履。食事も全員同じ釜のめし。寝る時は20畳余の広間に全員寝袋でゴロ寝。

合宿所の広間ほどもある個室を与えられていた社長令嬢も、月々15万円の小遣いをもらっていた医者の子息も、女中にかしずかれていた大商店の子供も、いったんヨットスクールの門をくぐると「出来そこないのガキども」としてしか扱われない。家柄や財産、試験の成績で肩ひじはろうとしても、せせら笑うだけで誰も相手にしてくれない。

ところが、唯一つだけ頭髪が残されていた。

長い髪と、その型にプライドのよりどころを求めていることを戸塚は知った。

「男は丸坊主だ」

と戸塚は考えた。

この若者にとっても、青白い面長な顔にパリリとたれ下がった長髪と、それをかき上げる仕草は、育ちと成績のよさを誇示することのできるよりどころだったに違いない――。

ところが、あいにく理髪店は満員だった。やむなく合宿所へ帰ってくると、みんな夕食を終わったところだった。

理髪店へ行かせる時から「キツネ」と呼ばれる先輩格の合宿生を見張りとして同行させていたので、みんな安心して風呂に出かけた。

その留守に、若者とキツネは夕食をかきこみ、脱走したことを、風呂から帰ってきたコーチたちが発見したのである。

「主謀者は新入りの方だな」

「キツネはうまくたづらかされたんだろう」

コーチたちはそれぞれに推測した。知恵の働きでは、中学も出ていないキツネは大阪市立大学数学科の足元にも及ばない。

コーチたちはただちに手分けして出発、深夜に及ぶ捜索が開始された。

ヨットスクールでは、直ちに脱走した2人の保護者の所へ電話連絡をとった。

大阪の若者の父親は悲鳴をあげた。

「殺されます！あの子が戻ってきたら殺されてしまいます！」

親が、自分の子供の復讐を恐れているのである。

家族を護衛するため、ヨットスクールから東秀一、横田吉高の両コーチが大阪へ向けてすぐ河和の合宿所を出発した。

一方、北海道のキツネの家では叔父が受話器に頭をすりつけんばかりにして脱走をわびた。

キツネは戸塚の好意で面倒をみてもらっていた子供なのである。

もともと、キツネは戸塚の治療対象とは少し違った状態の子供だった。彼は気の毒な環境にあった。

母親は知恵遅れ。病弱ではないが働く意欲が全くなく、家の中は汚れ放題、荒れ放題になっている。父親はそんな家庭をきらって蒸発してしまい、行方が全くわからない。

叔父がその家に行ってみて驚いた。

薄暗いあばら屋のなかで、母親が敷き放しのフトンに放心したように横たわり、そのそばで幼い兄弟がうずくまっていた。父親が蒸発して、母親が働かないのでは生計が成り立つわけがない。

最低限の食糧とされる米とミソさえ全く残っていない状態だった。

以来、この家族は生活保護を受け、理髪店を営んでいる叔父がいつさいの面倒をみることになった。

この叔父はキツネの母の兄に当たるが、叔父自身、4歳にして食いぶちを減らすために里子に出され、辛苦の末にやっと一人立ちできるところまでこぎつけたばかりである。

自分の家族の他に、寝たきりの母親と2人の子供の面倒をみるのは容易なことではない。

一家の世話をするようになって数年たったある日、叔父はテレビで戸塚ヨットスクールのことを知った。

妹の方はどうにか学校へ行っているのだが、中学生になっていた兄は母親の影響を受け、ブラブラしていて、学校へ行かない。

叔父としては、早く中学を卒業して、せめて自分の生活費くらいは稼げるようになって欲しいというのが正直な心境だった。

叔父が家庭の状況など詳しい事情を書いて手紙を出したところ、校長の戸塚から無料で預かりましょうという返事が届いた。

「オイ、ジェット機に乗ってみたいかないか」

「うん、乗ってみたい」

無気力な子供の目が一瞬、輝いた。

「それじゃ、乗せてやろう！」

ヨットスクールがどんなところか、子供が知ろうはずがない。

叔父に連れられ河和の合宿所にやってきたキツネは無気力な子供だった。知能も、知恵遅れというほどではないが、あまり高くない。

知恵遅れの母親の所で、学校にも行かずに暮らしていたのだから、ふつうの能力を持った子供でもおかしくなる。

何をやらせてもクズで、ダメな子供だった。

ゴロゴロしていたせいか体力がなく、1時間の激しい体操など、たちどころにへばってしまう。

汚い家に住んでいたから掃除の仕方も知らない。まして、ヨットの組み立て、操縦といった技術を要する作業には歯も立たない。

彼もまた厳しいしごきを受けた。

だが、戸塚をはじめ各コーチたちが辛抱強く、その激しい訓練を繰り返していくうちに、キツネの状態はある時点から目に見えて好転し始めた。

4カ月目に入ると、最初連れて来られた時の無気力な婆がウソのように変わり、

「オイ、キツネ！」

と戸塚やコーチたちから声がかかって、用をいつけられるまでになった。他の生徒たちのまとめ役、新入生の見張りなどである。

戸塚やコーチが声をかけ、用をいつけなくなるような子供は、そろそろ親元へ帰すことを検討される対象者である。

「預かってやった甲斐があったな」

戸塚はコーチたちと満足げに話し合った。

キツネが学校へ行かず、無気力になったのは知恵遅れの母親、父親の蒸発、貧困と原因がはっきりしていて、戸塚ヨットスクールが対象としている情緒障害、つまり、豊かな社会が生み出した原因不明の現代病とは異質である。

にもかかわらず戸塚が引き受けたのは、貧しさが生み出すダメな子供もだれかが立派にして世に送り出さなくてはならないのだから、事情の許すかぎり受け入れようとかねがね考えていたからだった。

戸塚ヨットスクールには、無料で訓練を受けている貧困家庭の子供が常時何人かいる。

そして、

「そろそろ、キツネの就職を考えてやらにゃいかんなあ」

と、戸塚やコーチは話し合っていたところだった。

叔父からもどこか適当な就職先を世話してもらえまいかと頼まれ、知人たちに探してもらっていた。

その矢先の脱走。

今まで何度チャンスがあっても逃げなかった模範生が脱走したのだから、誘い込んだ首謀者はよほどの知恵者なのだろうが、キツネを信頼しきっていただけに、戸塚やコーチたちの落胆は大きかった。

脱走してから2日目の夕方、キツネの方が先に、叔父に伴われて合宿所へ戻ってきた。

「コラ！信用を失うのは簡単だが、もういっぺん築くのは大変だぞオ。わかってるのか！」

開口一番、コーチの可児熙允(ひろみつ)がいった。キツネはその意味がわかったのか、わからないのか、キョトンとした顔をして正座している。

キツネと一緒に逃げた若者と東京で別れ、その若者の元同級生の家で恵んでもらった金で上野から青森まで汽車、青森から青函連絡船で函館へ渡った。連絡を受けた叔父は、到着時間不明のため、夜から一睡もしないで函館の連絡船到着口に張り込み、朝方、フワフワと降りてきたところを発見して、飛行機で連れ戻したのだという。

キツネが戻った翌日未明、逃げた若者が横田吉高、山口孝道両コーチに両脇を固められて連れ戻されてきた。真夜中少し前に東京の元同級生宅を出発、暴風雨の東名をタクシーで河和まで走ってきたのである。

元同級生の父親も最後には折れて、若者を両コーチに引き渡した。最後には若者本人が電話で大阪の父親に1時間にわたって訴え続けた。

「お父さん、ボクは東京で働き、自活するという形でつぐないをしたい。あなたはどうしてもボクにリンチを受けさせ、復讐したいのか」

身勝手な言い分だが、知らない者にとっては説得力のある迫り方であった。同級生の父親は震えながら耳を傾けていた。

だが逆に、息子がそこまでいうのを実の父親が蹴ったというのは余程の事情があるに相違ないと、元同級生の親は感じたらしい。若者から受話器を受け取ると、大阪の父親に向かって、

「では、あなたがいったとおりにしていんだね？」

と念を押した。ヨットスクールに渡すぞという意味である。

「お願いします」

と大阪の父親はしっかりした口調でいった。

「お前は、自分のやった事の重大さをわかっているのかッ！」

合宿所へ連れ戻された若者に可児コーチがいった。

可児ともう1人の加藤忠志コーチはこもごもキツネの家庭の事情、戸塚の好意によって面倒をみてもらい、立ち直る寸前であったことを教えたうえで、可児が再びいった。

「お前は立ち直りかけていたキツネの人生をだいなしにしてしまったんだ。その責任をどうやってとるつもりなのかッ！」

若者は黙ってうつむいた……。

2人の脱走は多くの人々を振り回した。

東、横田、山口の3コーチは西に東に駆けまわり、留守をあずかったベテランの可児、加藤両コーチも徹夜の態勢で各方面に指令を出していた。2人が戻ったあと、各コーチは海に出るまでのわずかな時間を、綿のように眠った。

合宿所に連れ戻された若者とキツネの2人の脱走者は厳しい調べを受けた。

2人の逃亡の経緯を追うと、情緒障害の実態が社会にいかにも認識されていないかが浮き彫りにされる。金属バット殺人、祖母殺し、パリ人肉事件、数々の通り魔事件などが情緒障害者による犯行の可能性があるだけに、背筋に冷たいものを感じる。

2人は河和から東京へ、ヒッチハイクで3度、車を乗り継いでいるが、3度とも、自分たちがヨットスクールでいかにひどい暴行を受けたかを切々と訴え、助けを求めている。しゃべったのは常に若者である。キツネにはそんな才覚はない。

車の人たちは3人も、いたく同情して乗せてくれ、うち2人はそれぞれ2千円をとりあえずの食事代として恵んでくれている。

そして、キツネを伴った若者は元同級生の両親に対しても同じことを訴え、両親は一時、それを信じた。

2人を調べていたコーチの加藤忠志はその若者に向かっていった。

「みんなに何といったのか、正確にもう1度いうてみ！」

若者はその気迫に気圧(けお)されていいよどんでいたが、加藤に再度きつく促され、

「耐えがたい暴行を受けた、といました」

と告白した。

まわりにいたコーチたちがいっせいに立ち上がり、

「耐えがたい暴行とは、こういうことかッ！」

といいざま、強烈なパンチを相次いで若者に打ち込んだ。

「痛いッ！暴力はやめて下さい！」

と悲鳴をあげて逃げようとする若者。

「そうか、痛いか」

コーチたちはなおも容赦しない。

「お前が半殺しにしたお父さん、お母さん、妹はもっと痛かったんだ。わかったかッ！」

加藤コーチは、

「お前はみんなに大ウソをついている」

といいながら若者の目を睨みすえ、机をドンとたたいた。

「自分が親きょうだいを半殺しにした凶悪犯だということだけは、誰にもいわなかったろう、このひきょう者めがッ！」

若者は目元をピクピクと引きつらせ、下を向いた。

戸塚ヨットスクールがもし「戸塚精神病院」の看板を掲げ、戸塚やコーチたちがドクターの免状を持っていたら、世間は躊躇(ちゆうちよ)することなく逃亡した者を病院へ引き渡すであろうし、逃亡者たちのいうことを信じもしないであろう。

情緒障害の持つ危険性と悲劇は、家族に対しては狂気と選ぶところのない狂暴性を発揮するにもかかわらず、他人の目には全く異常が感じられないところにある。

だが、キツネは再び脱走した。そして、ヨットスクールには戻ってこなかった。

2度目は、北海道の叔父に連れ戻されてから数日後である。

理由は容易に想像できる。

キツネは北海道までたどり着いた時、ほんのわずかだが母親と妹に会っている。働く意欲のない、知恵遅れの母親であろうと、中学の子供にとって母親と家が恋しくなかるうはずがない。

さらに、脱走者に対するヨットスクールのペナルティーはひととき
苛烈である。キツネは矢も楯もたまず、心が北海道へ飛んだに
相違ない。

2度目の脱走から3日目に、愛知県警岡崎署から合宿所へ、
「子供を保護しているから引き取りに来るように」
との連絡が入った。

キツネだった。

河和からフラフラ岡崎市まで行ったところを補導・保護された。
警察が北海道の叔父の家に連絡すると、ヨットスクールへ帰らせ
て欲しいとの依頼だったのである。

コーチの東秀一ら4人が岡崎署へ向かった。ところが着いてみ
ると、引き渡せないという。北海道の叔父から電話が入り、キツネ
の母親が返して欲しいといっているの、自分がこれから引き取り
に行く態度を変えたのである。

「そんなバカな！」

と東らは食い下がったがダメだった。

「キツネにつままれたみたいやなあ」

東らの報告を聞いて、だれかが冗談をいったが、戸塚もコーチた
ちも笑わない。

「なんということか」

「子供を育てられなかった母親。義務と責任を放棄した母親に、
子供を返せという権利はあるのかね」

「せっかくここまで良くなったのに、キツネのヤツ、またダメになっ
てしまうんじゃないだろうか……」

コーチたちの表情は怒りとも失望ともつかず、複雑である。

「もういい、忘れよう！」

戸塚が無然(ぶぜん)として、いった。

無料で引き取って立ち直らせ、就職と学校の世話までしようと
している気持ちを裏切られた無念な思いを懸命に抑えているかの
ようであった。

"自殺"から立ち直る少年

「ごめん下さい！」

女性のはずんだ声が、2階のコーチたちの部屋に聞こえたのは、
戸塚やコーチたちがキツネ逃亡事件で悄然(しょうぜん)としている
時である。

合宿所の入り口に、自転車に乗った少年が、母親くらいの年
齢の女性に伴われて立っていた。

「この子供さん、ヨットスクールを探してみえたので、お連れしたん
ですよ」

応対に出た校長の戸塚宏に、その女性はいった。

合宿所は名鉄河和線の終点、河和駅から歩いて5分ばかり
のところにある。その女性は河和駅の近くで自転車に乗った少年
に道を尋ねられ、わざわざヨットスクールまで連れてきてくれたのだ
という。

母親のように見えたのだが、違っていた。

とすると、少年は1人でやってきたというのか！？

「1人で来たのか？」

と戸塚は尋ねた。

少年はコックリとうなずいた。

子供は、情緒障害児を見慣れた戸塚の目には、明らかにそれ
とわかる顔つきをしている。目は周囲に敏感に反応してクルクルと
回る動きをやめてしまい、無感情にとろんとよどんでいる。顔は色
が青白く、表情がない。身のこなしに、どことなくキビキビとしたと
ころが感じられない。言葉数が少なく、歯切れがよくない。

「情緒障害の子供が……1人で……オレの所へ……やってき
た……」

戸塚は心のなかでつぶやいた。自分の心臓の鼓動が急に早ま
るのが感じられた。彼は明らかに興奮しているのである。

「お父さんか、お母さんにいわれて来たのか？」

少年は黙ったまま、首を横に振った。

「それじゃ、キミが自分で来ようと思ったのか？」

「ハイ」

と少年は、小さいが、しかしはっきりとした声で答えた。

「信じられん！」

戸塚はまた心のなかでつぶやいた。

情緒障害の子供が自分の意思によって、1人でスパルタ訓練を受けにやってきた——これは戸塚が情緒障害児を治すことを目的としたヨットスクールを開いて以来、初めてのケースであり、奇跡に近い驚きであった。

だれだって、殴る、蹴るの厳しい訓練を好んで受けたい、受けさせたいと思う者はいない。

出来得れば安易な方法で治すことはできないかと迷うからこそ、生きる死ぬの極限状況にたち至るまで、戸塚の門をたたかないのである。

それだけに、この少年の闖入(ちんにゅう)は、面倒をみてやったキツネと、その家族によって味わわれた戸塚たちの失意と怒りと憂鬱を忘れさせてくれるに十分なハブニングであった。

少年は、繊維で知られる愛知県のある都市の家を夜中の1時に出発して、道に迷いながら約10時間、自転車で走り続け、河和にたどり着いたのだった。

「両親の許可は得てきたんだろうね」

中学3年になるという少年に戸塚は尋ねた。

「……」

「どうなんだ」

少年は首を横に振った。

「両親はここへ来ることに反対なんです」

「どうして……」

と聞こうとして戸塚はやめた。理由はだいたい想像がつくからである。

「暴力をふるうし、死亡事故が起こっているような所へは行くなというんだろ」

「ハイ」

と少年は素直に認めた。

「そんな所へ、どうしてキミは来る気になったんだ」

「あのウ……ボク、自殺をしようとしたんです」

「なにイツ!？」

聞いている方がギョツとするほど平然と少年は語っている。

「それで、死にきれなくて……だけど、地獄を見たんです。自分がゴキブリになって、みんなにいじめ殺されているところや、家族や友だちから、"お前のようなやつは、いなくていい"と追いたてられているとこやなんか……。

で、死んでもこんなに苦しむんだったら、死んだつもりになって、自分を苦しい訓練のなかにほうり込んでみようと思って。

あのウ、自分が甘えていること、わかっているんです。だから、そんな自分をメチャメチャに、粉々にくだいてしまいたくて……」

寡黙だった少年が憑かれたように語り始めていた。情緒障害の少年が自分の心の動きを語るのも稀有(けう)な出来事である。

戸塚ヨットスクールへ連れてこられる子供たちのほとんどは重症である。彼らはヨットスクールへ連れてこられること自体に抵抗している。まして、自分がなぜ連れてこられることになったかなど、語ろうはずがない。

話は親から聞くほかないのだが、それはあくまでも親の見方、親の感じ方であって、肝心の子供がどう思い、どう感じているか全くわからない。

理由を説明することなく登校を拒否し、理由を説明することなく親に暴力をふるう。

ある日突然の、理由なき反抗——。

周囲の目には、情緒障害はそう映るのである。

そんななかで、この少年は自らの意思でドロ沼からの脱出口を見つけようと試み、自ら情緒障害の心象風景を語ろうとしている。

「兄たちは2人もちゃんと大学へ行って、1番上の兄は東京で就職していますし……変なのはボクだけだから、家ではボクのことを気ちがいだというんです。ボクだけがヘンで、気ちがいだといわれて……。だから、精神病院へ連れて行かれたんです」

少年は淡々と語り続けた。

「1週間に1度、行って、注射を打ってもらうんですね。その時は気分がおさまったのかなア……いや、あまり変わらなかったみたい。でも、ボクは怖くなったんです。こんなことを続けていると麻薬患者みたいになってしまうような気がして。で、病院へ行くの、やめてしまったんです。数か月、通ったかな。家族は続けて通えといったんですが、ボクはどうしても行きたくなかった。すごく抵抗して、やめてしまいました」

ほとんどの親は、新しい心の病気である情緒障害がどういうものであるか、どこへ行けば自分の子供に最もふさわしい治療を施してもらえるのかを知らない。

まず手近な街の精神科医へ相談に行くところから、情緒障害との苦闘がスタートするケースが多い。

この少年も同じような過程をたどっている。

「あのウ……ボク、以前にも1度、自殺を図ったことがあるんです……」

少年は考えながら、ゆっくりと、しかし感情の動きは全く見せずに語り続ける。

「中学2年の時です。2階の屋根から飛び降りました。理由はなんだったかなア……でも、足の骨を折っただけ。本当に死ぬ勇気がなかったんですね……」

母さんが、ある宗教団体の女の人を連れてきてくれました。その人は何度も自殺を図ったことがあるのだけれど、その宗教団体に入って、いまは立派に生きているといっていました。

それで、父とボクがその宗教団体へ入りました。ボクのヘンなのを治すためです。母さんは以前から入っていました。

でも、毎日、お経を唱えないといけないでしょ。そうしないとバチが当たって、ますます悪くなるゾっていわれたんです。なんとなく、

怖くなって……それなら初めからやめとこうと思って、ボクはやっていません。

父さんと母さんはボクが治るように一所懸命やってくれていますが、でも、少しもよくなりませんでした。

そんな時、ヨットスクールのことをテレビで見たんです。1年くらい前だったかな……」

少年はすぐ、ヨットスクールへ行きたいと父親に訴えたのだが、聞きいれてもらえなかった。

第二の死亡事故が起こった直後だったからである。

よほどのことがないかぎり、死ぬかもしれないような危険な所へ可愛い息子を送りたくないと思うのは、親として当然のことである。

テレビでヨットスクールのことを知った少年はすぐ、

「行こう」

と思った。

自分が学校に行けない理由は意志の弱さにあると思っていたからである。

「ぜひ、行かせて下さい」

と少年は両親に頼んだ。

だが、親は頭から認めなかった。暴力によって鍛え、しかも死者が出ているような所に、とんでもない、というのである。

彼はやむなく、諦めたのだが、ヨットスクールのことはそれ以後もずっと頭を離れなかった。

その後、少年の症状は徐々に悪化していった。

部屋を暗くして閉じこもる。自分の手で頭をガンガン殴る。壁に頭をぶつける。教科書をどろどろに破いてしまう。だれもいない所でウォーツと叫び声をあげる。

どうしようもない自分の気持ちを抑えかねて、夜中に外へ飛び出し、思いっきり駆け足をして、やっと気分をしずめることもあった。

自分の気持ちをわかってくれない父や母に復讐したい衝動に襲われた――。

本人は自覚していないが、これは家庭内暴力の予兆である。

少年は、何とかしなければ、と、日々あせっていた。

しかし、あせっても何もすることができない。ダメな人間だ、と、ますます自分を追い込んで行く。

そしてついに、2度目の自殺を思い立った。

今度は絶食である。

一食、二食、三食、食事に呼ばれても自分の部屋から出ず、母親が食事を運んできてくれても手をつけない――。

あせりと空腹のなかでおそらく夢を見たのだろう。少年はそれを「地獄を見た」と表現している。

彼は死んでも天国には行けなかった。地獄で彼はゴキブリになり、家族や友人や先生、級友たちみんなに、いじめ殺されようとしている……。

「いやだ、死にたくない！」

と叫んだと思った瞬間、目が覚めた。胸が締めつけられていたように重苦しかった。

「死んでもあんなに苦しむんだ。それなら厳しいシゴキのなかに自分を放り込んで、精神も肉体も粉々になるまでいじめてみよう」

彼はふと、ヨットスクールのことを思った。

机の上の目覚まし時計を見ると、時間は真夜中を回っていた。あたりはシーンと静まりかえっていた。父も母も兄も、眠っているようである。

身支度を整えた少年は足音をしのばせて外に出、自転車に乗って夜の闇へこぎ出した。

どれだけ眠ったろうか。

ひんやりとした冷気を感じて、少年は目を覚ました。あたりはうっすらと、夜が白みはじめている。身体を横たえているのは山の中の、道路わきの草むらだった。記憶がだんだん、よみがえってきた。

道に迷ったのである。

彼は地図をたよりに、自転車を走らせていた。分かれ道になると地図を開いて河和への方向を確かめていたはずである。それがいつの間にか、行けども行けども河和への標示のない山道に迷い込んでしまった。

腕時計を見ると、午前3時半を指している。

鬱蒼(うっそう)と茂った木々が一面の暗やみのなかで怪物のように迫ってくるように感じられる。

車は1台も通らない。時折り吹き抜ける風のたてるさわさわという音が、不気味さをいっそうかりたてた。

「怖い」

少年は、家を出てから初めてそう感じた。

自転車を道路わきに止め、自分は草むらのなかに身を隠すようにちぢこまった。息をこらして、じっと怖さに耐えていたが、いつの間にか眠りにおちてしまった。

家を出てから走り続けてきた疲れが、少年の小さな身体を襲ったのである。

目を覚ました少年は再び地図を開き、もと来た道の方へ、山道をくだって行った。しばらく走ると、やがて大きな道路に出た。トラックが1台、全力で近づいてくるのが見えた。

少年は道の真ん中に出て、両手を大きく広げた。ギギーッとタイヤのきしむ大きな音をたてて、トラックが止まった。

「あのう……河和へ行く道は……」

少年はおずおずとして尋ねる。

おっかない顔つきの運転手は一瞬、怪訝そうな表情を見せたが、「オレの行く方向だ。この道を真っすぐについておいで」

顔に似ずやさしくいうと、エンジンをいっぱいにかかして走って行った。

少年は、トラックの巻き上げて行く砂ぼこりの跡を追って、またペダルを踏んだ。古びた自転車のペダルは、ギイギイと苦しそうな音をたてて重かった……。

少年の家には父の乗る車が1台、兄のオートバイが1台、自転車車が2台あったが、彼は新しい自転車を家族のために残し、自分は古い方に乗って家を出た。

情緒障害の特徴は自分勝手に他人に対する思いやりのないことだが、この少年は家族を思いやる心のゆとりがまだ残っている間に、自らドロ沼を抜け出そうと試みる行動を起こした、珍しい例である。

「母さん、ぼうずが、いない」

父親が妻を起こして、いった。

「エエッ！」

母親は床からガバツと跳び起きた。

午前6時ごろ、父親はなんとなく息子のことが気になり、2階の部屋を見に行った。やたら開けると息子はすごく怒るので、そつと様子をうかがっていたが、部屋の中に人のいる気配がしない。

「オイ！」

父親が呼んでも返事がない。

開けてみると、やはり姿は見えなかった。部屋の中はきちんと整理されている。

2階には、大学へ行っている、すぐ上の兄の部屋もある。しかし、彼も弟の姿が見えなくなっていることに、全く気づいてはいなかった。

「また、あそこでは……」

両親も兄も、3人が一様に思い浮かべたのは、手洗いであった。

少年は、父親が学校へ行けとムリヤリ引っ張り出そうとすると、手洗いに入り込んで中から鍵をかけ、籠城(ろうじょう)することがよくあったからである。

だが、今度は手洗いにもいない。

3人は手分けをして家じゅうをくまなく捜したが、やはり少年の姿は発見できなかった。

近所を捜し回っても、いない。

「お前に何かあったか」

父親は兄に尋ねた。

「いや、何も聞いていない」

と大学生は答えた。

古い自転車が1台なくなっているから、それに乗って行ったことはたしかのようである。

母親は少年の衣類を調べてみたが、着替えを持ち出した様子もない。着替えを持たずに家出をしたとなると――。

「まさか、あの子……」

と母親は顔をくもらせた。

「そんなはずはない！」

父親は妻の不安を打ち消すように強くいった。

2人とも自殺のことを心配していたのである。

「しばらく待ってみよう。警察に保護されているかもしれない。それでも、どこからも連絡がなければ、捜索願を出さなくてはならないだろう。何かあったら、すぐ連絡をくれ」

そういい残して父親は会社へ出かけた。大学生の息子も夏休みのアルバイトに出かけた。

母親は1人、息を殺して、息子の無事を祈った。

「リン」と、電話のベルが鳴ったのは昼少し前である。

母親はあわてて受話器をとった。

「もしもし、もしもし……」

電話は戸塚ヨットスクールからだった。

子供が1人で来たので、預かっている、という連絡である。

母親は子供が無事生きていたことを知ってホッとした。しかしまた、なんで戸塚ヨットスクールのような所へ行ったのだろう？

今度はそちらの方が心配になってきた。

少年は以前にも戸塚ヨットスクールへ行きたいといったことがあり、一家は戸塚ヨットスクールの名前も、そこがしごきのような厳しい訓練をして、死亡者の出ていることも知っていたのである。

母親からの連絡を受けて、父親は会社から、兄はアルバイト先から、すぐ家へ戻ってきた。

「そんな所へやっちはいかん！早く連れに行かんと……」

強い調子でいったのは大学生の兄である。

母親も兄のいうとおりだと思った。

「……」

父親はちょっと考え込むような複雑な表情を見せたが、おとなしい彼は兄や妻の意見に強いて反対しなかった。

一家はすぐ、河和へ向かった――。

そのころ、少年は早くも海に出て、ヨットに乗っていた。

気の早い戸塚宏は、少年の話を知るとすぐ、

「よし、来い！」

といて海へ連れて行き、他の生徒たちと一緒にヨットに乗せた。

河和の合宿所に着いてすぐヨットに乗せてもらえるというのは、異例のことである。

重症になってからいやいや連れてこられるほとんどの子供たちにとっては、まず厳しい監視を受けながら狭い押し入れの中で第一夜を過ごし、翌早朝は激しい体操としごきの洗礼を受け、そしてまた、いやいやながら海に放り出されるどころから合宿生活は始まるのである。

少年に対する異例の対応は、彼が登校拒否のドロ沼からはい上がりうと、1人ではるばる自転車で乗ってヨットスクールを訪ねてきたことに、戸塚がいかにも感激したかを物語っていた。

帆に風をはらませて颯爽(さっそう)と滑って行くヨット、転覆して海中に放り出される少年たち、コーチの怒号……。

自らすすんで来たとはいえ、少年にとって目の前で展開される光景は想像をはるかに超えるものであり、彼は自分の感情を整理できずにとまどっていた。

しかし、どこまでも広がる広い海と帆を吹き抜ける潮風の匂いは、家の建てこんだ自分の街では味わえない爽やかな感じを少年に与えていた。

その街から、家族が自分を連れ戻しに向かっていることを、少年はまだ知らなかった。

「いやだ。ボクは帰らない」

少年は小さな声だが、はっきりした口調でいった。

家族の話し合いは1時間以上にわたって続けられていた。

ヨットスクールから連絡を受けた両親と大学生の兄の3人が、自分たちの住む愛知県内の街から名鉄電車に乗って河和に駆けつけてきたのは、少年が自転車で到着した日の夕方近くである。

「これは、ひどい所だ」

合宿所を訪れる家族の多くがそう思うように、彼らも廃屋のように古びた建物と雑然としたたたずまいに驚き、死亡事故、リンチを加える暴力教室といった、すでに抱いているイメージと重なって、

「こんな所へ子供を置いておくわけにはいかない」

と思うのである。

ぜいたく病でもある情緒障害の子供のほとんどは、クーラーが付き、家族から隔絶された快適な個室を与えられるといった環境のなかで育っている。

それがごく当たりまえになっている今日の家族たちにとって、合宿所が異様なショックを与えるのもムリからぬ話である。

それでも親たちの多くは、その驚きを言葉にしないまま飲み込んでしまうのだが、なかには、

「個室はございませんのかしら」

「あの子は毎日でもいいくらいステーキが好きですよ」

等々の感想を述べる率直な母親もいる。

一方、戸塚にしてみれば、だからこそ、そうした子供たちを鍛え直すには粗衣粗食の環境が必要だとの信念をますます強めることになる。

「ステーキで家庭内暴力が治るのなら、帝国ホテルへ連れて行かれたらいかがでしょう」

社交辞令をきらう戸塚は平然と喋るのけるのである。

「これは困った雲行きになってきたぞ」と留守を預かるコーチたちは思った。

最初はおたくに抵抗していた少年も、兄と母親の強い説得に、心が大きく揺れているようである。

都合の悪いことに、校長の戸塚は用ができて合宿所を留守にしていた。

1人でやってきた少年を預かると決めたのは校長の一存である。自分が留守の間に連れ帰られたとあっては、彼もがっかりするだろう。

が、保護者の意思を無視するわけにはいかない。

「校長がいてくれればなあ」

とコーチたちは思った。

「オイ、帰るぞ！」

兄に促されて少年はしぶしぶ歩き出した。

「お騒がせをしましたが、連れて帰ります」

と父親がいった。

「戸塚先生、たいが時間がかかるとるねえ。うまくいってるんだろうか……」

河和から家族に連れ戻された少年の家の前。後部座席の母親を、運転席の娘が振り返った。

「奥さんとお兄さんが強く反対しているといってみえたから、難航しとるかもしれん。うまくいくといいんだがねえ」

母親も心配そうに答えた。

戸塚が少年を連れ戻した両親を再び説得するために家の中に入ってから、かなりの時間が流れていた。

河和で『角屋』という旅館の女将をしている姉から、妹であるこの母親のところへ、戸塚が少年を連れ戻した家族の説得に向かうから何かと力添えをよろしく、という電話が入ったのはその日の朝である。

姉妹は繊維で知られるこの市の素封家に生まれ、姉は徳川時代から河和に続く老舗の旅館に、妹はこの市で手広く建築業を営む家に嫁いでいた。

『角屋』の主人、つまり姉の夫、岩本鋼一は町会議員7期、副議長をつとめる町の実力者だが、早くから戸塚の仕事に刮目(かつもく)し、死亡事故が起こった時にも教育委員長をつとめる医師の辻顕吉とともに、陰に陽に戸塚を支援した。

この市で民生委員をつとめる妹の一家も姉たちから戸塚の話を知り、登校拒否や非行で前の学校を放校され、ヨットスクールで立ち直った生徒たちを新しい学校に受け容れてもらうべく走り回っている。

無類に世話好きなこの一族は戸塚のよき理解者であり、死亡事故によって世間から批判と冷たい目を向けられたヨットスクールにとって、心強い支援者である。

この日も、姉の連絡を受けた妹は、娘の運転する車で戸塚を少年の父親の会社に連れて行き、さらに少年の家まで案内してきた。

戸塚は前日、外の仕事から帰って少年が家族によって連れ戻されたことを知り、すぐ、この市へ家族の説得に向かっていたのである。

まず会社に父親を訪ねたのは、コーチの報告から父親が少年の立場を理解しているようだと判断したためである。

「子供は自分で立ち直ろうと苦しんでいるのだ。その足を引っばるようなことを親はしてはいけないうんじやないだろうか。費用もご心配はいりませんから、まかせて下さい」

と戸塚はいった。

前日、少年を連れ戻しに来た時から1人思い悩んでいるふうだった父親は、戸塚の言葉に決意を固めたようである。

「よろしく、お願いします」

と、父親は頭を下げた。

しかし、問題はその後控えていた――。

父親はヨットスクールに息子を預ける決意を固めると、会社から自宅へ電話を掛けて本人を呼び出し、

「これからすぐ行くから支度しておくように」

と告げた。

ところがこの時点で、強く反対している大学生の兄と妻は、そのことを知らされていない。

父親の車に先導されて、彼の会社から自宅へ向かう車の中で支援者の母と娘が、

「先生、よかったですね」

と父親の説得成功をねぎらったのに対し戸塚は、

「いや、これからが本番のようですよ」

と答えた。

事態は戸塚の予想どおりに推移した。

父親は自宅に帰ると少年だけを呼び、

「先生の所へ、ごやっかいになることになった。がんばって来い」

と激励した。

少年は黙ってうなずいたが、少しも、うれしそう顔をしなかった。

せっかく自分で意気込んでヨットスクールへ行ったのを連れ戻しておいて、大人は身勝手だと思ったのかもしれない。彼は後に父親を優柔不断だといっている。

息子の気持ちを理解しながら、それを強く主張できない父親としては、戸塚が説得に来てくれたのを奇貨として、妻と兄の反対を一挙に押し切ろうとしているのである。

一方、戸塚は、

「責任をとらない連中が出しゃばりすぎるから、世の中がおかしくなっている」

という考えの持ち主である。

戸塚ヨットスクール

今回も家族3人の関係を承知のうえで、意識的に父親とだけで話をつけようとしている。

発言は平等――というのが、一般通念と信じられている社会と折り合うはずがない。

「では、出かけようか」

という雰囲気になっているところへ、母親と兄が出てきた。

「どういことでしょうか」

と母親が聞いた。

戸塚は一瞬ムツとした様子だったが、父親を説得した時と同じような話を繰り返した。

「しかし、この子は今度こそ学校へ行くといっていますし……」

と母親はいった。

「これまでも同じことをいいながら、やはり行かなかったろうが……」

と小さな声でいう父親を無視して、大学生の兄は戸塚を指さしながら、

「いやがる子供を連れて行って、あなたは治す自信があるんですか！」

と詰問するような口調でいった。

戸塚は、クドクド口をはさむ少年の母と兄の態度に激怒し、

「もういい。帰る！」

と立ち上がった。

「先生、申しわけありません」

と戸塚の腕をとってなだめる父親。

「お前たち、謝りなさい！」

父親は妻と兄に命じた。

2人は意外な事の成り行きに茫然と立ち尽くしている。

その時、少年は突然、立ちあがり、

「ボクはヨットスクールへ行く！」

と戸塚のあとを追った。

母親も兄も、今度は彼をとめようとはしなかった。

少年の家庭は会社の課長である父親、家事を守る母親、大学を卒業して東京で勤めている長兄、現在大学に通っている次兄、それに少年の5人家族である。

少年自身の回想によると、彼は小学校の3年生まで快活でよく遊び、友達もたくさんいる子供だった。

一つの転機は小学校4年に塾へ通いはじめたことだったと、本人は分析している。

そのころから彼は成績を大変、気にするようになっていく。

登校拒否を起こすまで、彼は成績ではクラスの上のグループに入っていたのだから、成績が悪いわけではない。

ところが、この少年はいわゆる完全主義者であるうえに気が弱い。

その結果、成績は満点をとりたいと願う一方で、ひょっとしたら、思いどおりの成績がとれないのではないかという心配が先行するようになる。

これは登校拒否の前兆的症状であって、この気持ちがさらに強くなると、

「だから学校に行きたくない」

ということになるのである。

これは精神力の欠如を物語っている。精神力が強ければ、満点をとるために苦しみに耐えて努力をするであろう。あるいは、自分の能力の限界を悟って、満点をとろうなどという、出来もしない野望を捨てるか。これはこれで、環境に適応する能力を持っていることになる。

少年の登校拒否がはっきりした形を見せるのは中学校の3年になってからだ、すでに小学校4年のころから、その傾向が彼の心を徐々に浸蝕しはじめていたわけだ。

そのうえ、彼が小学校6年の時、実母が亡くなった。現在の母親は継母である。

実母が亡くなった時、少年はその意味の大きさを、それほど強く感じていたわけではない。

しかし彼は、時とともに深い悲しみに沈んでいった。

父親は、少年が小学校6年から中学2年にかけての重要な成長期に母親を失い、男ばかりの家庭で満足に食事の支度もしてやれないような状態に置いたことが、なんらかの形で登校拒否につながることになったのではないかと心を痛めている。

その後、男手ばかりではというので、新しい母親を迎えたのである。

その際、父親は事前に、それとなく母となるべき女性を子供たちに会わせたうえで、子供たちの考えを聞いた。子供たちは父親抜きで相談して、賛成している。

新しい母親が少年のヨットスクール入りに反対したのは、実の母でないから子供を暴力をふるうような所に入れたのだ、といわれるようなことはしたくないという気持ちが、強く働いたからであった。

これに対して戸塚の方は、子供が立派に自立していけるようにしてやることこそが愛情であって、この母親のような考え方は、好意的にいても誤った愛情、厳しくいえば世間体を気にする、自分かわいさ以外のなにものでもない、という考え方である。

しかし、世間の圧倒的多数は戸塚ヨットスクールを、死亡事故とリンチの暴力教室としてしか理解していないのが現実なのだから、この母親が、そういう所へ子供を入れたくないと考えたとしても、母親ばかりを責めることはできない。

父親が、実母の死とその後の空白、継母を迎えたことなどを、子供の登校拒否に何らかの影響を及ぼした原因ではないかと懸念しているのに対し、少年の方はそうしたことを登校拒否の理由として考えたことはないといっているのだが……。

少年自身の挙げている理由は、完全主義、気の弱さ、思いつめ、無口、ひっこみ思案といった自分の性格である。

「あの当時は……」

と少年は語る。

「母さんが死んだ時にはそれほどでもなかったのに、時間がたつにつれて、なんで死んでしまったんだ！と悲しい気持ちがだんだん大きくなっていったんです」

おそらく、あまりのショックに悲しいと感じるいとまさえなかった、ということなのかもしれない。

「しかし」

と彼は続けた。

「新しい母さんを迎えることは、ぼくたち兄弟が賛成して決めたことだし、新しい母さんは本当によくやってくれています」

大変、物わかりがいい。物わかりがいいのに自分をどうすることもできないのが、登校拒否初期の子供の特徴のようである。

少年が登校拒否を起こしたのは、中学3年になってからである。

教頭の吉森三郎によると、1年は授業日数248日のうち欠席3日、成績は9科目のうち5が2つ、4が4つ、3が3つ。1年9組の学級会長だった。

「成績は5段階評価の平均4。上。下。ともかく上のグループに属していて、まずまず。学級会長は生徒の互選だから、他の生徒の人望もあったということでしょう」

と一年の担任だった坂野忠夫はいつている。

「だから、あの子が登校拒否になったと聞いた時は、本当にびっくりしました」

少年が本格的に学校へ出なくなったのは3年の2学期からである。

本人によると、夏休みの宿題の作文が思うように書けなかった。2学期の第1日目。父親に頼んで「少し遅れるから」と学校に連絡してもらい、作文を書き直していたが、完全主義者でかつ気の弱い彼としては、学校には遅れる、作文も期限に間に合わないということで、

「どうにでもなれ」

と学校へ行かなくなってしまった。

彼はそんな自分自身がイヤになってしまう。

そして、自殺を試みるなど、イヤになった自分をいためつける一方、寺へ修行に行きたい、運動でめちやくちやに自分を鍛えたいと口走るなど、弱い自分から抜け出そうとあがくのである。

3年は授業日数238日中、欠席120日、成績は2が8つ、1が1つ。5と4はなし。1年の時とは雲泥の差である。

しかし、この完全主義者の少年は、もう1度やり直そうとする。同じ市内で中学を転校し、3年生に入り直した。

市内の一流高校を目指すためだ。

「卒業しようと思えば出来なくはなかったのだから、実に珍しいケースです」

と吉森教頭はいつた。

新しい中学での1学期、4月、5月はカゼで2日休んだ以外は皆出席だったが、6月にまたぶりがえし、11日間欠席した。

担任の西原正裕が家庭訪問。

「人間なんてそんなに完全なもんじゃないぞ。宿題も、半分でも、ええじゃないか。オレだって完全な人間じゃない」

と自分の体験を交えながらさとしたところ、気が楽になったのか、以後夏休みまで皆出席。

ところが、夏休みにまたもや宿題がはかどらない、学校には行きたくないという気持ちがぶりがえして自分がイヤになり、自殺も出来ず、ヨットスクールへ飛び込んできたというわけである。

弱い自分から抜け出したい、立ち直りたいと思っていた少年に1つのきっかけを与えたのが、マンガの本だった。

中学2年の時、大学生の兄が、

「面白いよ」

と教えてくれた小山ゆうの『がんばれ元気』というシリーズ。主人公の気がやさしくて、勇敢な少年に彼は心酔した。そして、自分も主人公の少年のようになりたいと熱望するようになった。

意味もなく女の先生を軽蔑し、体操の先生が好きになり、寺へ修行に入ろうとしたり、運動で激しくしごかれたいといいたしたもの、そのころからである。

少年がヨットスクールへ去った後、彼の部屋に、1枚の絵が残されていた。

梶原一騎のマンガ『あしたのジョー』の主人公が見事に描かれ、一編の詩が添えられている。

男は旅立つ時がくる

自分の生き方を探すために

そして、闘う時がくる

自分より大きな奴と

負けるのを承知で

足がぐらついても

相手の目をにらみ

相手にだけは

負けざまをみせない

俺は後悔だけはしたくない

するまえに大きなことを

やって死にたい

俺たちは走り続ける

とてつもない大きな

夢を追うために

絵は少年の描いたものである。

『美しき狼たち』と題された詩は、マンガの主題歌をもじって彼自身が作ったものである。

それは、ヨットスクールへ入るに当たった彼の「心の書き置き」であった。

だが、そのことには家族のだれも気づいていない。

大学生の足も、自分が何気なく渡した1冊のマンガが弟の心に、それほどの影響を与えていたとは、つゆほども知らなかった。

これをもって当世風に「親子、家族の断絶」と称し、「だから、もっと心を開いて語り合しましょう」というのだろうか。

そんなことはあるまい。この少年の描いた絵と詩は、親の懐から1人の男へと巣立ち、旅立とうとする自立の詩と絵であろう。

自立は、親に明かした時から自立でなくなり、親が手を貸しても自立ではない。だから子供たちは黙って親から巣立とうとするのである。

もしあの時、親が連れ戻したままになっていたら、この少年はやがて家庭内暴力に変質していたであろうと思われる。

少年はいま、自ら選んだヨットスクールで、厳しい訓練に耐えようと必死の努力を続けている。

現代社会が生む"心のガン"

「私たちは、貧しさから抜け出したい、日本を豊かな国にしたいと願って一所懸命に働いてきた。その結果が、自分の息子がああいうふうになるという形で報われるとは思ってもみないことだった」

高度成長を支えてきた、勤勉なエリートサラリーマンはためいきまじりに語った。

彼は、昭和11年生まれの45歳。日本有数の大手家庭電器メーカーの中間管理職のポストにある。

彼の家は山陰地方の素封家だったが、戦争で没落、そのうえ、父親も戦死するという二重の悲劇に見舞われた。子供の頃に戦争を経験し、大学で60年安保にぶつかり、卒業して高度成長の第一線に立った。この前後の世代の人たちは多かれ少なかれ、似たような環境に置かれているのかもしれない。

戦後は厳しい貧しさの中で少年時代を過ごすことになる。食糧難、物資不足は当時のだれもが味わった辛酸だが、財産がなくなり、母親一人の手で養われなければならなかった彼の場合はひととき厳しいものがあった。

ラジオを組立てるのが好きだった彼は、今日なら捨ててあっても誰も見向きもしないような部品を買うことができなくて、無念な思いをしたことが一再ならずある。

草野球のポールは石ころを芯に入れ、古いセーターをほどいた毛糸をぐるぐると巻き、布をかぶせて自分で縫う。グローブはテントの端切れで作った。

彼は大学へ進学したいという強い希望を抱いていたが、当時の家の経済状態では望むべくもなく、それを口にすれば母親がづらい思いをするだけだとわかっていただけに、自ら進んで工業高校を選び、卒業後は電器メーカーに就職した。

しかし、大学を諦めたわけではなかった。

3年間、一所懸命働いて家計の一部を支えながら、同時に、大学進学のための費用を少しでも貯える努力を続けた。

昭和30年代初頭。日本の経済にも、彼の家の家計にも少しはゆとりが出来はじめようとしている頃だった。

3年後に東大工学部に入った彼は、いくつもの家庭教師を掛け持ちしたうえ、休みにはデパートの配達、会社の雑務等、アルバイトというアルバイトはなんでもやって、学資と生活費を稼いだ。

60年安保闘争は、ごく普通の学生であった彼をも連日のデモに巻き込んだ。樺美智子が死亡した6月15日、彼も国会前にいた。バリバリッと音をたてて国会内になだれこむデモ隊、襲いかかる機動隊。せめぎあう大きな流れの中で、個人の意思など何の力ももたない。ワツとなだれこむ一団にまじって、彼もいつの間にか国会内に入り、機動隊にしたたか打ちのめされていた。

37年春、大学を卒業と同時に現在の家電メーカーに就職。ラジオを組立てるための部品を買えなかった貧しい時代の少年は、

何年か後に、それを職業とする会社に就職することによって夢を果たしたのである。

安保闘争によって岸内閣が倒れ、かわった池田勇人首相が所得倍増と高度成長を唱えた1960年の秋、NHKとNTVはカラーテレビの放送を本格的に開始し、その威力を全国に誇示した昭和39年東京オリンピックの中継に向けて、カラーテレビ時代の幕を開けていた。

彼が大学を卒業した昭和37年は、各企業によるいわゆる、青田買いが熾烈を極めたため、日経連が大学卒業者の採用試験日の申し合わせをしないことに決めたほど、産業界は好況であった。

東大工学部卒の彼が三顧の礼をもって迎えられたことはいうまでもない。働きたくても仕事がなく、一杯の「銀シャリ」を食べることすらままならなかった敗戦直後がウソのように思える時代になりつつあった。

特に、彼の就職した家電メーカーは高度成長から大衆消費時代へかけて、経済と時代の担い手であった。ラジオに始まり、冷蔵庫、洗濯機、掃除機、テレビ、カラーテレビ、電子レンジから皿洗機に至るまで、便利な電化製品が次々開発生産され、所得倍増のかけ声とともに購買意欲の高まった家庭へ、続々と送り込まれて行く。

彼はその第一線に立っていた。

昭和39年、彼は上司の口添えもあって、同じ会社の社員と結婚した。東京オリンピックのカラーテレビの放送を新婚の家庭で見たことを記憶している。

入社2年目の結婚というのは早いように思えるが、大学入学前に3年間会社勤めを経験し、すでに27歳になっていた彼としては、年齢的には早すぎるという年ではない。

妻になった女性は彼とは5つ違い。昭和16年生れの22歳。両親の代に東京へ越してきた東京生まれの東京育ちで、名門の1つといわれる女子短大を卒業していた。

結婚の翌年、長男誕生。

妻の実家には兄がいたがまだ結婚していなかったので、妻の両親にとっては外孫とはいえ初孫。同じ東京なので何かといえば顔を見にきたり、妻が実家へ帰ったりで、可愛がってもらった。

彼の方の母親は弟たちと山陰の郷里に住んでいたが、遠くとも、やはり初孫の顔が見たくてよく上京し、妻もまた彼の郷里へ出向いて、初孫は双方の祖父母から可愛いがられて育った。

2年後に長女誕生。

こちらも、初めての女の子だということで可愛がられた。2人ともすくすくと育ち、素直な子供だった。長男が中学1年の年、父親は九州へ転勤になり、家族も移住、子供たちもそれぞれ転校した。

学齢期の子供を持つ家族にとって転勤は大きな問題である。この家族も、長男は小学校を終えると、受験校として知られる私立中学へ合格していた、毎年、東大合格者の数を競って上位に名前が出る名門高校のある私立で、よほど問題がないかぎり、中学から高校へ行けることになる。

長男の、この私立中学合格は同級生の親たちからも羨ましがられ、双方の祖父母を含めた一家にとって自慢の種であった。

父親に転勤の話が出た時、家族は子供のために東京に残るべきか否か、当然大きな問題になった。

母親と双方の祖母は東京に残ることを主張した。この激しい受験競争の中でせっかく他人の羨む名門校に入れたのに、みすみすそのチャンスを逃して地方の学校へ移ることはないではないかという。今日においては、おそらくほとんどの家庭で行われる主張である。

しかし、父親と祖父は、家族は夫に従って任地へ行くべきであると主張した。本当に優秀な子供なら地方の高校からでもしかるべき大学へ合格できるはずであるし、現に地方の優秀な子供たちはそうやって名門の大学へ合格しているではないか。目の前の受験競争に振り回されるより、地方の空気を吸わせ、違った土地の人々との交わりを経験させ、たくましく育てた方が長い目で見れば本人のためだというのである。

父親同様、祖父も東大の卒業で何度かの転勤を経験していたが、家族は常に同道させ、長男は地方の高校から東大に合

格していた。そういう経験が、自信と孫の能力に対する信頼になっていたものと思われる。

「受験、受験という風潮に子供を巻き込ませるのがなんともいやだった」

と父親は述懐している。

中学生の長男は双方の意見を聞き、父親と祖父の考えに従うといった。

一家は九州へ移った。

ところが、中学3年の夏休みを終えた2学期、高校受験を控えた長男が突然、学校へ行かなくなってしまった。

いわゆる、登校拒否である。

両親は諄々と説いた。子供は頑として家を出ようとしな。母親が涙ながらに懇願した。それでも子供は応じない。父親が怒鳴り、遂には殴って、行かせようとした。それでも、手の施しようがなかった。

「なぜ、行かないのか」

と理由を聞いても、何も答えない。

ただ、「ボクはダメな人間だ」と繰り返すばかりである。

一家の苦闘が始まった。

学校に相談をした。

担任の先生が来て、説得をしてくれた。本人も先生には会って、話を聞く。だが、学校には行こうとしない。

先生の指示で、同じクラスの子供たちが代わるがわる迎えに来てくれた。この時も、会うには会うのだが、学校には行かない。

地域の児童相談所へ相談に行った。街の神経科医、大学病院、合宿生活をしてハイキングなどで気分転換を図りながら治療に当たっている専門医……効果がありそうだといわれる所へは、残らず足を運んだ。

カウンセラーたちは子供が生まれてから今日に至るまでの模様、家庭環境などを詳しく尋ね、次のような点を問題として指摘した。

全体として過保護である。

初孫ということで祖父母たちが甘やかすすぎた。おもちゃ、洋服その他なんでも次々と買い与えたために、子供は欲しいという意欲さえなくしてしまった。泣けば、すぐ抱いてあやしてくれる。食べ物を取ろうとすると、先回りして与えてくれる。食事は、食べなければ大きくなる、とどンドン食べさせられる。

母親が過干渉で、教育ママである。

子供のめんどうを、こまごまとみ、甘やかす点において母親は祖父母たちに劣らない。子供が何かしようとする、「ハイ、これ」といった感じで先回りしてやってやる。それに、宿題はやったか、忘れ物はないか、学校ではどんなことがあったか、勉強はどこまで進んだか……と、ことあるごとに口をさしはさむ。PTAの会合には積極的すぎるほど出席して、学校と教育のあり方についてあれこれと発言し、役員も買って出て忙しく、家事がともすれば等閑に付され、妻の深入りに夫が不満を抱いたほどである。

特に、九州へ転勤してからの、子供の勉強に対する母親の熱心さはひとかたではなかった。東京の名門校から地方の中学に転校したことによって、受験競争に遅れをとるようなことがあってはならないというあせりからであった。

父親は放任に近かった。子供は、かまわない父親にむしろ救いを求め、父親と学校や勉強以外のとりとめもない話をする時には安らいだ表情を見せていた。しかし、子供は父親に対して母親の過干渉を訴えなかったし、父親も自分のいない間に家庭でどんなことが起こっているのか知らなかった。まして母親は正しいと信じて邁進しているのだから、子供の覇気がなくなり、段々沈んでいくことに誰も気づくはずがない。

もう1つ、カウンセラーから指摘された重要な点は、母乳を与えて育てなかったこと。育児初体験の母親が、熱を出したといえば、スポック博士、むずかったといっても、スポック博士……と、ことあるごとにスポック博士の育児書をバイブルのように参考にすぎたこと。子育てのキャリアウーマンである祖母がそばにいれば大騒

ぎするほどでもないことを、母親はうろたえなくてはならず、それが幼児に伝わっているのだ、という指摘である。

神経・精神科の病院では精神安定剤、睡眠薬等を注射されたり、投与された。その時には効果が出るが、薬が切れると状態は以前にも増して悪化しているような印象を受けた。両親は、そのまま薬を続けていると麻薬中毒のようになってしまいほしくないかと段々怖くなって、医者に通うのをやめてしまった。

カウンセリングを受けても、問題点は指摘してくれ、話し相手にはなってくれるものの、登校拒否は治らなかった。

「学校へ行かないからといって、親はうろたえたり、強制をしてはいけない。勉強の話題は避けるようにして、一緒にキャッチボールをしたり、ハイキングに行ったりしてあげましょう。お母さんはあまり勉強、勉強とガミガミいわないこと。お父さんは出来る限り家庭にいる時間を多くして、スキンシップを心がけること」

カウンセラーはこんなアドバイスを与えた。

両親はいわれたとおりに実行した。

たしかに、キャッチボールをしたり、遊んでいる間は、子供はご機嫌である。しかし、いつまでも遊んでばかりいて学校へ行かないのでは意味がない。

いつかは治るのかもしれないが、治る見通しについてカウンセラーは何もいってくれない。「気長に努力しましょうね」というばかりである。いつかはきっかけがつかめるはず、というはかない言葉を頼りに、親は果てしなく子供と遊び続けねばならないのである。

一方、子供の状態はむしろ徐々に悪化していた。

自室に閉じこもって出てこなくなる。昼間は寝ていて夜はいつまでも起きている。風呂に何日間も入らなくなる。テレビを番組がなくなるまで意味もなく見ている。それでも足りなくて、ラジオの深夜放送を聴く。

次第にイライラが昂じてきて、部屋のカーテンが引きちぎられている。戸を閉めきったままでひとりごとをつがやいている。家族を部屋に近づけない。特に、試験の時期になると、休んでいても気に

なるのか、教科書やノートをビリビリにやぶいたり、鉛筆を投げつけたり、ヒステリー状態が悪化する。

食事を「こんなものが食べられるカッ！」とひっくりかえす。妹を突如、殴る。家族が話をしていると、テレビのボリュームを大きくして邪魔をする。家族が見ているチャンネルをわざと他のものに変えてしまう。

夜中にステレオをガンガンかける。母親に車を運転させ、右へ行け、左に曲がれと、フラフラになるまでドライブをさせる。母親に殴りかかる。首を締める……。

子供の症状は登校拒否から家庭内暴力へと進み、事態は悪化の一途をたどっていた。

母親は自分が干渉しすぎたことを、反省し、祖父母たちも甘やかせて育てたことを反省したが、ここまでではもはや取り返しがつかない。

「台所にいる時、長男が背中を向けて目の前に立っている。この包丁でいっそのこと子供を殺して自分も死ぬことができたらどんなに楽だろう、と何度思ったかしれません。ほんのちよとしたきっかけがあったら、私はやっていたかもしれない。今思うと、ゾッとします」

母語はしみじみと語り、こうもいっている。

「おばあちやまを殺した優秀な中学生の話。金属バットで両親を殺した子供の話。子供を殺して自殺した親の話……。自分の子供がああなってしまうからは、とても他人事とは思えません。自分たちが同じような状態にならないという保証はないのですから」

父親も母親も、まさか自分の家庭がこんな不運に見舞われることになるなど、夢にも思ったことがなかった。

「ウチの子にかぎって——」

という気持ちがあった。

これは、戸塚ヨットスクールへやってくる親たちが異口同音に語る言葉である。

< 父親は東大卒、一流会社、母親も大学出、子供の成績優秀、近所も羨むおとなしい子供。

その子が親の首を締めるようになると誰が予想できようか。

両親は、戸塚ヨットスクールの存在を新聞で知ってすぐ駆けつけた。

治療効果が非常にあがっていると書かれていたことが第一の理由だが、ヨットと海で鍛え、体罰を含め訓練が厳しいという内容に心を動かされた。

子供に厳しい環境が必要だということは親たちも感じてはいたのである。

「ああ、大丈夫。この子なら必ず治ります。頭のいい子は治りが早いし、治し甲斐もありますからね」

校長の戸塚宏は両親の話を聞き終えると、そばに坐った子供を眺めながらいった。

「必ず治ります」

戸塚がいとも簡単にいうのを聞いて、両親は初めて救われた気持ちがあったと同時に、本当だろうかと半信半疑でもあった。

親を殺しかねない重症の子供を目の前にして、

「治す」

といきったのは戸塚が初めてだったからだ。

「ただ……」

と戸塚は続けた。

「どんなことがあっても、お父さん、お母さんは途中で挫折しないで下さいね。こういう子供は苦しむのをきらって楽な方へばかり逃げようとする。その時、親が可哀そうだからと途中で連れて帰られるようなことがあると、私どもは責任を持ってない。治すことができないんです。最後まで、私どもに任せて、子供を突き放す覚悟はありますか？」

両親は不安そうな面持ながら、うなずいた。

「校長先生——」

と、母親がいった。

「どうい方法でおやりになるのでしょうか。かなりきついと新聞には書いてありますが……。それに、どれくらいの期間で治りますか。時々、うかがってもよろしいでしょうか……。子供がどんな状態であるか心配ですし……」

戸塚の表情が急に険しくなった。

その雰囲気を感じとって、父親がたしなめるように傍らの妻を見た。

「子供さんがこうなった責任が親だけにあるとは、私はいわない。親だけではどうしようもないような社会になってしまっているのだから……。しかし、しかし、です。親に責任が全くないとも、いえないのです。わかりますか、私のいわんとする意味が……」

戸塚はそういって、母親の顔をじっと見すえた。

「それでは、校長先生、よろしく願いいたします」

下手をすれば険悪な状態になりかねない空気を察知して、父親は頭を下げた。

「大丈夫です。任せて下さい」

戸塚はまた柔和な表情に戻って、父親にいった。そして、

「良くなったらこちらからご連絡をしますから、それまでは電話その他、遠慮していただくように——」

丁寧ではあったが、突っぱねるようにいい放った。

母親も戸塚の気迫に気圧されたのか、諦めたように小声で、

「よろしく願いします」

と頭を下げると、両親は立ち上がった。

「オーイ」

戸塚は振り向いて、大声で怒鳴った。

隣の20畳を優に超える大きな部屋でたむろしていた子供たちの中から、先輩格らしいのが駆けつけてきて、直立不動の姿勢で立った。

「こいつを連れてって、教えてやれ」

戸塚は、連れてこられたばかりの子供を見ながら先輩格に命じた。

先輩格の子供は直立不動の姿勢のまま、

「ハイッ」

と大きな声で返事をし、

「来いよ」

と新入生をうながした。

新入りの子供は、こんな荒っぽい言葉をいわれたことがない。不服そうにのそのそと身体を動かし、同時に、不安そうな目で、立ち去ろうとする両親を追った。

「ぐずぐずしてるんじゃないッ！」

雷が落ちたような戸塚の大きな声が少年の背中にたたきつけられた。

両親は心残りなまなざしで子供の方を見やりながら、立ち去ろうとしている。

「ご心配はいりません。今からお宅の子供さんの指導に当たる、あのハキハキとした少年。あの子が連れられてきた時には、お宅のお子さんなんか問題にならないくらい、ヒドかったのですから……」

女性のコーチが両親を帰り道の方へ案内しながら説明した。

「本当だ。あの子はどこがおかしいのか全くわからないほど、正常だ……」

父親は自分を納得させるように、いった。

「あの子はもうじき家に帰れます。お宅のお子さんもやがて元気になって帰る日がきます。子供さんが苦しみに耐えて立ち直ろうと努力するんだから、ご両親も辛抱なさらなければ……」

戸塚の厳しさとうって変わって、女性コーチはやさしかった。

「ハイ……」

と、母親が初めて素直にうなずいた——。

新入りの少年は先輩に連れられて浜辺へ出た。合宿所から百メートルほど離れたところが海岸である。浜辺には長さ 3.5 メートルくらいの小さな 1 人乗りヨットがずらりと並んでいる。

そのヨットの 1 隻を水際近くまで運び出し、部品の名称、ロープの結び方、マストを立てたり、セールを張ったりする組立て方、乗り方を先輩格の少年が一通り教えたあと、すぐヨットを海に浮かべ、新入りの子供を乗せて先輩が何度か実際に操縦してみせる。それが終わると、さっそく今度は新入生に操縦させ、先輩がコーチしながら走ってみる——この 1 回だけで、丁寧な指導は終わりで

あとは先輩たちのやり方を見ながら自分で憶えていかななくてはならない。

部品の名称や構造を忘れても、組立てができなくても、走れなくても、校長の戸塚やコーチたちからガンガン怒鳴られ、それでも出来ないと言われる。誰も親切に教えてはくれない。うまく操縦ができなければ、ヨットはたちまちにして風にあおられて転覆し、少年は海中に放り出される。救命具をつけているから溺れはしないが、水は冷たい。特に冬場は凍えるように冷たい。だが、自分でヨットを起し、操縦しなければ、誰も助けてくれないし、やり方を教えてくれない。コーチたちは指令船の上から眺めながら、

「そんなことができるのか、バカものオ！」

などと、罵倒するだけである。

情緒障害の子供は甘えと過干渉のために極度に精神力がなくなっているのだ、と戸塚はいう。

登校拒否の子は、学校に行かなくてはと頭の中ではわかっているが、心と身体がついて行かない。イライラするが自分ではどうすることもできないから、何かと理由を探しては親に当たるのが家庭内暴力である。自分で出来ないことを他人のせいにする——甘えの特徴である。

だから、ヨットスクールではその甘えを粉々に打ち砕き、悪いのは他の誰でもなく自分であること、自分が努力しなくては何も出来ないことを身体で覚えさせる。

「この子供を連れてきた家電メーカーの中間管理職の家庭が今日の社会を象徴してる」

と戸塚は思った。

夫が、豊かな社会を作ろうとして一所懸命に作り出した電気製品が次々に家庭に入って、妻を家事から解放し、余暇を生み出した。豊かになった一家は子供を甘やかし、余暇の出来た妻は教育ママになってしまった。

豊かな社会、解放された女性——60 年代が追い求めてきた夢が満たされた時、皮肉にも子供たちの心はむしばまはじめていたのである。

だからヨットスクールにおいては質実を旨として、男は強たくましく、女はやさしく控え目に生きる姿を子供たちに見せて、むしばまれた子供たちを立ち直らせなくてはならない……と戸塚は考える。

この子供の父親とそれほど年の違わない戸塚も、60 年安保を大学で迎えていた。「ヨット部で安保合宿というのをやったことがあるなあ」という彼は、ヨットの魅力に抗しきれず、名古屋大学を卒業しても就職をせず、太平洋横断レースに参加するため、ヨット部の先輩たちのあとを追ってアメリカへ渡った。

それ以後今日まで、昭和 50 年の沖縄海洋博記念太平洋単独横断レースに優勝して一躍その名を知られるようになったのはじめ、数々の国際レースに勝ってレーシングヨット界の第一人者として、ずっと海で生活をしている。

外洋を渡るヨットレースには、人間が生きて行くのに必要なあらゆる知識と技術、品物がなくてはならないが、しかし、余分なものはいっさい排除なくてはならない。

優れたヨットマンであり、思索者でもある戸塚宏が海の生活で体得したことは、生きて行くのに何が必要で、何が余分かがヨットの上ほどよくわかることはないということだった。

それはちょっと大げさに名付ければ、「海の思想」とでもいうべきものである。

精神と肉体が不可分な海

海から陸を眺める景色は、陸の上の発想しか持たない人間たちにとっては実に新鮮であり、海からの眺めには「海思想」があるように思えてくる。

会社では仕事をしない社員にも給料が支払われるが、ヨットは無駄な人間を乗せている余裕がない。1人が帆を張っている時、舵の操作を怠っている者がいれば、ヨットはたちまちにして転覆し、2人も荒海に放り出されて命が危険にさらされる。星座や三角関数は、親や先生に言われて仕方なくやる勉強のためではなく、自分の位置を測定し、航行を安全にして命を守るために欠かせない知識であることを身をもって知る。男と女がいて、荒狂う海で高さ10メートルのマストに昇って帆の修理にあたるのは女であり、彼女のために食事の支度をするのが男でありうるのか。

分刻みでタクシーを乗りつぎ、テレビと新聞と週刊誌と本で情報を集め、大量に生産し、大量に消費し……かなりの部分は必要であるとしても、はたしてそのすべてをわれわれは必要としているのだろうか。

豊かな社会は、生きるために生産するのではなく、生産を維持するために消費しなくてはならないという皮肉な運命を背負いこんでしまった。

伊勢、三河の二湾が合流して太平洋に広がるあたりから内陸を振り返ると、四日市をはじめとする工業地帯が遠望され、石油を満載して入ってくるタンカーと、自動車を積んで出て行く専用輸送船がゆったりと行き交っている。

ヨットの上で戸塚に鍛えられている子供たちは、その豊かな工業社会が生み出した"心のガン"におかされているのではあるまいか。

60年安保を境に、海に出て質素な生活に耐えた戸塚が、高度成長の第一線に立ってきた男の家庭が生み出した、豊かで、それ故に病んでいる子供の心を鍛え直すことになるというのは、なんと皮肉な歴史のめぐりあわせというほかない。

小高い丘に立って河和の海を見渡すと、白、黄、オレンジと色とりどりの帆を立てた小さなヨットが青い海面に点在し、一定の軌跡を描いて、ゆったりと動いている。

ヨットを浮かべた入り江はそのまま広がって三河湾となり、よく晴れた日には対岸の三河を一望に見渡すことができる。

風を受けた青い海は、無数の飛び魚が移動しているかのように白い波頭を太陽にキラつかせ、そのあい間を大きな貨物船がゆっくりと進んで行く。

風の吹き抜ける木々のざわめき、鳥のさえずり――。

事情を知らない旅人にとっては、平和な閑村の心なごむ風景である。ゆったりと動いているかに見えるヨットで、子供たちの再会と家庭の平和を賭けた戸塚たちの闘いが繰り展げられていることに、旅人たちが気づかなかつたとしても不思議はない。

「もっとシートを引かんか。シートを引け、シートを！」

コーチの怒号がヨットの上の明子に飛んだ。

明子は長崎から連れてこられた登校拒否の女の子である。登校拒否がさらに悪化し、母親の貴重な宝石を捨ててしまったり、1万円札に火をつけて燃やしてしまうなど家庭内暴力が出るようになり、思いあまった親が戸塚ヨットスクールへ預けたのだった。

「もっと身体を乗り出せ！そんなに怖いのかッ！」

高速艇に乗ったコーチがエンジンをいっぱい吹かして、明子のヨットのまわりをぐるぐると旋回しながら叫んでいる。

向かい風でヨットを速く走らせるには、帆に出来る限り多くの風を受け流し、身体をヨットからいっばいに乗り出してバランスをとるように操縦しなくてはならない。

だが、ほとんどの子供はヨットから海面の上に身体をいっばい乗り出すことを、怖くてできない。身体を乗り出さないままシートと呼ばれるロープをいっばいに引くと、帆に大量の風を受けてバランスを失ったヨットはたちまちにして転覆してしまう。

明子も、コックピットと呼ばれる艇のくぼみにうずくまったままでシートだけを強く引いた。

ヨットはひとたまりもなく転覆し、彼女は波間に放り出された。

「早くヨットを起こして、乗らんかッ！」

コーチの怒号が再度、飛ぶ。

明子はセントボードと呼ばれる、ヨットの底から突き出ている板につかまって懸命にヨットを起こそうとした。だが、強い風と荒波にはばまれてヨットはなかなか起きない。

冷たい水の中で、明子の格闘が続く――。

「なにをいうかッ！ お前たちを教えているコーチは、みんな一流のヨットマンたちだ。何も知らん小娘が、なまいきな口をきくんじやないッ！」

校長の戸塚が明子を睨みすえながら怒鳴りつけた。

骨太の声が部屋じゅうに響きわたり、他の生徒たちの顔も一瞬、緊張にひきつた。明子はその気迫に押されて、あとずさりをした。

夜の反省会。

校長を中心にコーチ、生徒が集まって1日の問題点を洗い直す。その席上、ヨットの乗り方の不手際をコーチから指摘されたのに対し、明子は、

「コーチにいわれたとおりやったんです」

と口ごたえをした。

戸塚が烈火のごとく怒ったのはその時である。

明子のような口のきき方は、少しばかり頭がいいとうぬぼれている子供たちの通弊である。学校の成績にばかりこだわる親たちはそのうぬぼれを、いさめるどころか得意にさえしかねない。

明子は、いつもと勝手の違う相手になおも食い下がろうとしたが、戸塚の気迫に圧倒的に押しまわられてしまった。

「コーチが間違っているというのなら、お前の思うとおりにいまから乗ってみろ。出来るかッ！」

戸塚は実行の伴わない議論を否定する。いうのならやってみろ、やれないのなら、いうなと至極明快。

それ以上何をいおうと、たとえ相手が親たちや他の大人たちであつても耳を貸さない。

ヨットを舞台にケンカをやって、明子が戸塚にかなうわけがない。親が相手だと、それでも延々と理屈にならない自己主張が続き、さらに気に食わないと家庭内暴力、と発展するのだが、ヨットスクールでは鉄拳が待っているだけである。

なぜ、殴るのか――。

「私は大人を殴らない。その代わり面倒もみない。大人は自分で責任をとれるはずだから。子供を殴って教えるのは、彼らが一人前でないから。その代わり、治療し、立ち直らせるという形で私は責任をとっている」

これが戸塚の説明である。

明子はいまだかつてこれほど厳しく叱られ、かつ、大人とのけじめをはっきりと思い知らされた経験を持たなかった。

翌日から、彼女の態度に少しずつ変化が見えはじめた。相変わらず無口で反抗的、理屈が先走るところは、すぐにはなくならなかった。

しかし、コーチが

「もっと身体を乗り出せ！」

と叫ぶと、明子はこわごわ身体を海面上に乗り出そうとした。

もちろん、ヨットはすぐ転覆してしまうのだが.....。

入校してきた時の明子は戸塚から見ると、最も嫌なタイプの女の子だった。

もっとも、ヨットスクールへ連れてこられるような連中の中に、好もしく、爽やかな子供などいようはずもないのだが。

「それにしても」

と戸塚はよく思うのである。

「あれは嫌な感じのする子だった」

いずれ劣らずいやな感じのする情緒障害児たちの中にも、たとえば突っ張ってばかりいるけれども、どこか間の抜けた可愛いさがあるといった生徒がいないわけではない。

ところが、明子は違っていた。

明るさ、無邪気さが全くない。

頭のいいのを鼻にかけて反抗的。行動が伴わないのに口だけは達者で、理窟をいう。

目は輝きを失って無感情。それでいて人を小バカにしたような表情をする。

ランニングをさせると、みんながゴールに入っているのに、明子だけはまだ真ん中あたりをドタドタ。

体操でも腕立て伏せを1回も出来ずにくずおれてしまう。

ヨットのレースをやらせても、びりっけつ。

ところが、その明子が戸塚にこっぴどくやっつけられたのを境に徐々に態度に変化を見せはじめ、やがて、目を見はらばかりに変わっていった。

もともと、長崎の中学では500人ほどいる学年で1、2位を争ったことのある優秀な素質を持った子供だけに、立ち直りはじめると物わかりが早い。

ヨットの訓練でコーチたちのいうことをよく聞こうとするのと同様に、生活面でも、いままではちょっと目を離すとすぐ怠けていた部屋の掃除や食事の後片付けなどを自分から進んでやるようになってきた。

返事も、

「ハイッ」

と、ハキハキと素直にするようになっていく。

体操でも大きな声で号令をかけ、厳しい運動の苦しみに進んで耐えようとしていた。

学校へ行かず部屋の中にはばかり閉じこもっていたせいで、白くふやけていた顔が日焼けと潮風で血色がよくなり、目に感情が戻って、輝きが出てきた。

なまじの頭のよさを鼻にかけていた生意気な態度が影をひそめ、謙虚さ、やさしさ、他人を思いやる気持ちが随所に見られるようになった。

そうすると、不思議なことに、ぶよぶよだったずん胴の身体が凹凸のはっきりした女っぽさをただよわせてくる。

「これが1万円札を燃やした子か!？」

とコーチのだれもがいぶかった。

風は微風。彼もなかった。

空は抜けるように青く、海上から三河一帯がくっきりと見渡せる。

子供たちを激しくしごく訓練には最適とはいえませんが、ゆったりとヨットを楽しむには快適な日和である。

錨(いかり)を下ろした本郡指令船を遠巻きにして20隻近い小さなヨットがレースを繰り展げている。河和の沖合でいつも見かける、戸塚ヨットスクールの訓練風景である。

コーチの東秀一は本郡指令船の上からレースの展開を眺めながら、先頭を走っているヨットに注目していた。

トップグループの数隻が一团となって追いあげているが、先頭のヨットはどうやら他をおさえてゴールへ逃げ込みそうである。あと100メートル、90、80……ゴールへ近づくにつれて東は思わずこぶしを固く握りしめていた。

30メートル、20、10、ゴールイン!

先頭のヨットが逃げ切ってゴールに入った瞬間、東は不覚にも拍手をしてしまっていた。

それにつられて、本部船に乗り込んでいた同僚のコーチや生徒たちも拍手を送った。東が振り返ると他のコーチたちも興奮気味の表情で互いに顔を見合わせていた。

コーチたちはふだん、たとえ心の中でどう思っているか、子供たちに対してはやさしい態度を示したり、褒めたり、励ましたりすることがない。

甘え癖のついた子供たちを厳しい環境の中で鍛え、精神力を
つけさせることを教育と治療の基本方針とする戸塚ヨットスクール
の鉄則でさえある。

その"鬼のコーチたち"が興奮し、不覚にも拍手を送ってしまった
ほど、その出来事は大きな意味を持っていた。

「モグラが優勝した。それも、3回続けて！」

東も、他のコーチたちも、胸に熱いものがこみ上げてくるのを、じ
っとこらえていた。

目の前で起きていることが奇跡のように思えてくるのである。

モグラは中学3年の男の子だが、身体の発育程度や立ち居
振る舞いからは小学生のような印象しか受けない。

モグラ自身、まわりにどう反応しているのかわからず、キョトンとし
ている。みんなから拍手が送られると、彼は周囲をキョロキョロ見
回し、やっと白い歯を見せ、恥ずかしそうにニツと笑った。

「モグラが笑った！」

コーチたちは一様に心の中で快哉(かいさい)を叫んだ。東はこの
子供を初めて迎えに出向いた時の、異様な印象を思い起こして
いた。

モグラは幼いころから部屋にこもり、折り曲げた両膝をかかえるよ
うに座って、1日中テレビを見ていた。

父親は会社員、母親は小学校の教師。

昼間はいつも両親のいないカギっ子で、昼食はカップめんという
生活だった。

登校拒否が始まったのは中学1年から。ヨットスクールへ連れて
こられる3年まで、始業式と終業式以外は、ほとんど学校へ行っ
ていない。

学校は家の真ん前にあり、「行ってきます」といって玄関を出れ
ば、もう校門という近くにあるのに、である。

学校へ行かなくなってからも同じ格好でずっとテレビを見、カップ
めんを食べていた。テレビを見るといっても、積極的に何かの番組

戸塚ヨットスクール

を見たくて、かじりついているというのではない。画面に何かが映っ
ている間、漫然とその前に座っているのである。

幼いころからそうだから、遊び友達がいるわけもない。ますます家
の中に閉じこもってしまう。

無口で、性格のおとなしい子で、家庭内暴力をふるうような元
気さえない。

「おとなしくて、いい子なんですががねえ」

迎えに行ったコーチの東秀一に、父親はいったものである。子供
が連れられて行くというのに、教師である母親は学校に行っていて
家にいなかった。カップめんを食べさせて平然としている神経といい、
いわゆる「母原病」の典型的なタイプである。

ヨットスクールへ連れてこられるまで、その子は自分1人で児童
相談所へ通っていた。珍しいケースだが、相談所にはやさしいお
姉さんがカウンセラーとしていて、いろいろ話をしてくれる。

彼は週1回、そのお姉さんに会えるのが唯一の楽しみで、進ん
で通っていたというから、よほど母親の愛情に飢えていたのかもし
れない。

東が、首都圏のある市にあるモグラの家まで車で迎えに行った
時、小学生くらいの男の子がヨタヨタとお茶を運んできた。中学生
の登校拒否と聞いていたので、兄がいるのだろうと思っていると、

「あの子です」

と父親がいった。

子供は精神的にも肉体的にも発育が停止し、委縮してしまっ
ているようであった。

その子は珍しく素直についてきた。

「ヨットに乗って、身体を鍛えておいで」

父親からそういう含められ、ヨットに乗れるのを楽しみにしていた
そうである。

厳しい訓練がひかえていることなど、モグラは思いも及ばなかった
に相違ない。

ヨットスクールで訓練を始めてみると、モグラは最も重症の情緒障害にかかっていることがわかった。

登校拒否でも、積極的に拒否する子供や家庭内暴力に向かう子供は、まだそれだけの気力を持っているという解釈が成り立つ。

ところが、モグラはまるで魂の抜けた、抜けガラのような人間、あるいは、動かすと反射的にわめき声を出す人形のようなものだった。

体操をさせようとすると、ギャーツ。殴るかまえを見せただけで、ギャーツ。

放っておけば1日中でも、膝をかかえたまま、部屋の隅にうずくまっている。

そのうえ、長い間、同じ姿勢でテレビを見、カップめんばかり食べていたために、肉体的にも異常をきたしていた。

脚は極端なX字型。足は、はっきり八の字型とわかるほどの内またで、びっこをひいている。

背中猫背のくせに、首だけ前へ突き出している。膝をかかえ、丸くなって、すぐそばでテレビを見ていたせいだろう。さらに、胸が前へ飛び出している。

「ウーム。これは、いくらなんぼでも、手に負えんかもしれんぞオ……」

たいていのことでは弱音をはかない校長の戸塚がモグラを見て大きな溜息をついた。

情緒障害だけならいくら重症であっても、これまでも治してきた。しかし、身体がこんなにいびつになっているのは一種の身体障害であって、医師ではない戸塚の手に負えるはずがない。

そのうえ、情緒障害を治すには激しい体操によるしごきと、ヨットの厳しい訓練が不可欠だから、身体に障害があると訓練に耐えられない。

だが「出来ない」といって引き下がるのが何よりも嫌いな戸塚は「返してこい」とはいわなかった。

「出来るところまでやってみようじゃないか」

戸塚はそうやってモグラを引き受けてしまった。

「あれが、ウチの校長のいいところであり、欠点でもある」

コーチたちはそう思った。

頼まれるといやといえない性格の戸塚は、ヨットスクール本来の対象でない知恵遅れの子供を何人が無料で面倒見たり、精神分裂の疑いを持たれている子供を同じように「やれるところまでやってみましょう」といういい方で引き受けていた。

以来、校長をはじめ全コーチたちはモグラとの苦闘を続けてきていたのである。

「オイ、モグラが涙を流したぞ。見たか！」

コーチたちが胸はずませて話し合ったのは、東秀一がモグラを引き取って来てから3カ月たったころである。

意思も感情も眠っていたモグラが初めて見せた感情の表現であった。

それまで彼は、どれだけ大声で叫んでも、苦しそうな表情をして見せるだけで、目に涙が浮かんだことがなかった。

ヨットスクールへ来てからのモグラは、どんな粗暴な非行や暴走族よりも手間がかかった。彼らはともかくも動かそうとする。が、モグラは殴られても、海へ放り込まれても、ただわめいて逃れようとするだけで、何もやらない。

「なんといわれてもいいから、返してくるか」

ふだんはグチをこぼしたことのないコーチたちがさすがに疲れはてて、こんな言葉がつい漏れてしまう。

だが彼らはまた思い直して、再びモグラとの苦闘に取り組むのだった。

とくに、モグラを自宅まで迎えに行った東コーチの苦労はひとかたではなかった。

夕食、風呂を終わってからの、しばしの自由時間。みんながマンガを読んだり、ダベったりしている時にモグラだけが部屋の梁にぶら下がって懸垂をやらされている。フラフラになってもなお、東の怒号と鉄拳が飛び、モグラは悲鳴を上げる。

事情を知らない者が見れば、東がモグラだけをいじめているように思うはずである。だが、東もまた、1日の激しい訓練が終わり他のコーチたちが休んでいる時、モグラにつきっきりで怒鳴ったり、しごいたりしているわけだ。デモンカ先生ならとっくの昔に家へ帰って休んでいる時間である。

東にかぎらず、校長以下のコーチたちにとってはそれぞれに「気にかかる子」がいる。自分がたまたま迎えに行ったという理由から気にかかる子もいれば、なんとなくウマが合う子もいる。すると、コーチたちはそれぞれ自分の気にかかる子の担当のように、いつの間にかなくなってしまい、つきっきりで一段と厳しくしごくことになる。モグラなどは「東門下生」と冷やかされたほどだ。

それだけに、モグラの涙を初めて見た時のコーチたち、とくに東秀一の感慨はひとしおだった。

山口孝道コーチは悲鳴をあげながらしごきに耐えているモグラの姿を見て、

「あれは情緒障害の子供が生まれ変わる陣痛のようなものだ」と感慨深げに語った。

涙を見せたのを境に、モグラに少しずつ変化が見えはじめた。こういう子供たちは、訓練を受け始めてから徐々に変化しているはずなのだが、ちょっとした出来事をきっかけにその変化がはっきり見えはじめる。

モグラから、わめき声が少しずつ消えてゆき、やがて、苦しい体操にも唇をふるわせながら耐えようと努力している様子がうかがえるようになった。

体操の号令の声も少しずつ大きくなり、ランニングやヨットもしんがりを抜け出した。

不思議なことに、肉体の異常も、ほんのわずかずつだが直りはじめていた。階段を、老人のように1段ずつ、ゆっくりとしか上がれなかったのが、片足でピョンピョンと上れるようになると、X字型の脚、極端な内またまでが矯正されていく感じだった。

ふつうの情緒障害児は身体を鍛えることによって精神のねじれを矯正していくのだが、モグラの場合は身体を鍛え、精神のねじれが治るに従って、再び肉体の異常までが矯正されるという得がたい効果を生みつつあった。

戸塚ヨットスクール

いずれの場合も精神と肉体が不可分であることを物語っている。

「これは新しい試みになるかもしれない」

戸塚は期待と自信を深めている。

モグラがヨットレースに連続優勝したのは、それから間もなくのことである。

ヨットスクールと『角屋』旅館

「本当なのかと、信じられないような気持ちです」

と、父親がいった。

「あの子が、あんなにやさしい言葉をかけてくれるなんて……」

母親は声をつまらせた。

「そりゃまあ、本当によかったですわねえ」

女将がお茶をすすめながらいうと、主人も、

「戸塚先生たちは厳しいが、ちゃんと面倒を見てくれますでねえ……」

と、応じた。

「ありがたいことだと思っております」

と、父親が頭を下げ、母親も黙ってうなずいた。

『角屋』旅館の朝のひとつとき。

すぐ下に三河湾が広がる見晴らしのいい帳場で『角屋』の主人岩本鋼一、女将菊枝と、戸塚ヨットスクールへ子供を預けている両親とが雑談を交わしている。

「お早うございまあーす」

と、はずんだ声をかけて、この家の娘節子が顔をのぞかせ、

「ゆうべは話がはずんだでしょう」

と、仲間に加わった。

「ハイ、息子の方は疲れていたとみえて、いつの間にかぐっすり眠ってしまいましたが、わたくしどもは嬉しくて、まんじりともできませんでして……」

と、母親は前夜の嬉しさをかみしめるようにいった。

「あ、もうヨットが出ている！」

節子の声で、みんながいっせいに窓の方を見た。

すぐ目の前の海に、赤、白、黄色と、色とりどりの帆を立てた小さなヨットが、円を描きながら、ゆっくりと流れている。

空は抜けるように青く晴れ渡り、朝のさわやかな太陽が三河湾一面にふりそそいで白い波頭に照り返しキラキラと輝いている。

対岸の三河が、くっきりと浮かび上がっていた。

「さあ、良い子の皆さん、集まりましょう！」

指令船の上のマイクの声が、風に乗って旅館の帳場まで聞こえてきた。

「フッ！」

と、『角屋』の一家が思わず吹き出し、こらえ切れないように大声を出して笑っている。

「あれは、可児コーチの声だよ」

と、女将が笑いながらいった。

笑い声が起ったのは校長に次ぐベテランの可児熙充(かにひろみつ)コーチの、ひょうひょうとした風貌を思い浮かべたからだだった。

戸塚ヨットスクールは「良い子の皆さん」などといういい方は口がさけてもしない厳しい所というのが定評である。それに、子供たちはとても「良い子」などとはいえない状態の子ばかり。

校長の戸塚は間違ってもこういう冗談をいえない性質だが、可児は時々、人を食ったようなことをニコリともせずという。

この両親は、戸塚校長の許可が出て、北海道からはるばる子供に会いに出てきたのだった。

遠方から面会に来た親はほとんど全員が、この『角屋』に泊まる。その夜に限って、子供も親と共に旅館で夕食をとり、親と一緒に泊まることを許される。

厳しい訓練の毎日を送っている子供にとっては嬉しいひとときである。

なかには里心がついて、その直後に脱走を図る者もたまにはいるが、面会が許されるようになれば、帰れる日がそう遠いものではないだろうと予測できるので、ほとんどの子供は辛抱強く"解放"される日を待つ。

この両親の息子は非行と家庭内暴力だった。

中学生だが体の大きい方で、そのうえ空手をやっていて、めっぼう強い。

家の中で暴れだすと母親はもちろん、父親にも足蹴り、空手チョップをダウンするまで加えた。両親ともナマ傷が絶えず、逆に身の危険を感じて、紹介された戸塚ヨットスクールへ頼み込んだのだった。

「厳しくしごく所と聞いたので、お願いにあがりました」

と、両親はいった。

狂暴な子供を両親ではとうてい連れてこれない。

戸塚やコーチたちが迎えに行った時、その子供は学校にいた。教室の仲間たちの前で、斜めにかまえた身体を揺すりながら、「おれあ、ちよいと行ってくるからよ」

といい残し、両手をポケットに突っ込んだまま、肩で風を切って、戸塚たちのいる車の方へのっそのっそという感じで歩いてきた。

いきなり、その胸ぐらを戸塚がつかまえて、4、5発、続けざまに強烈なボディブローを食わせ、コーチがさらに数発と足蹴り。みんなの前でペシャンコにたたきのめした。あまりの激しさに、見ていた不良仲間が真っ青になったほどだった。

車に放り込み、逃げるといけないので、そのまま北海道から延々、河和まで走り続けた。

「もう、たいぶ良くなりました。1度、会ってみられてはいかがですか……」

戸塚が誘っても、両親は怖がって来ようとしなかった。良くなっている、というのが信じられなかったからである。

何度目かの誘いを受けて、やっと会う決心がついた。

「すみませんでした」

手をついて謝る息子の変わりように、両親は眠ることができなかったのである。

外泊許可は出ても、朝になれば子供は6時からの体操に間に合うよう、起きていかなければならない。

その子は、旅館から目覚ましを借り、自分で5時に起きた。顔を洗い、布団をたたむと、

「行ってきます。今日はもう会えんかもしれんから、元気でね」

と、両親に挨拶をして、出かけていった。

両親はその息子を、これが親に空手チョップを食わせていた子だろうかと、信じられない思いで、送り出した。

両親はそのあと、自分たちも海岸へ出てみた。

邪魔にならないように、遠くから子供が体操をしている姿を眺め、また旅館へ帰って行く。

そうした親たちに『角屋』の主人夫婦は、ころ合いを見計らって、「ちよっとお寄りになりませんか」

と、お茶に誘うのが常である。

そして、ヨットスクールのお話をあれこれして聞かせ、ヨットスクールについて書かれている各種の記事などを見せて、世間話をする。

親にしてみれば、事情をよく知った第三者から話が聞ければ安心でもあるし、同じような境遇にある他の家族の話を教えられて励みにもなる。

そして、自分たちの身の上話も聞いてもらう。

朝のひとつきの、この帳場は、人生相談の観を呈する。

『角屋』はこの家の主の考え方を反映してか、一風変わっている。玄関の戸をガラリと開けてから帳場にたどり着くまでに五十余の階段を登り、長い廊下を進まねばならず、距離にしてもおよそ、50メートルはある。

客は、どこまでも階段を登り、廊下を進み、やっと帳場にたどり着いて、

「やあ」

と、声を掛けて初めて、

「いらっしやい」

という挨拶を受けることになる。

知らない客は、心細くなって階段の途中から帰ってしまうこともある。玄関の戸を開け、はるか上の方まで続いている階段を眺めただけで、溜息をついて、サヨナラをする客もいる。

そんな客のいることを、この家の主は知らないわけではないのだが、エスカレーターをつけたり、旗を持った男衆を常時玄関にはべらせるといった気の利いたことは、どうやら、やる気配がない。

それでもこの宿は、なんとかやっている。というよりも、繁盛している。

客たちは性懲りもなく階段をトコトコ登っては、帳場までたどり着き、

「やあ、また来た」

と、声を掛ける。

すると、帳場の暖簾がひょいと上がって、

「いらっしやい」

と、主が顔を出し、その背後から、

「まあ、まあ、お久しぶりでございます」

と、女将の大仰な声が聞こえる。

べつだん、お世辞をつかうわけでもない。

枝ぶりのいい松をとおして青く広がる海が見渡せる所に、大きな風呂があり、数人の客が入っていた。

「オイ、石鹼が切れとるぞ」

「おやじにいて、もらってこにゃ、いかんわい」

客の1人が飛び出して行って、石鹸を数個、持って帰ってきた。

「サービスが飛びきりいいというわけでもないのに、なんで、また来てしまったのかね工、オレたちは」

「行こうといったのは、お前さんだろうが」

「それはいい考えだといったのは、お前ではないのか」

「なんとなく、ホツとするから、不思議なのよ、この家は」

「違えねえ」

客たちは、そんな会話を交わしている。

客はほとんどが、主と女将と一家がかもし出す不思議な雰囲気、気に惹かれてやってくる常連たちである。

そんな宿に、東大の偉い先生もくる。大きな会社の会長さんや、社長さんもくる。近くまで仕事でくると、お付きをまいて、1人でフリとやってくる。

東大の先生も、会長さんも、五十余段の階段をトコトコと上ってきて帳場の前に立ち、うんとこ、しよ、と腰を伸ばす。

「おやじ、また来たぞオ」

「女将、おるかア」

すると、やはり小さな帳場の暖簾がひよいと上がって、

「いらっしゃい」

と、主が顔を出し、

「おや、おや、お久しぶりでございます」

と、女将が大仰に挨拶をする。

「さ、どうぞ、どうぞ、こちらの方へ。お疲れでございましたよ」

女将の案内する声が響いて、客たちはやっと、宿らしい扱いを受けるのである。

この家の主と女将は、住む部屋がないわけでもないのに、4畳半ばかりの小さな帳場に寝起きをし、1日のほとんどを過ごしてい

る。実際には6畳の広さがあるのだが、茶筆筒や書類入れのスペースを除くと、まさに方丈であり、そこで語られる苦汁に満ちた人生の悲喜こもごもは現代の方丈記にたとえられようか。

帳場の隣に、ソファを置いた応接間が一応は造られているのだが、余程の場合以外、主たちは客をこの小さな帳場に招き入れるし、客たちも心得たもので、帳場へ入り込み、雑談に花を咲かせていく。

200人は収容できるという和風の大きな旅館のなかで、実質わずか4畳半のこの小さな帳場が、主たちの居間、応接間、寝室、指令室といった、多様で重要な役割を仰せつかっているのである。

宿屋というところはもともと、客たちが人生のドラマの一端をのぞかせては去って行く舞台ではある。

しかしながら、この小さな帳場がとりわけ今日的な苦悩と人生の語られる方丈となったのは、戸塚ヨットスクールがこの閑村に登校拒否という「現代」を持ち込んでからのことである。

そして、今日もまた、静かに広がる海原を眺望するこの小さな部屋で、主夫妻は、北海道から訪ねてきた親たちとの四方山話に、ひとときを過ごしているのである。

主が女将の方を向いて、いった。

「この間も議事が終わってから、町長とヨットスクールのことを話してきた。百数十人も順番待ちがおって、それでもまだ毎日申し込みが増えているらしいよといったら、戸塚さんところが繁盛なのは結構な話だが、日本はいったいどうなってるのかねと、顔をくもらせておった。全く、えらい世の中になったもんだ」

「結局、私どもが甘やかしてしまったために、子供がああいうふうになったんだと思います。今になって振り返ると、いろいろ思い当たることあるのですが、息子がああいうふうになるまでは全然気づかずに、これでいいものだ、疑うことすらしませんでした」

母親の述懐である。

「若いうちに厳しい生活しておくのは、本人のためですよ」

と、主がいう。

「私たちも軍隊で厳しい訓練を受けましてねえ。その時はつらいと思ったものだが、後になってみると、随分役に立っている。敗戦

後の苦しい時期も、それで乗り切ることができた。戦前がみんなよかつた、といつとるわけじゃないんですがね」

「私どもに好一という跡取り息子がおりますんですがね」

と、女将が後を受けた。

「高校に上がった時から、東京にいる叔父の所に預けて面倒をみてもらいました。叔父は大学で教えておったりしりましたのですけれど、昔気質の大変厳しい人でして、好一はそこでビッシリ、仕込まれたと申しております」

そこへ、この家の長男好一が顔を見せ、

「何の話？」

と、帳場へ入ってきた。

「あ、噂をすれば影だ」

と女将。

「お前も、1つ間違えばヨットスクール行きだったという話さ」

主がいった。

「あ、あの話か」

好一はうなずいた。

「あの時は、厳しかった。なにしろ、寄り道というのが絶対許されない。学校が終わると真っすぐ家へ帰る。叔父が時間を計って待つとるわけです。帰るとすぐ、机に向かって勉強。とにかく、常に机に向かっていないと、バシッとやられましたなあ。」

叔父の家では何人もの学生が同じような生活をしたりしましたが、苦しくて脱落した者もいる。私も当時、自分だけがなんでこんな時代離れた学生生活を送らなくてはいけないのかと、恨めしく思ったものですが、今にして思えば、あれで救われた面が随分ありますねえ」

この旅館で見ていると、情緒障害児を持った親にはある種のタイプがあることが、おぼろげながらわかってくる。

父親はしっかりしているが寡黙で、母親がとりとめなくよくしゃべる、出しやばり型。

母親は控え目で、しっかりしているけれど、父親の方があまり意味のないことをよくしゃべる優柔不断型。

両方のタイプに共通しているのは、力関係において父親が弱く、母親が強いということである。

中には、両親とも「あ、これじゃ、ダメだ」というタイプもいる。

逆に「こんな立派な人たちから、なぜ、ああいう子が育ったのか」といぶかるような夫婦もなくはない。

お手伝いさんたちの観察によると、食事の終わったお膳の上をきちんと片付けたり、運びやすいようにお盆の上に整理しているのはまれで、食べっ放しで平気という母親が圧倒的に多いという。子供はそれを見て育っている。

総じて、身勝手に思いやりのない。気がきかない。常識がない。

美人で、聡明、よく気がついて、しかも控え目。非の打ち所がない母親なのに、なぜ、こんな子供が——といぶかるような人は、これまでわずか1人である。

海とヨットに魅せられたコーチ

ヨットスクールにはいま、戸塚宏校長以下常勤、非常勤合わせて16人のコーチがいる。

うち、女性は3人。

可児熙允、加藤忠志、東秀一、横田吉高、山口孝道、境野貢、小杉信雄、村上光昭、竹村聡、東山洋一、土井一輝、ダグラス・マクレーン、磯貝桑次。

吉田恒美、山口伸子、岡山千津子。

ほとんどはヨットと海が好きで戸塚のもとに集まってきた人たちだが、年齢、経歴とも変化に富み、いかにも新しい試みを始めたばかりの草創期の学校の観を呈している。

たとえば、加藤コーチは国体で優勝、入賞の記録を持つベテランのヨットマン。ヨットのスナイプ級で、昭和33年優勝、35年と36年は2位、37年と38年は3位——と赫々たる成績。

他に、ラジコンで操作する模型ヨットのマニアという隠れた特技を持っており、昭和52年から開かれている模型ヨット全日本選手権では、56年まで5回のうち、53、55、56の3回優勝、さらに国際選手権にも出場して50年の英国大会では2種目に4位入賞、55年のカナダ大会でも1種目に4位入賞をしている。

模型ヨットはもちろん自作だから工作の腕は大変なもので、ヨットスクールでも漁師が廃船にしようとしているような無蓋船を買ってきて、覆いや屋根を取り付け、操縦室まで付いた立派な船をたちまちにして造り上げてしまう。

器用さという点では村上コーチもなかなかのもので、ヨットスクールへコーチとして入ってくる時に、「飛鳥」と命名した手造りのヨットを携えてきたほどである。

東コーチはサラリーマン、横田コーチは自営業だったが、海とヨットの魅力に抗し切れず、この仕事に飛び込んだ。

小杉、竹村コーチらは大学を出てすぐヨットスクールへ。ヨット好きの小杉は大学時代にアルバイトできていて、情緒障害児を立ち直らせる仕事に精魂を傾けている戸塚ら先輩たちの姿に感動してそのままのめり込んでしまった。竹村は筑波大学を卒業後、さらに同大学教育研究科で研究を重ねたのちヨットスクールで実践に入った。

長崎造船大学出の境野はこのヨットスクールのコーチとして神戸ポートピア博記念太平洋横断レースに出場、近く郷里熊本 of 医師の娘、古閑千恵子と結婚の予定。新婦は名古屋市にある戸塚の自宅兼ヨットスクールの事務所で、戸塚夫人幸子を助けて事務をとることになっている。

山口孝道、山口伸子の両コーチは新婚間もないカップル。伸子は旧姓山本といって、保育園の先生になろうと思っていた子供好きの女子大生だったが、学生時代、情緒障害児訓練に関心を抱きヨットスクールを見学に来たのがきっかけで、この仕事の魅力にとりつかれて、卒業後コーチとなり、やがて先輩である山口孝道コーチ夫人となった。

吉田コーチは看護婦としてのキャリアを積んでおり、身体と精神の虚弱な子供たちを対象に、激しい訓練を日課とするヨットスクールにとっては欠かすことのできない貴重な存在である。

東山洋一、土井一輝、岡山千津子の3人はいずれもかつての情緒障害児たち。東山は登校拒否、土井は暴走族、岡山は非行。3人ともヨットスクールで戸塚たちの厳しい訓練に耐えて立ち直り、そのままコーチとして昇格を許された。

とくに東山洋一はヨットマンとしての技術向上著しく、戸塚宏の推挙によって神戸ポートピア博記念ヨットレースに出場、18歳、世界最年少で1人ぼっちの太平洋横断に成功、見事5位に入賞した。

ヨットスクールでは"謎の人物"とされているのが戸塚校長に次ぐベテランの可児コーチ。推定30代後半にして独身。年齢、経歴、過去をいっさい語らず、表面に立たず、写真を撮られるのさえとことん逃げるシャイな男で、まさに影のごとく戸塚の補佐役をつとめている。検事を目指す優秀な法学徒だったが、学生運動で挫折、世捨て人のごとくさすらって海へやってきた——男のロマンを絵に描いたような噂が周辺で語られている。たまの休日には飄然と姿を消して行方不明になるが、ヨットスクールを卒業した教え子たちの家をひそかに訪ね歩いているらしいと噂されている。なんとなく、みんなから一目置かれているNO.2である。

戸塚ヨットスクールには2人の異色の非常勤コーチがいる。

1人はダグラス・マクレーン。

ハイスクール3年、17歳の少年だが、来るべきロサンゼルス・オリンピックの候補選手になっている。

アメリカ・ヨット界のホープである。

もう1人は磯貝桑次。

明治35年生まれの79歳。

かつて、名古屋あたりのその筋の間では「河和の磯貝」といえば、ちょっと名前の知られた侠客(きょうかく)であった。はるか昔にその道から足を洗い、郷里の河和に引っ込んで、いまや老妻と2人、楽隠居の身だが、足を洗った理由が、この世界からも仁侠がすたれてしまったから、という。

「素人衆には手を出す、弱い者はいじめる。けんかが弱いくせに、金と権力と女には薄汚くなる……おらあ、そんな世界がほとほといやになった」

海岸沿いの静かな生活を愛していた磯貝に、1つの情熱を与えたのがヨットスクールだった。

79歳にして斗酒なお辞さず、かくしゃくとした磯貝は、毎朝5時起きをして、河和の海岸沿いに一里の道を散歩するのを習わしにしていた。

そんなある日、彼は散歩道に近い海岸に異様な光景を発見し、毎朝、見に来るようになった。ヨットスクールの体操だと、後でわかるのだが、元侠客のこの老人はヨットスクールのなんたるかを知らないうちから、眼光鋭く筋骨たくましい戸塚たちと、感動を失った子供たちとの葛藤の光景から、ここで行われていることの意味を感じとった。

「暴力はやめなさいッ！」

と叫んだ"善良な市民"と磯貝の受け止め方は対照的であった。

磯貝は戸塚やコーチたちと、言葉を交わし、合宿所へ出入りしているうちに、いつの間にか非常勤コーチを買って出るようになった。

朝は6時前にちゃんと合宿所に姿を見せて、全員を起こす。体操も一緒にやり、背筋をピンと伸ばし軽々と腕立て伏せをやって見せながら、

「こんなジイがやれるのに、なぜ出来ん！」

と、一喝するのである。

老人に名をなさしめて、くやしい！と思うような子なら、ヨットスクールに来る必要はないのだが……。

磯貝は、ヨットスクールを修了した子に就職の世語をしてやり、学校へ行く子の下宿を捜してやり……戸塚たちを感激させている名物老人である。

ダグの乗ったヨットは、他の少年たちをぐんぐん引き離していく。スタート地点の選び方、タイミングの計り方、微妙に変化する風の方向と強さへの合わせ方、身のこなし……。

どれをとっても他の子供たちとは比較にならない技量を発揮し、オリンピック候補選手のすごさを目の当たりに見つけた。

「全国かざぐるま大会」——全国に6カ所ある、普通児を対象とした戸塚ヨットスクールの代表たちによる競技大会が2日間にわたって河和で催された時"招待選手"の形で参加したダグラス・マクレーンは、7回のレースに圧倒的強さを発揮して全勝優勝した。

この大会には河和で合宿訓練を受けている情緒障害児たちの代表も参加した。

興味深かったのは、台風接近を伝える荒れ狂った海では、連日厳しいしごきを受けている障害児たちの方が、普通児よりはるかに勇敢にヨットを乗りこなしていたことだ。

大会が終わると、ダグを講師として実地訓練、講義が連日、行われた。昼間はダグが指令船に乗ってマイクを握り、走法の指導。夜は合宿所で理論の講義。それを、アメリカのダグの家に預けられている土居秀彰という少年が通訳する。

この情緒障害児たちは第1級の国際的ヨットレーサーと、オリンピック候補選手という、願ってもない指導者たちの薫陶を受けたことの価値を、いずれは理解する日がくるのだろうか。

ダグの父親は戸塚のアメリカにおける知人である。政府機関に勤める高官で、地位、収入とも豪邸に住んで不思議のない立場にありながら、

「子供は一人前になるまでぜいたくをさせてはいけない。だから、親も一緒に生活をする」

と、一家、ヨットで生活をしている。

ロサンゼルス郊外マリナ・デルレイという世界一のヨットハーバーに、両親は長さ 12 メートルの日本製ヨット、一人息子のダグはその隣に 6 メートルのヨットを停泊させ、そこから学校にも通っている。

ダグは、小遣いも、ヨットを買う資金も全部、アルバイトをして自分で稼ぐ、厳しい育てられ方をしている。

ダグの家庭に預けられている土居秀彰は横浜の煎茶の家元の息子。軽い登校拒否でかつて戸塚の所に来ていたが、頭とヨットがずば抜けて出来るので、日本に置いておくのは惜しいと、戸塚が留学を勧めたのだった。

以来、ダグは学校が休みになると土居の里帰りについて日本へやってきて、戸塚ヨットスクールで情緒障害の子供たちを相手に非常勤コーチとして、実技、理論の指導に当たっている。

戸塚ヨットスクールのコーチたちはみんな、家族と離れて合宿所に情緒障害児たちと一緒に泊まり込んでいる。早朝から夜までの激しい訓練、夜中はトレーニングウェアのまま寝袋に入り、四六時中生活を共にしている。名古屋や大阪の自宅に帰るのは月に 1 度か、2 度。

たとえば、名古屋の自宅兼事務所で留守を預かる戸塚校長の幸子夫人などはコーチたちから"未亡人"と呼ばれている。

「未亡人から電話……」

というから誰のことかと思うと、戸塚夫人なのである。

戸塚校長が自宅に泊るのは月に 1 日あるかなし。新入りの子供を迎えに行くとか、講演とか、所用で名古屋を通過する際にはできる限り自宅に寄るように努めているようだが、忙しい身体なので思うにまかせないことが多い。

戸塚には淳子、洋子という女の子が 2 人いる。1 人は昭和 49 年、下の方は 53 年の生まれ。

家に帰った時の戸塚は、これが"鬼の校長か"と目を疑うほどの甘いパパぶり。可愛い女の子 2 人が両側からびったりまとわりつき、それを戸塚は両手で抱え、目尻を下げて、いい子、いい子……。

「ボクだって自分の子供のこととなるとからっきし自信がない。だから、厳しく仕込むのは他人の役割りなんだ」

というのが戸塚の理論。

ほとんど母子家庭同然なのに幸子夫人の育て方がいいせいとか、デキた娘さんたちで、父親の戸塚がヨットスクールへ向かおうとする

「パパ、今度はいつ来るのオ……」

などといいながら手を振って見送っている。

親子の対話がないから子供がおかしくなる——などという話はここでは通用しないようだ。

戸塚もコーチたちも家族とは離ればなれの生活、いわば、他人の子供を立ち直らせるために自分の家庭を犠牲にしているようなものだが、犠牲にされた家庭の子供たちは伸びやかに明るく育っているのだから、神は味な采配をしている。

試練に耐えた子供たち

「オイッ、カラス。ちょっと来い！」

校長の戸塚がある朝、コーチ室から生徒たちのいる広間に声をかけた。

「ハイ」

と、カラスと呼ばれた少年は返事をしてコーチ室の前まで小走りやってきた。直立不動の姿勢をとって、校長の言葉を待っている。

「帰れ！」

と戸塚が短くいった。

戸塚は腕組みをして、生徒に背を向けたままである。

「ハア！？」

カラスは、しり上がりの声で問い返した。彼には戸塚の発した短い言葉の意味がわからない。直立不動の姿勢のまま、キョトンとした表情で立っている。

「もう、おまえみたいなヤツはいらんわい。帰れよ！」

戸塚は依然として背を向けたまま、繰り返した。Tシャツと短いジーンズからはみ出した戸塚のがっしりとした襟筋、腕脚が黒光りに輝いている。

戸塚の言葉を当世風のやさしさに翻訳すれば、おそらくこういうことになるのだろう――。

「君はもう大丈夫、立派に立ち直ったから、家に帰っていいですよ。苦しい訓練によく耐え抜きました。偉かったね。校長先生だって、なにも君を憎くて殴ったり蹴ったりしたわけじゃない。君に立派な人間になってもらいたくて、心を鬼にせざるを得なかったんだ。わかるね。

これからは、もう2度と悪い子にならないように、一所懸命、頑張るんですよ、」

女性コーチの吉田恒美は、素顔の戸塚ほど繊細で心配りのゆき届く男性を、これまで見たことがないといっている。だが、戸塚は他人に対してそういう素顔を見せない。

もし、だれかが、この当世風のやさしさに翻訳した言葉を戸塚に聞かせたら、彼はおそらく「オエーッ」と吐き気を催して、荒れ狂う海の中へザブンと飛び込んでしまうだろう。

戸塚の2度目の言葉を聞いて、カラスはやっと、その意味がのみ込めたようであった。

彼の目に一瞬、喜びの色が浮かんだかと思うと、見る見るうちに顔じゅうに広がっていく――。

「ハ、ハイッ！」

カラスはびっくりするほど大きな声をはりあげて返事をすると、ぴよこん、と、戸塚の背中に向かって頭を下げた。そして、ぴよん、ぴよんと跳びはねたい心の高ぶりを懸命にこらえながら、仲間たちのいる広間へ戻って行った。

「オイッ、カラス。もう帰れるのかア……」「いいなア……」

戸塚ヨットスクール

仲間たちが雰囲気を感じて察知して、カラスを取り巻いた。

カラスを取り囲んだ仲間の少年たちは、うらやましそうに、何度も念を押している。

「本当に帰るのオ……」「本当?!」「ウウア……」

家にいる時には、我儘から親の首を締めたような子供でも、家を長く離れ、厳しい生活を味わってみると、やさしい親が恋しく思われるのであろう。やはり根は、幼い子供なのである。

自分もカラスと一緒に家に帰ってしまいたい。それができないもどかしさを、カラスへの羨望の声に精いっぱいこめているのである。

ヨットスクールに来ている情緒障害の子供たちが、これほど感情を素直に見せるのは、珍しいことであった。

しかし、感情を現すのは比較的回復した子供たちであって、ヨットスクールへ連れてこられたばかりの重症の障害児たちは部屋の隅にうずくまって、恨めしそうな視線を向けているだけである。

ヨットスクールを無事修了して帰宅させる子供に対して、戸塚は事前に予告することもなければ、やさしい言葉や、励ましの言葉をかけることもない。

カラスの場合のように突然通告したり、親が迎えにきて初めて帰れるとわかる、といった方法をとる。カラスもそうだが、本人には全く知らせなくとも、親に対しては、何日に帰すから、迎える準備をして待っているようにと、事前に連絡をとっている。

本人に対しては厳しい姿しか見せないというのが、戸塚流の心配りなのであろう。

「私が怖い存在であればあるほど、子供は親のありがたさがわかるでしょう」と、戸塚はいった。

そんな戸塚が裏ではコーチに、

「カラスになあ、"もう、あとがないんだぞ"といってやってくれんか」と頼んでいた。

それは、こういう意味である。

カラスは東北地方に住む母子家庭の子供で、高校2年生。家は貧しくもなく、頭も悪くないが、非行と家庭内暴力で、母親も高校の先生も、手を焼いていた。

そして、登校拒否の娘を戸塚ヨットスクールで治してもらったという知人に紹介されて、母親がカラスを送り込んできたのである。

ところが、ヨットスクールで訓練を受けている間に、ギリギリのところ出席日数が足りなくなり、留年しなくてはならなくなるので、早く登校させるようにとの通知を高校から受けたが、どうしたものかという相談の電話が母親からヨットスクールへ入った――。

高校の担任の先生は、カラスを戸塚ヨットスクールへ入れることには反対だった。

母親が入れようと思うのだが――と相談に行った時、担任の先生は、
「あんな、暴力をふるうような所に自分の子供を入れるなんて、どういう神経なんですか」と、相当、激しく母親を責めた。

しかし、母親にしてみれば、さまざまに手を尽くしても子供の状態は悪化するばかりで、思いあまって親子心中を図ろうと思いつめていたほどである。

先生の反対を押し切り、すがる思いで、戸塚の所へ息子を預けたのだった。

従って、担任の先生が私情で動いているとは思いたくはないが、カラスの出席日数に担任が徹しい態度をとる裏には、そうしたいきさつがあったことを無視するわけにもいかないという、複雑な事情があったのである。

ところが、ヨットスクールとしても、カラスを家に帰しても大丈夫と自信をもっていえるまでには、あとしばしの時間を要する状態であり、そのためには出席日数に関して高校側の寛大な配慮を必要としていた。

母親や戸塚にしてみれば、わずか数日の出席日数を担任が問題にするかしないかで、カラスという少年がまともな人間として立ち直れるか否かが賭けられているという、深刻なせめぎあいの状態にあったのである。

戸塚は東北に飛び、カラスの母親を伴って高校を訪れた。高校では校長が応対に出、担任が呼ばれて同席した。

担任は「われわれ教育現場としては……」といった言い方をする若い教師だったが、戸塚に対して敵意をあらわにし、自分の方からは口をきこうとしなかった。

トレーニソグウエアにゴム草履という戸塚独特のいで立ちに対しても、若い担任が、背広婆にはらうであろうほどの敬意をはらっていないことも明らかであった。

戸塚の方も、そういう担任の先生を無視するかのようになり、校長と雑談を続けていた。しかし、戸塚は雑談を装いつつ、校長からしかるべき言質を引き出そうとしていた。

「高校といっても、最近では実質上、義務教育と変わりなくなっているようですねえ」

と、戸塚が水を向けた。

「おっしゃる通りです。高校全入といわれている時代ですから……」

と校長が受けた。

「学校教育の目的の中には、勉強を教えることと同時に、生徒の生活指導ということも入っていますねえ」

ここに至って、校長は戸塚が何を言わんとしているかを察知したようである。

生活指導が学校教育の重要な目的と課題であることに間違いはない。

校長もそれを認めないわけにはいかなかった。

戸塚はそれからおもむろに担任の先生の方を振り返った。

「あなたは、あの生徒を非行と家庭内暴力から立ち直らせることができなかった。教育の重要な目的の1つである、生活指導ができなかったということになりませんか」

戸塚は単刀直入であった。

担任はムツとした表情で黙っている。

「その生徒が、私のヨットスクールで見違えるように立ち直りつつある。つまり、私たちは教育の重要な目的の1つを果たしてきているわけです。

ならば、この間、あの生徒は学校に出席していたと同じことにならないだろうか……」

青白い顔と、黒光りの顔とが、黙ったまま、にらみ合っていた。

「まあ、出席日数について、きまりはきまりとしてあるんですが、例外規定というのもありましてなあ……」

と、校長が助け舟を出した。戸塚はすかさず、いった。

「ぜひ、もう1度、チャンスを与えてやって下さい。今度帰ってきて、またダメなら、その時はもう、無理はお願いしません」

「戸塚先生、どうでしょう」

と、校長先生が続けた。

「ここはひとつ、私におまかせ願えんでしょうか……」

校長としては、この場における担任の顔もたてる必要があった。意のあるところを察してくれ、という目で、戸塚を見た。

「よろしく、お願いします」

と、戸塚は頭を下げた……。

戸塚がコーチの口を通してカラスに「あとがないんだぞ」といったのは、こういう意味であった。

だが、カラスはこうした苦心談があったことは全く知らされていない。家へ帰って、母親から聞かされるかもしれない。高校で校長から聞かされるかもしれない。しかし、たとえ聞かされたとしても、カラスがこういう形の思いやりや、やさしさの本当の意味を理解できるのは、自分でも子供を育てるようになり、苦勞をするようになってからのことかもしれない。

そのころまでには、すでに長い歳月が流れ、ひょっとしたら戸塚宏はもうこの世に居なくなっているかもしれない。その寂しさを承知のうえで子供たちのために憎まれ役を買って出る。そういう形のやさしさの価値を、私たちは見失っているのではあるまいか。

カラスは、仲間たちの羨望の聲に送られてヨットスクールをあとにし、東北の母のもとへ帰っていった。

それからかなりたって、カラスの母親から手紙が届いた。

「母親思いの子供になり、学校にもまじめに行っています。校長先生も"このぶんなら留年はせんですむだろう"といってくれています……」と、したためてあった。

*

明子の家族は国鉄長崎駅に待っていた。父親の原三郎、母恵美子、妹容子、弟の幸一郎と健次郎。

ヨットスクールから、明子を帰すという連絡を受けたのである。戸塚校長は「もう大丈夫」といってくれたが、あれほどひどかった娘が本当に治ったのだろうか——両親は明子に乗せた列車が、一刻も早く到着してくれるように祈る心と不安とが入り混じって、複雑な気持ちだった。

改札口を出てきた明子は家族の顔を見つけると、パッとうれしそうな表情が広がり、手を振って駆け寄ってきた。顔は真っ黒に日焼けして引き締まり、目がクルクルと動いている。

仏壇の前で1万円札を燃やし、ヨットスクールへ出発する時、
「わたしば殺すとね」

と、両親をジロリとにらんだ、無感動で蒼白な姿のあの娘と同じ人間なのだろうかと思えるほどだ。

「チャンポンば、食べたかア」

と、明子がいった。

「チャンポンば、食べたいと、お父さん」

「そうかア、チャンポンば、食いたいとかア……」 母親と父親は、明子の言葉をおむ返しに、笑った。笑っているうちに涙がこみあげてきて、言葉にならなくなった。

家族は、明子がまだ素直な子供だったころ、みんなでよく行っていた中華料理店へ入った。明子は、何品かとった料理を妹や弟たちに盛り分けてやり、両親にもよそった。そして自分も、おいしそうにペロリと平らげた。

「お土産はないとね、アッコ」

父親の三郎が冗談まじりにいった。

明子はしばらく考えていたが、

「これ……」

といて服のそでを肩のあたりまで、たくし上げた。

黒く日焼けした腕に、紫色のアザがいくつも残っていた。

両親はすぐ、その意味を理解した。よく頑張って耐えてきた、と抱き締めてやりたい気持ちだった。

家族は夜遅くまで、談笑した。もう、何年も味わったことのない、団欒であった。その夜、母と娘は何年かぶりにまくらを並べて寝た。

尽きない話を終えて眠りに就こうとするころ、明子が、

「母さん、ごめん……」

ポツリといって、背を向けた。

母親の恵美子は何かいおうとしたが、言葉にならなかった。2人は背を向けあったまま、眠れないでいた……。

憧れのクルージング

ふだんは厳しさが支配しているヨットスクールの雰囲気、どことなくざわつきはじめていた。

朝の激しい体操は欠かすことなくいつものとおりだが、体操に続いて終日行われるはずの一人乗り小型ヨット、デインギーの訓練が何回か休みになっている。

男の生徒たちは何組かに分かれ、それぞれコーチの指導を受けながら、外洋航行用ヨット、クルーザーの整備、掃除、付属エンジンの点検、帆、ロープその他部品の補修と補充に忙しく立ち働いている。

女の生徒たちは女性コーチの指示を仰ぎながら食糧の買い出し、とりそろえに余念がない。

とくに、コーチ補佐としてグループのリーダー役を命じられた子供たちの働きぶりは、生き生きとしていた。

間もなく、クルージングが始まろうとしているのだった。

クルーザーに乗って航海に出かける。想像するだけでもダイナミックで、爽やかな海の旅の印象を受ける。

スケールの大きなクルージングの中には太平洋、大西洋を横断したり、世界一周の旅に出たりといったことが含まれている。

戸塚ヨットスクールで、これから行われようとしているのは、いわば卒業試験としての意味を持ったクルージングであった。

一人乗りヨット、デインギーによる連日の訓練、朝の体操、食事の支度、掃除から返事の仕方に至る日常の生活指導など、ヨットスクールの厳しい教科に耐えて回復の見通しがたち、家へ帰れる日が近づいている生徒たちのために行われる航海である。

ヨットスクールへ連れてこられた重症の情緒障害児たちは、最初、体操についていくことも、ヨットを操作することもできない。それが、腕立て伏せに耐え、ヨットに乗れるようになるにつれて、心のゆがみも徐々に矯正されてくる。

このようにして回復があるていどのところまでくると、デインギーを卒業して、クルーザーに乗せてもらえるようになる。基本の操作はデインギーと変わらないが、クルーザーの構造は、はるかに複雑で、さらに、クルージングにさいしては、地理、天文、気象、数学などの知識を要求される。

クルージングのリーダーに選ばれるということは、晴れて帰宅の日が近づいていることを意味している。

それだけに、本人たちの喜びと、まだ選ばれるほど回復していない生徒たちの羨望をないまぜにして、クルージングを前にしたヨットスクールは、ざわめいているのである。

合宿所で珍しく「勉強風景」が繰りひろげられていた。

20人余の生徒が2組に分かれ、コーチの講義を受けている。

1つの組は、生徒が4人。今度のクルージングで、各艇のリーダーに選ばれた生徒たちである。

もう1つのグループには残りの生徒全員が群がっている。

こちらは各艇に分散して乗せてもらう方。まともな子供なら各艇のコーチやリーダーを助けて立ち働くべき立場にあるのだが、ヨットスクールへ連れてこられて間もない、あるいは回復の遅れている重症の情緒障害児たちなので、あまり多くを期待できない。期待すれば失望が大きい。

講義の内容も、クルーザーの模型を前に、クルーザーとはどんなヨットか、クルージングとはどんなことをするのか、といった極めて初歩的な知識に始まる。クルージング中、本来なら君たち生徒はどんな分担をしてコーチ、リーダーを補佐すべく期待される立場にあるのかといった、各パートの仕事の分担。期待しても無駄と知りつつも、一応、講義は行われた。

子供たちはコーチのまわりに思い思いの格好ですわって話を聞いているふうであるが、わかったのかわからないのか不明の複雑な表情の者、顔はコーチの方を向きながら目が空を眺めている者、話がどのように変わっても目の表情が全く動かない者など、情緒障害がかなり重度であることを物語っている。

たいていの神経の者なら投げ出してしまいたくなるであろう、こういう子供たちに対して、ヨットスクールのコーチたちは怒ったり、叱ったりしながら忍耐強く講義を続けている。

重症児のグループに比べると、リーダーに選ばれた生徒たちの一団はキビキビとして、活気がある。

勉強の好きな、普通の子供たち、といった感じである。

その中には、両親や妹の首を絞め、脱走をはかった時には親たちが「帰ってきたら殺される！」と、コーチたちに護衛を頼んだ、あの大阪市立大生、自転車に乗って、1人ではるばるヨットスクールへ入りに来た中学生がいる。

彼らもほんの2カ月ほど前には、重症グループの子供たちと同じような状態だった。

強風の荒波の中でのヨットの訓練、激しい体操、体罰、悪口雑言……訓練は想像を絶する厳しさだったが、何年間も情緒

障害に悩まされ続けた子供たちが、わずか2カ月で大きな変化を見せたのである。

リーダーに選ばれた少年たちのグループでは、海図を広げて、これからたどる予定の航路の説明が行われている。

小さな島の名前、海の深さ、どこに暗礁があるかといった細かいことまで詳しく書き込まれた海図。

初めて見る少年たちは、物珍しげに海図に見入っている。

「このあたりは暗礁が多く、危険だ。島を遠巻きにする形で進む。いいな。ところが、この島陰に入ると、風がないってしまう。ここをどう切り抜けるか。訓練で覚えた腕の見せどころだ」

海図を指しながら、コーチの説明が続く。熱心に説明を聞き、海図を目で追う。この子供たちがなぜ、学校を嫌いになってしまったのだろうか。

「このあたりまでくると、漁船がたくさんいる。さらに進むと"本船航路"といって、石油を満載したタンカーや貨物船が名古屋港、四日市港に出入りする道になっている。あんなデッキカい船にやられてはたまらんから、遠くにいるうちから進路をよく注意するように……」

航路が終わると、今度は「天測」の講義に移った。

「天測というのは、太陽や星によって、自分がいま海の上のどの位置にいるかを測定することをいう。わかったかア」

コーチの言葉に、生徒たちは大きくなずいた。

「太平洋の真ん中を走っていると、まわりは海ばかりで、島や陸地が全然、見えない。心細いぞオ……」

つい先ごろ、太平洋を横断してきたばかりのコーチたちの話だけに、生徒たちは興味しんしん。

「……で、いま、自分は何のへんを走っているのかを確認する必要がある。天測には星を目印とする場合、太陽を目印とする場合があるが、ヨットでは太陽を使うことになっている……」

「どうしてですか？」

という質問が出た。

無関心、無感動だった子供たちが好奇心を示す……コーチにとっては報われた思いのする一瞬である。

「天測はだなあ、太陽あるいは星と水平線との角度を測って位置を決める。夜になると星は見えても、水平線は見えにくい。太陽だと、いつでも水平線は見えているだろう」

わかった、というように、子供たちはうなずいた。

「サイン、コサイン、タンジェント、覚えとるか」

久しぶりに聞く三角関数に、子供たちは懐かしそうな表情だ。

朝まだ早い河和の港。

もやのかかった曇天の三河湾へ、4隻のヨットがゆっくりと船出していった。

「風がないなア」

指令船の戸塚が恨めしそうに天を仰いだ。

微風。

帆船の航行には不都合な気象である。

せめてもの追い風に、スピンを広げ、追い風をいっぱいにはらませた。

三河湾を知多半島沿いに南へ――。

左手には朝もやの中に三河の陸地が遠くぼんやりと浮かんでいる。

「神島で会おう！」

戸塚が他のヨットに分散しているコーチたちに大声で叫んだ。

「わかった！」

というように身ぶりで合図を残して各艇は思い思いの航路と走法で走り始めた。

風を少しでも多く受けるために、迂回を試みる艇、微風にじっと耐え、チャンスを待って直線コースをとる艇……リーダーの生徒たちがコーチのアドバイスを求めながら、知恵をしばって操縦している。

その模様を眺めながら、指令船に乗った戸塚が、ゆっくりと後をつけて走っていく。

クルージングは4隻のヨットで行われている。ふだんは、生徒の操縦するヨット1隻に、コーチの乗った監視・指導船1隻の計2隻で行われることが多く、戸塚ヨットスクールのクルーザー4隻が総出でクルージングに出るのは珍しいことである。生徒も金員乗せており、それだけに華やかな船旅の雰囲気全艇に漂っていた。

4隻の乗り組みは次のようになっている――。

①校長艇。校長、戸塚宏が総指揮官として乗り組み、元暴走族の少年が生徒リーダーとして補佐。

艇は、ふだんの訓練ではコーチが乗り組んで指揮に当たる指令船として使われている。「カッター」と呼ばれ、20数人乗りの、ヨットスクールでは1番大きなヨット。

②横田艇。コーチ横田吉高が指導に当たり、生徒リーダーは大阪市立大生。

③境野艇。ポートピア記念太平洋単独横断レースに参加して、アメリカから帰ったばかりのコーチ境野貢が指導に当たっている。境野は帰国後すぐ見合いをし、結婚間近の新進。生徒リーダーは元非行の少年。

④小杉艇。大学を卒業して間もない若手コーチ小杉信雄が指導に当たり、自転車でヨットスクールへやってきた少年が生徒リーダーをつとめている。

その他の生徒たちは校長、コーチの指示に従って4組に分かれ、それぞれの艇に分乗している。

ヨットは白い帆を風になびかせながら、三河湾を太平洋に向かってゆったりと走っている。

艇に乗っていると、風が緩やかなせいか、水を切って進んでいるという感覚はあまりないが、しばらく時間をおいて陸地を眺めると、さっきまで真横にあったはずの建物がはるか後方に移っていたりする。

漁船が数えきれないほど群がり、思い思いに網を引いている。漁場にさしかかったのである。

ヨットはそのあい間をぬい、網を避けながら進んで行く。

はるか向こうの方に、巨大な船影が姿を現した……と見る間に、右からも、左からも大きな船が走ってくる。

「あれが車の専用輸送船。あれはコンテナ船……」

戸塚が双眼鏡をのぞきながらつやいている。

外国航路の船が名古屋、四日市港などに出入りする"本船航路"に近づいているのである。

ふと気づくと、大きな船がヨットと並びながら、すぐ左側を走っていた。「鳥羽海上保安部」の文字が見える。

海上保安庁の巡視艇だった。

「何か問題はないか、さぐりに来たんです。しかし、それだけじゃない。彼らも海や船が好きな男たちだから、このヨットのように珍しい船がいると見たくなるんですよ」

こうした光景に何度も出会っている戸塚が説明した。

そういえば、保安庁の制服を着た乗組員たちがデッキに身を乗り出して、ヨットの方をじっと眺め、巡視艇はなかなか立ち去ろうとしない。

ヨットの帆の上を、何羽かの鳥が輪を描きながら舞っている。

見上げると、曇っていた空がいつの間にか晴れ間を現わし、その隙間から太陽がのぞいていた。

「黒潮です」

と、まわりの海を指しながら戸塚が言った。

そう言われて、見ると、海の水が黒ずんで見える。透きとおるような海の青さとは明らかに違っていた。

一面に広がる黒潮が小さな波頭を無数に立て、太陽が照りかえして、キラキラと輝いている。

帆をハタハタと打って通り過ぎる風と、波を切るヨットの音が心地よい鼓動を伝える以外、あたりは全くの静寂である。

「神島だ！」

と、だれかが声を上げた。

三島由紀夫に『潮騒』を書かせた小さな島が、心なしか幻想的な趣をたたえて、はるかかなたに浮かんでいる。

神島まで出れば、そこはもう太平洋である。

「あと、ひと頑張りだ！」

戸塚の元気な声が潮風にこだました。

若者は海図を広げ、航路を確認しながら、舵(かじ)をとり、ロープを引いたり、ゆるめたりしながら、帆を風の向き、強さに合わせて操作を続けている。

風は生きものであるということが、ヨットに乗っていると、よくわかる。海のように広々と平らなところでも、風は時間と場所によって刻々と微妙に変化し、まるで機敏な動物のようだ。

ヨットの操縦者は、その微妙な変化を的確にとらえて対応していかななくてはならない。

ヨットの操作に余念のない若者——大阪市立大生の顔は黒く潮光りして引き締まり、生き生きと輝いていた。

長たれ下がった髪、青白いぶよぶよの頬、死んだように薄気味悪い目……両親や妹の首を絞めてヨットスクールへ連れてこられた時、キツネを言葉巧みに誘い込んで逃亡を図ったころの面影は、どこにも残っていない。

彼は、同じ時期にヨットスクールで治療を受けている生徒たちの中で、回復が最も顕著である。

この若者が、脱走を図った直後に受けた集中的なしごきど訓練の厳しさは、並のものではなかった。

多くの人びとはこういう場合、ともすれば彼一人がいじめられていると見がちだが、ヨットスクールにおいてはいささか意味が異なっている。

見込みのない者は、最初からしごかないのである。

戸塚たちにとって見込みのない者とは、全くの知恵遅れと、精神病者。正常な知能があれば、心のゆがみは治る。知能は高ければ高いほど、治りがいい。

コーチが、がっかりして語っていたことがあったほどだ。

厳しいしごきにのたうちまわっていたこの若者は、ある一線を越えた時から、見る見る成長し始めた。

「あっ、今だ！」

と感じる一瞬が必ずあるものだ、と戸塚はいう。

情緒障害の状態をマイナス、健全な状態をプラスで表せば、戸塚が「あっ、今だ！」という瞬間はさしずめ「0」ということになるのか。とりあえず、この「0」にまで持ち上げるのが至難なのだが、頭の良い子はゼロを超えた時点から他をぐんぐん引き離す。

「頭のいいやつは、しごきがいがあります」

戸塚は忙しげに立ち働く若者を眺めながら、いった。

この青年の過干渉の母親が面会に来て、「あんた、これからどうするつもり……」等々、いまいっても仕方のないことを口にした時、彼は「母さん、家へ帰れるかどうかの方が先決だよ」と、軽く受け流したという。

「大丈夫。彼はもう、親を超えました」

コーチからその話を聞いて、戸塚は満足そうだった。

若者、つまり、大阪市立大生に次いで回復が顕著なのは、自転車でヨットスクールへやってきた中学3年の少年である。

この少年もまた「0」に到達するまでが大変だった。

実に簡単に失敗してしまったが、彼も1度、脱走を図ろうとした。そして、それ以後も「0」に達するまで、心は常に逃げていた。

情緒障害のドロ沼からはい上がろうと、自ら苦しみを求めてやってきた。

それは実に健気な姿だった。

しかし、実際にヨットスクールの生活を始めてみると、それは精神力の弱い彼の耐えられるていどの苦しみではないことがわかったのである。

なまじ頭がいいから、要領よく、ずるけようとするところをコーチに発見され、したたかにしごかれたことが一再ならずある。

「もっと、ましなやつだと思ったのだが……」

その彼が、ある時点を境に、めきめきと伸びはじめた。

体操に、懸命に耐えようとする、大きい声を出そうと努力する、ヨットの操縦をよく工夫するようになった……。

「やる気が出てきたようですね。おそらく、これでうまくいくと思うんですが……」

コーチたちは気をもみながら、少年の変化を注意深く見守っていた。

そして「0」を超え、いったん伸びはじめると、いままで眠っていた"自ら苦しみを求めにきた"という行為が大きなプラス要因となって働き、回復を加速度的に早める。

「治らなくては」

と思っている子は「0」を超えると、回復が早いのである。

そして、この少年も頭がよかったから、それも回復を早めるのに役立った。

この「0」の時点は子供によってそれぞれ異なるが、たとえば朝の体操の時、前日まではコーチの目がないとなんとかして怠けよう、逃がれようとしていた子供が、歯を食いしばりながら厳しいしごきに耐えようという態度を見せるようになる、その一瞬のようなものである。

生徒の中で、年長の大阪市立大生が1番、自転車の少年が2番。

いまや、校長、コーチから信頼され、コーチの補佐的役割を申しつけられている。

こういう子供が何人か育つと、校長やコーチたちの苦勞もずいぶん違ってくる。

ヨットの組み立て、日常生活でのまとめ役、新入生の引率と見張りなどをまかせることができるからである。まかされた生徒の方もそれがはげみになって、自信をつけ、さらに自立心が強まっていく……という相乗効果を期待できるのだ。

<X-1>と命名されたヨットにリーダーとして乗り込んだ自転車の少年は、コーチ小杉信雄の指示を仰ぎながら、一所懸命、操縦している。

「もう一押し、元気が出てくればさらによくなるんだが……」

と戸塚はいった。

土井一輝がコーチに昇格した。

戸塚ヨットスクールの生徒の中でコーチに昇格した最初は東山洋一である。

東山については後にも触れるが、神戸ポートピアを記念して催された太平洋単独横断レースに出場、最年少の18歳で初めて太平洋を1人で渡り、しかも、5位に入賞した。

東山は登校拒否の情緒障害児だったが、いまや並の大人では足元にも及ばない立派な青年に成長している。

東山はコーチ格ではあるが、ヨットスクールから改めて大阪の高校に入りなおし、通学しているため、常時、河和の合宿所にいることはできない。

その意味からすれば土井は、生徒から昇格し、常勤コーチとなった第1号といえる。

彼は大変、きちょうめん、勘がよく、機転がきき、礼儀正しく、思いやりがある。「なんであの子がヨットスクールに来たの？」

と、まわりの人びとがいぶかるほど、申し分のない青年である。

ただ耳が聞こえないハンディキャップを背負っている。従って、言葉も充分ではない。

ところが、戸塚が何かをやらせようとして、二言、三言、口を動かして見せると、たちどころにその意図をくみ、完璧に近い仕事をやってのける。その出来ばえたるや、正確そのもの。

耳の聞こえる人間でも及ばない。

おそらく、能力が人並み優れているのに耳が聞こえず、言葉で伝えることもできないいらだちが、そうさせたのだらうとまわりの者は想像しているのだが、そんな立派な青年が、ヨットスクールへ連れ

てこられた時には、頭髪を黒赤青の三色に染め、耳にイヤリングを下げてオートバイを乗り回していた暴走族の親玉だった。

短く整えた髪、日焼けした顔に真っ白のそろった歯を見せて笑う時の人なつこくて、きれいな若者の顔からは、とうてい暴走族の親玉を想像することができない。

大学生や自転車の少年には"卒業試験"の意味を持ったクルージングは、土井にはコーチ昇格の卒論の意味を持っていた。それに応えて、彼は見事な能力を、戸塚に披露した。

クルージングは、回復した子供と、重症の情緒障害児との能力の差を歴然と見せつける。

4隻のクルーザーの各リーダーに選ばれた生徒たち、なかでも校長艇に乗り組んで戸塚の補佐をつとめた土井の働きはめざましいものがあった。

高さ5メートル、8メートルのマストにスルスルと身軽に登って行き、大きく波に揺れながら走っているヨットの上で帆をほどこいたり、ロープをゆわいつけたり。それを休みなく何度も繰り返す。

校長の乗ったカッターは大きいだけに帆の枚数も多く、ロープの数も何十本とあり、操作が複雑である。

土井は、何枚もある帆を、風の強さを計りながら適宜広げ、方向を合わせる。そのたびに何十本もあるロープを全部はずして長さを調整し、また素早く、ゆわいつける。

休むいとまのない労働である。

風の向きが微妙に変化した。

「さて、土井君はどうやるかな」

戸塚はひとりごとをいいながら、わざと知らん顔をしていた。

すると、土井はすかさず帆の調整に走る。

「フム、フム、おれが考えていたのと同じことをやっておる」

戸塚は満足そうであった。

耳の聞こえない彼には、校長が何をいっているか、もちろん聞こえていないので、帆の調整は彼独自の判断である。

「それにしても、この諸君はどうしてこうも役に立たんのかね！」

戸塚は眉をつり上げ、声を荒らげて怒った。

分乗している他の子供たちは見事に、何もしない。戸塚に叱られた時だけは申し訳でいどに動くが、ちょっと目を離すと、自分とは関係ないといわんばかりに、うずくまっている。

土井が1人でマストに登り、ロープをはずし……と走り回っているのを見ても、知らんぷり。申し訳ないとか、何かやらねばといった感情が全く起こらないらしいのである。

目が輝き、自ら行動を起こすのは食事の時だけ。それも自分で何かを作ろうとするのではない。出来上がったものに飛びつくのが素早いのだ。

痛ましいのは、彼らが決して貧しい家庭の子供ではないということだ。冷暖房と鍵のついた個室、ステレオ、テレビ、不自由のない小遣い、学習塾、家庭教師、社会的地位のある父親、PTAに熱心で、一流校について詳しい母親……。

およそ「物」と名のつくものでないものはなにもない。

すべてがそろっていながら、何か重要なことがポカッと欠けている。物質の豊かさが必ずしも心を豊かにしているわけではない——よくいわれる言葉を、この時ほど実感したことはない。

死亡事故起きる……（前）

桐山利次の家は堺市にある。

大阪の難波から南海電車に乗って約30分。

仁徳天皇陵のある三国ヶ丘駅から中百舌鳥、白鷺駅あたりにかけて、大阪や堺の工場地帯のベッドタウンとして開発されたマンモス団地が建ち並んで、よく見かける新興住宅街の観を呈している。

利次の家はそうしたマンモス団地の一角、白鷺駅を降りて数分のところにあった。

戸塚ヨットスクール

母親の雪子によると、昭和40年生まれの利次は、小学校低学年のころまでは、ごくふつうの子供だった。

けっこう腕白で、外へもよく遊びに出かけたし、友達も少なくはなかったという。

その子供が登校拒否の症状をはっきり示すようになったのは、小学校5年ごろからで、6年生の3学期は半分、中学1年生になると半分以上、学校を休むようになった。

そしてやがて、いらいだちが見えはじめ、部屋に閉じこもり、深夜までテレビを見、物を窓から投げるといった家庭内暴力に至る前期症状を呈してきた。

原因が不明であることが特徴とされる多くの情緒障害と違って、この子の場合には主な原因が割合、はっきりしているように、親や先生たちには思われた。

気の毒な話をしなければならないことになるが、2つ違いの利次の兄は知恵遅れで、自閉症である。1人ではほとんど何もできない重症で、そのために母親が兄の身の回りの世話から、そうした子供の学校への送り迎えに至るまで、かかりつきりになっているほどである。

さらに、利次自身、学校の先生たちの話によると、特殊学級に入れるかどうかもすれすれの線上の知能でいどであったようだ。

利次は学校へ行きたくない理由を最初は母親に、

「給食当番がいやだから」

と説明していたが、やがて、

「本当は、兄のことを友達にからかわれるからだ」

と告白した。

給食当番を理由にしたのは、幼い子供の、兄へのせめてもの思いやりであったのかもしれない。

親にとっては、兄の状態が状態だけに、弟に、残された望みを託していたのだが、その弟まで登校拒否になってしまい、二重のショックを受けることになった。

悲惨である。

両親は市の相談所を訪ねた。

「あせってはいけません。学校、学校といわないように……」

とカウンセラーはやさしくアドバイスしてくれたが、どうすれば登校拒否が治るかについて、具体的な方法と方策を教えて欲しいと思っ
て訪ねた親にとって、満足のいく回答にはなっていない。

両親はあせった――。

父親の桐山靖夫は利次を四国のある禅寺へ連れて行き、父
子ともに修行を試みた。

しかし、父親は石段を踏みはずし、足を骨折して入院。息子の
登校拒否は治らなかった。

利次の登校拒否が顕著になった小学校6年の時である。

利次が中学へ入った直後、運送会社に勤める父親は会社の
同僚から戸塚ヨットスクールのお話を聞き込んできた。

「短期間で効果を上げている、いい所があるらしいよ」

靖夫は妻の雪子にそう話した。

しかしそのころ、利次は中学へ入ったばかりのせい、また学校
へ行きはじめていた。

多くの親たちがそうであるように「苦しい時の神だのみ、喉元過
ぎれば熱さを忘れる」である。

戸塚ヨットスクールのことはしばし、緊急の問題ではなくなってい
た。

そして、利次はその年の暮れまで、つまり1学期、2学期の間
の大部分、休みながらもなんとか登校するという生活を繰り返して
いたために、親たちもこれという特別の方策をとらないまま、状
態を見守っていた。

ところが、正月を過ぎて3学期に入ると、利次は再び学校へ行
かなくなってしまった。

両親は戸塚ヨットスクールのことを思い起こし、連絡をとって入
校させることになった。

54年2月のことである。

冬の寒い盛り。

海で子供を鍛えるには、最も効果の高いシーズンだった。

そのころ、戸塚ヨットスクールは今日と違ったシステムをとっていた。

今日では、長期の訓練を必要とする非行等の子供たちをも対
象に含めているために、期間を一定させていないが、当時は登校
拒否の子供たちをともかく学校へ行くようにすることだけに目的を
しぼっており、訓練は一応5泊6日で足りると戸塚は判断してい
た。

だから、桐山利次が戸塚ヨットスクールへ入校した当時の訓練
期間は5泊6日。それで多くの子供たちは学校へ行くようになっ
ており、戸塚ヨットスクールは桐山の父親が会社で聞き込んでき
たように、短期間で効果を上げる治療機関として注目を浴び、
戸塚たちも得意の時期にあったのである。

54年2月11日午後6時、堺の家を出た桐山の一家は両親、
自閉症の兄、弟の利次の4人で名古屋駅の指定された集合
場所に到着して、他の生徒たちと合流した。家族に連れられてき
た生徒の数は11名であった。

利次も、連れてきた家族も、これが最後の別れになるとは知ら
ず、名古屋駅頭で別れた。

電話のベルが鳴っている。

堺市のマンモス団地にある桐山利次の家。

54年2月24日、土曜日、午後3時ごろのことである。

片付けをしていた母親の雪子が受話器をとった。

「モシモシ、戸塚ヨットスクールですが、」

コーチャらしい男の声が心なしか沈んでいた。

雪子は胸騒ぎをおぼえた。

「子供さんが重体なので、すぐ来ていただけませんか……」

「重体って、あの、どうして……」

雪子はそのあと、何をいったのかよく覚えていない。

利次がヨットスクールに入校してから2週間たった。

最初の予定は5泊6日ということだった。2月16日には帰宅のはずである。

ところが、1日前の15日、ヨットスクールから電話があって、「利次の回復が思わしくないので、他の何人かの生徒とともに訓練期間を延長することになった。19日には帰れると思うので、午後6時に、集合場所だった名古屋駅まで迎えにくるように」とのことであった。

それから2日後の17日、またヨットスクールから電話がかり、利次の回復状態が依然として思わしくないので、訓練期間をさらに延長せざるを得ないという連絡が入った。

帰宅の日がいつになるかも、見当がつけられないということであった。

両親としては、5泊6日の短い期間で治る所と聞いて子供を預けていたので、訓練期間がずるずる延長され、子供の帰宅が遅れていることに不安を感じていた。

しかし、まだ治っていないという報告である以上、辛抱をして待つより仕方がない。

こうして、両親が不安な気持ちで利次の帰宅の日を待ちわびているところへ「重体」の連絡が入ったのである。

雪子は、信じられないような気持ちだった。

夫の靖夫はまだ勤めの時間である。

雪子は会社へ電話をかけ、夫に利次が重体だと連絡があったことを伝えて、すぐ現地へ行ってくれるように頼んだ。

雪子自身もすぐに飛んで行きたかった。

しかし、自閉症の長男の世話をしなくてはならず、手を放せない状態にあった。

靖夫は会社からいったん帰宅して、ヨットスクールまで出向くことになった。

家を出る前、念のため利次のその後の容体を聞いておこうと、靖夫はヨットスクールに電話を入れた。

「亡くなりました……」

受話器の向こうの声が響いてきた。

父親の桐山靖夫はすぐ親戚へ連絡をとり、身内の者3人で大阪を出発、愛知県へ向かった。

利次の遺体は半田警察署に置かれているとのことであった。

半田警察署に着くと、ヨットスクールからコーチが1人、来ていた。

「どうして、利次は死んだのですか」

桐山の一族はコーチに尋ねた。

コーチは、目下、警察で取り調べが行われており、自分では事情がよくわからない、と答えた。

父親たちはコーチの口ぶりから水死でないらしいことは想像できたが、詳しい説明がヨットスクール側の関係者から行われぬまま、悲しみと、いらだちのなかで時間を過ごしていた。

校長の戸塚宏の姿がない。

所在を尋ねると、目下、九州を旅行中であり、急ぎ、こちらに向かっているところだとの説明だった。

父親たち3人は利次の遺体と対面した。

利次の遺体の顔は、目と口のまわりが殴られた跡のように黒くはれ上がり、目の下に傷跡、口のまわりには血がついているように、遺族には思われた。

父親たち3人は、ヨットスクールの用意した半田市内の宿で一晩を明かした。

九州に出張していたという校長の戸塚が、女性コーチを伴って現れたのは翌日の夕方7時ごろであった。

九州に行っていたうえ、新聞記者に追いかけられたこともあり、時間がかかって遅くなった。

「利次の死は、訓練中の事故死ではなく、病死である。責任問題についてはよくわからないが、出来るだけのことはさせてもらう」といった意味のことを戸塚は遺族に話した。

父親たちが戸塚に怒りをおぼえたのは、彼がそれを立ったままで話したことである。

たとえ天災地変で死亡したとしても、預かっている間の出来事に対しては責任者として、両手をついて、心から申しわけなかった、と詫びてもらいたかった——と遺族は語る。

遅れてきたうえに、冷静な態度だったということが、悲しみに沈んでいる遺族の神経をさかなでした。

半田市内の海蔵寺で仮通夜が行われた夜、父親の桐山靖夫は供えられている酒をがぶ飲みして、荒れた。

堺市の自宅で行われた葬儀には、ヨットスクールから女性コーチが1人だけ参列、香典10万円が戸塚から送られてきた。

「あの時、戸塚さんの態度が違っていたら、少なくとも損害賠償請求の民事訴訟を起こす気にはならなかったでしょう」

と、遺族たちは語っている。

「モシモシ、桐山さんのお宅でしょうか。このたびのお子さんのご不幸、なんとお慰め申してよろしいやら……」

根津正穂と名乗る人物から桐山の家へ、くやみの電話がかかってきたのは、利次が亡くなってから間もなくのことである。

「実は、私の息子も、お宅の子供さんと同じ時期に戸塚ヨットスクールへ行っておりました」

根津は大阪市西区で小さな鉄工所を営んでいる。

彼の長男公男は中学1年の半ばごろ、

「友達にいじめられる」

と言って学校を休んだのをきっかけに、登校拒否を起こしていた。

市の教育相談所や大学の神経科へ通ったが、登校拒否は治らなかった。

そのころ、妻の姉がたまたまテレビで戸塚ヨットスクールの番組を見た。効果があるらしい、と姉から妻に連絡があり、2人でパンフレットを取り寄せて検討したうえで、長男を入校させた。

夫はあまり賛成ではなかったのだが、妻たちの意見に従った。

ところが、約1週間の訓練を終えて帰宅した長男は顔がはれあがり、体中アザだらけ。あちこちに傷を負って、骨の痛みを訴え、恐怖に震えていた。

しかも、登校拒否は治っていない。

「ひどい所だ！」

と、根津正穂は怒り、

「だから、言わんこっちゃない」

と、妻にも苦情を言っていた。

そこへ、桐山利次死亡のニュースが伝えられた。

「お父ちゃん、1人だけ残されて、ごつういじめられとった子がおったけど、きっとこの子に間違いない」

長男の公男は、新聞に載った利次の写真を見ながら父親に言った。

根津は息子の話を聞いてすぐ桐山の家へ電話をかけ、息子のいったとおり、それが利次であることを確認した。

「遺体のひどい傷を見て、子供は殴り殺されたんじゃないやろかと思っとるところでした」

と、利次の親は言った。

「子供さんをそんなひどい目に遭わされて黙っていることはない。ウチの息子が証人になります」

根津は協力を約した。

桐山と根津の家族が集まった。根津の長男公男が合宿訓練中にヨットスクールで体験した事、見聞した事を語り、それをもとに両家族は対策を協議し、それぞれ知り合いの弁護士と相談した。

そして、桐山が刑事、民事の双方、根津が刑事事件で、それぞれ戸塚宏とコーチたちに対して訴えを起こした。

前川哲治は死亡した桐山利次の叔父である。

京都大学卒業、同大学院で心理学を専攻後、法務省に入り、刑務所、少年鑑別所で受刑者や非行少年たちの矯正に当たる仕事に長年にわたってたずさわり、その後は関西大学に移って、学生相談室でカウンセリングの仕事をしてきた。

前川は、そうした体験を通じて、犯罪や非行は"心の病"という側面を持っていると考えるようになった。

凶悪な犯罪者だった男が、前川の懇々と説く話に耳を傾けていて、ある瞬間から、悟りを開いたかのように、立派な人間として生まれ変わっていく。

「なんで、こんなことがわからなかったのか」「なんてパカなことをしていたのか」「なんと無駄な人生を生きてきたのか」

生まれ変わった犯罪者たちは異口同音のように、そういう。

そんな時、前川は、

「あっ、この人は今やっと、本当の自分と出会ったのだ」

と思う。

情緒障害児の矯正に当たっている戸塚宏が、

「あっ、今だ！」

と感じる瞬間があると、悟ったのと同じことなのかもしれない。

「本当の自分と出会う」

抽象的であり、宗教的ひびきを持った言葉である。どういう状態を指すのか、具体的に説明せよといわれても困難である。

「あっ、今だ」と感じる瞬間の状態についてもまた、同じであろう。

前川が心理学を選んだのは、心の問題に非常な関心を抱いていたからである。自分が弱い人間だ、と思っていたからかもしれない。幸せって何だろう。心の平和、「思う」ということ、「心」とは何なのか……そんなことばかり考えていた。

禅の修行にも通い、次から次へと宗教の門をたたいた。

そんな時、前川は木村裕昭という医師に出会った。

前川は長い間、胃潰瘍に悩まされ、さまざま療法を試みてきたが、自分の病気に対する治療は薬や注射のような西洋医学的アプローチではないのではないか、と思い始めていたところである。

京都に生まれた木村裕昭の家系は代々、医者で、彼はその4代目。父は京都大学名誉教授、学士院会員という名門の出である。

そのままゆけば、彼もまた名誉と権威に恵まれた医師の階段を上るところだったのだろうが、京都大学医学部の時、学生運動で勇名をとどろかせ、放校になってしまった。

だが、そのことが木村に新しい目を見開かせるきっかけを与えた。

京都大学医学部を学生運動で放校になった木村裕昭は山口医大に入りなおし、卒業後、京都に帰って京都府立医大に勤め、さらに大阪千北病院長になった。

医学生時代、および医者としての長い治療経験をとおして、木村は、病気の中には薬と注射の西洋医学的アプローチでは治し得ない、心因性の病気がかかなりあるのではないかと疑問を抱き続け、かつ、そうであることを発見した。

そして、約8年前に一般の病院を辞め、心の治療をもっと重視し、心身一如の治療を目的とした独白の治療機関を設立し、現在では京都府郊外で治療に当たっている。

前川哲治は、この木村医師の考え方に深く共鳴し、その門下生にもらった。

以来、前川は木村のもとで手伝いながら、木村独特の哲学とその治療方法を学んでいる。

甥の桐山利次が登校拒否症にかかっていると知った時、前川は、両親から相談があれば、利次を自分の尊敬する木村医師の所で治療を受けさせてやりたいと考えていた。

だが、両親から「頼む」という話はなかなかこなかった。

自分の子供が登校拒否や家庭内暴力であることを明かしたり、いろいろ相談することは、たとえ相手が親や兄弟であっても、はばかられるという人たちが多い。

何か事が起こると、親兄弟がいながら、なぜ、あるいは、親兄弟でありながら知らなかったとは——と他人は批判しがちなのだが、戸塚ヨットスクールや『角屋』旅館の前まで来ながら、相談しようか、しまいか迷って、前を行ったり来たりしている親たちが何組もあるほど、他人には打ち明けづらいことなのである。

利次の両親の気持ちを押し量って、前川はあえて発言するのを控えていた。

だが、利次は前川の知らない間に、戸塚ヨットスクールへ送り込まれていた。

「短期間で効果の上がる、いい所があるというので、そこへ入れることにした」

と、両親はいった。

短期間で効果が上がる、というところに両親は惹かれたのだろう。前川にも、彼らのあせる気持ちは痛いほどよくわかった。

長男は重症の自閉症児、知恵遅れである。将来の望みは、どうしても利次に託されていた。

その利次が高校にも入らないうちに、登校拒否になってしまった。中学にもまともに行っていない子供が、この激しい学歴社会の中で、将来、どうやって生活していけるというのか。

だが、と前川は深い自責の念にかられている。利次は木村医師に預けると、自分はなぜ、一歩、踏み出さなかったのか——。

利次は、死んでしまったのである。

前川哲治が自分なりのやり方で情緒障害児を治してみたい、と考えたのは桐山利次の遺体を見、戸塚宏と言葉を交わした直後のことだった。

アザと傷のついた利次の遺体と対面した時、いいようのない怒りにとらわれると同時に、患者たちの心を忍耐強く解きほぐしながら、いやしていく木村医師の姿を思い起こしていた。

殴ったり、蹴ったり、恐怖を与えなくとも、環境を変えることによって、情緒障害は治るはずだ、と前川は思った。

前川がその気持ちをさらに強くしたのは、戸塚と言葉を交わした時である。

「戸塚は1つの生命の死を前にして平然としているかのようであった。多くの子供たちを助ける過程で生命力のない者が1人や2人死ぬことはやむを得ないと、この人は考えているのかもしれない」——身内を失った怒りのせいかもしれないが、前川にはそう思えるような戸塚の態度だった。

「ぜひ、私たちをお願いします」

といったのは、桐山利次と同じ時期に戸塚ヨットスクールへ入っていた根津公男の父親、正穂である。

彼もまた、息子がアザと傷を受け、恐怖にびくつきながら、それでいて登校拒否が治らなかったことに対して、戸塚に怒っていたのである。

息子と同じ時期にヨットスクールへ行ってははずの利次の死を知って桐山の家へ電話をして以来、根津は前川と情緒障害児の治療について、何度も話し合っていたのである。

子供を鍛える戸塚に対して、前川は親が変われば子供の登校拒否は治る、という考え方。つまり、一般のカウンセリングと同じ考え方に立っている。

前川は木村医師のアドバイスを受けながら、根津夫婦に対して、夫には放任主義を、妻には過干渉を改め、家族で団欒の時を持つようにねばり強くカウンセリングを続け、根津夫妻も、桐山利次の事故から受けたショックや、そこへ自分たちが子供を送り込んでいたという反省もあって、前川のアドバイスに対して虚心に耳を傾け、忍耐強くカウンセリングを受けて、自己変革に努めた。

息子の登校拒否の状態は、中学2年、3年の間はほとんど変化を見せなかった。

しかし、高校進学が迫っても根津夫妻が前川のアドバイスを受けて、他の親のようにうるさく口をさしはさむことを控え、心配しな

がらも黙って耐えていた。すると息子は、先生と相談して自分で高校を選び、受験した。そして、高校に入ってから、ふつうに学校へ行くようになった。

子供がふつうに学校へ通うようになったという根津夫妻の話を、前川哲治は胸を締めつけられるような、うれしい思いで聞いていた。

「おかげで、私も子供とよく話をするようになりましたし、家の中が明るくなりました」

と、根津はいった。

前川は、太陽が冷たい風に勝って、マントを脱がせることができたとあこの童話を思い起こし、亡くなった甥桐山利次へのせめてものはなむけにすることができれば、と思った。

これをきっかけに、前川哲治は"心の病"に悩んでいる人々の相談に乗る仕事を、自分なりに始めてみようと思った。

木村裕昭医師に相談すると、

「やってみてはどうか」

という勧めであった。

調べてみると、京都、大阪の近辺では、マンモス団地をかかえた新興住宅地のある豊中市の人々が教育熱心であり、同時に受験戦争のひずみによる情緒障害児たちが、増えている地域であることがわかった。

前川は自分も住まいを豊中に移し、

「心の健康相談 CCC 創造的カウンセリングセンター」

の看板を掲げた。

彼はいま、木村医師のもとで手伝いと勉強を続けながら、自分でもカウンセリングをしている。

経済至上主義、物質偏重、金力崇拜、学歴、偏差値信仰……豊かな社会が病み、その病んだ社会と家庭から登校拒否、家庭内暴力、非行等が生まれて社会は危険な方向に向かいつつある。

前川は"心の病"を持つ人々のカウンセリングを通じて、社会と時代に対する危機感をますます強く抱くようになった。

皮肉なことに、その危機感は、戸塚宏が情緒障害児たちの矯正、治療を通して抱くに至った危機感と全く同質のものである。

「なんとかしなくてははいけない」

と、前川も戸塚と同じようなことをいった。

にもかかわらず「なんとかする」ための方法論において、戸塚と前川は真っ向から対立している。

環境を変えれば子供は治るという前川。環境は変わらないから子供を変えるのだという戸塚。

体罰を否定する前川と、しごきが子供を鍛えるのだという戸塚。

桐山利次という少年の死をはさんで、2人の男がそれぞれ全く対照的なやり方で、情緒障害児を治そうと試みているのだが、前川が、戸塚ヨットスクールへ来ているような重症の情緒障害児に直面した時、はたしてどのようにして治すことができるのか、前川を含め「やさしさ」で治そうとする人々に課せられた大きな課題であろう。

* *

高松雄吉が死亡したという連絡が枚方市に住む両親のもとへ戸塚ヨットスクールから入ったのは、日付けが55年11月3日から4日に変わったばかりの真夜中であった。

桐山利次が死亡した翌年のこと。利次に次いで、戸塚ヨットスクールでは2度目の死亡事故である。

桐山利次が中学1年生だったのに対して、高松雄吉はこの時、21歳。

中学時代に始まった登校拒否が高じて、高校卒業後、大学入試に3度失敗、浪人中ということであった。

雄吉の父、高松弘はすぐ、妻の実弟で、東大阪市に住む中井昌弘に息子の死を電話で知らせた。

「そら、えらいこっちゃ、すぐ行くからね」

寝入りばなに電話を受けた中井はびっくりして答えたのだが、その時点で中井は雄吉がてっきり、交通事故かなにかで死亡したものとばかり思っていた。

中井が戸塚ヨットスクールという名前を知り、雄吉がそこへ行っているうちに死亡したのだということを知ったのは、朝一番の新幹線で、京都から名古屋に向かう途中、雄吉の父、高松弘に事情を打ち明けられてからのことだった。

中井はそれまで、実の姉の子供が登校拒否になっていたことも、登校拒否を治すために戸塚ヨットスクールへ入っていたことも全く知らされていなかった。

子供が登校拒否や家庭内暴力であることを、親は兄弟や親類にさえ隠すケースが多いのだが、高松雄吉の親の場合も、弟の中井に何もいっていなかったのである。

中井は伝法な感じの、あけっぴろげな男である。

幼いころの雄吉は、

「おじちゃん、おじちゃん」

と、よくなつてきていたので、そういう事情を知っていれば、せめて話相手になって、重苦しい気持ちを、ほぐしてやるくらいのことではなかったのではないかと、今にして思えば心残りである。しかし、そのころは、大きくなって姿を見せなくなった雄吉のことを、どこかへ就職して忙しいのだからくらいにしか、思っていなかったのだという。

ともかく、雄吉が登校拒否だったこと、それを治すために戸塚ヨットスクールという所へ行っていたということは父親から聞かされたのだが、雄吉の登校拒否の中身がどんなものなのか、戸塚ヨットスクールがどんなことをしている所なのか、中井はほとんど知識のないまま雄吉の父に同道して現地に到着した。

そして、雄吉の遺体と対面して、中井はいいようのない感情にとらわれてしまった。

雄吉の遺体は、半田警察署に棺に入れて置かれていた。

父親の高松弘と叔父の中井昌弘は署員の案内で雄吉の遺体と対面した。

中井によると、両目のまわり、口のまわり、胸、腹などが紫色にはれあがり、所々、傷がついて血のにじんだ跡があった。

家を出る時、長髪だった頭は丸坊主にされていた。

「これはひどい仕打ちを受けたに相違ない」

「死因は殴られたことにあるのではなかろうか」

と、彼らも感じた。

桐山利次の家族が、遺体と対面した時に抱いた印象と同じである。

雄吉の変わり果てた姿に、中井は怒りを覚え、父親はよろよろと倒れそうになって、中井に支えられた。

半田警察署は父親に司法解剖の許可を求め、父親はそれを認めた。

司法解剖が終わるとすぐ、父親たちは遺体とともに枚方の家へ向かった。

遺族は警察に死因を尋ねたが、その時点では解剖の結果がまだ出ていないので、ということだった。

中井昌弘によると、彼らは戸塚に対して、雄吉がどのようにして死に至ったのかと尋ねたが、戸塚は警察の取り調べが始まっているので自分たちの口からはいうことができない、警察の方で聞いていただきたい、という答えだった。

「挨拶、謝罪、いっさいなしだった」

と、中井は怒っている。

それから間もなく、雄吉の父、高松弘が病に倒れた。

近くの医者に診てもらおうと、心労が重なったためでしょうということだったが、念のため大きな病院へ連れて行くと、入院が必要ということであった。

やがて"盲腸の手術"が行われ、それからややあって妻のちよ子と中井が呼ばれ「肋膜の中にガンが出来ている」と告げられた。

56年2月、雄吉が死亡してから3カ月目に、父親の高松弘も後を追うように他界した。

妻のちよ子は、息子と夫を相次いで失い、
「戸塚ヨットスクールのことは名前を聞くのもいやだ」
と、頑として口を開かない。

中井は、
「あんな所の存在を許しておいていいのか。戸塚は殺したいくらい
憎い！」
と、いまでも怒りにふるえている。

高松の遺族も戸塚たちを相手どって刑事、民事双方の訴えを
起こしている。その後、桐山利次の父親も重なる心労から神
経科で治療を受けていることが明らかになった。

* *

現在、3組の家族が、戸塚ヨットスクールを相手どって訴えを起
こしている。

いずれも結論がまだ出ておらず、係争中なので、家族側の訴え、
ヨットスクール側の反論を併記し、補足説明の必要なものに関し
ては、若干の説明を加える。

最初に死亡した桐山利次の父親桐山靖夫と母親雪子は、戸
塚宏とコーチたちを「業務上過失致死または重過失致死」罪で
罰することを求めて、名古屋地検と半田警察署に54年3月23
日、刑事告訴を起こした。

桐山靖夫、雪子の両親はこれと併行して戸塚宏に対し、合計
2,602万円にのぼる損害賠償を支払うよう求めた民事訴訟を、
54年4月27日付で大阪地裁へ起こしている。

桐山の訴えに関する現在までの経過は次のとおりである。

刑事告訴について。

半田警察署による取り調べ、捜査は終了し、同署から名古屋
地検へ書類送検された。

名古屋地検ではこの書類をもとに検事による関係者の取調べ、
捜査を行ったが、事故から2年9カ月を経た56年11月30日
現在、同地検からは起訴、不起訴いずれの結論も出されていな
い。

民事訴訟について。

利次の死因は司法解剖の結果「十二指腸潰瘍穿孔(せんこう)
による化膿性腹膜炎」だといわれてはいるが、公式な死亡所見
(鑑定書)は、刑事事件に関する証拠書類として裁判所に提出
されるまで公にされない。

死因を公式に認定することができなければ、死亡に関する責任
の所在を明らかにすることができず、したがって、損害賠償支払い
義務の有無についても判断を下すことができない。

刑事事件の進行がストップしていることによって、民事訴訟も審
理が止まっているというのが現状である。

死亡事故から2年9カ月を経過して、名古屋地検が依然とし
て、起訴、不起訴の判断を下していないところに、この問題の持
つむずかしさと、社会問題としての重要性があるように思われる。

死亡事故起きる……（後）

弁護士辺見陽一を代理として提出された刑事、民事双方の
訴状から、桐山靖夫、雪子の主張を紹介すると次のとおりである。

桐山利次は54年2月11日夕方から、他の生徒10人と共
に合計11人で5泊6日、つまり2月16日に訓練を終了する
予定で愛知県美浜町河和の合宿所に入った。

同時に合宿所へ入った11人の生徒のうち6人は予定どおり
2月16日に訓練を終了、残る生徒も18日に1人、19日に
3人と19日までに10人が訓練を終了して帰宅。桐山利次1
人が、残されることになってしまった。

利次と同じ時期に訓練を受けていた根津公男の証言によると、利次は2月15日夕方から腹痛を訴え、食事をとらず、風呂にも入らない状態で、医者診察を受けたいと訴えていたにもかかわらず、無視、放置された。

続いて16、17の両日も同じように腹痛を訴えたのに対し、訓練は休ませたものの、医師診察を受けさせることなく放置した。

18、19の両日にはやはり腹痛を訴えているにもかかわらず、詐病だとして殴る、蹴るの暴行を加えたうえ、海上においてヨットの訓練を強行した。

2月、冬の寒い盛りである。

19日夕方から、1人残された利次は名古屋市内にある戸塚宏の自宅兼ヨットスクールの事務所に移され、23日まで宿泊させられた。

この間、利次は腹痛を訴え、高熱を発し、ほとんど食事をとらず、医師診察を求めているのにこれを無視、放置した。

23日には利次を再び美浜町河和の合宿所へ連れ戻し、同じ状態にあるにもかかわらず、1日中、合宿所内に放置した。

そして、死亡の日の24日には同じように病気の状態にある利次を寒い戸外に連れ出して約2時間、正座させた。

こうして、1度も医師診察を受けさせることなく、同日午後2時30分ごろ、死に至らしめた。

利次は12日から15日までの間、コーチから時々、

「お前は太っているから、めしを食うな」

といわれ、昼2回、夜2回、食事をさせてもらえなかったと根津公男は証言している。

そして、2月15日夕方から24日まで10日間も、食欲なく、嘔吐、腹痛、発熱等の症状があり、医師診察を受けさせられるよう訴えたにもかかわらず、無視し続けた。

利次の死因については、いまだ確定した鑑定意見は提出されていないが、十二指腸潰瘍の穿孔(せんこう)による化膿性腹膜炎と伝えられている。

被告が、保護者から預かった児童の生命と健康管理に十分、意を尽くし、早い時期に医師診察を受けさせていたら、利次が一命をとりとめることができたことは、ほぼ確実である。

生徒が腹痛などを訴えた場合、それが訓練に耐えられるものか否かの判断を、しろうとではなく医師に仰ぐシステムを作らないかぎり、第二、第三の事故が発生すること必定である。

被告人戸塚宏は反省の色を見せていない。よって、訴える次第である。

桐山利次の死亡に関して、両親の桐山靖夫、雪子が起こした訴えに対する戸塚ヨットスクール側の反論は次のとおりである。

54年2月11日。

利次は愛知県美浜町の合宿所へ夕刻に到着した直後から、「帰らせてほしい。頭が痛い。手、足が痛い。腹が痛い」などと、明らかに虚偽とわかる訴えをした。

翌12日も同じ。

そして、食事は3食とも、他の参加者と同程度にとり、異常は認められなかった。

利次は16日「腹が痛い」と、夕食をとらなかった。

そのため、17日は訓練を休ませた。

洗腸を施し、用便を済ませた後、コーチが腹痛について質したところ利次は、

「すっきりしました。もう痛みありません」

と答えた。

苦痛の様子は全く認められず、コーチが横になって休んでいるよう指示しても、合宿所の内外をうろうろ歩きまわるほどであった。

食事、朝食はコーチの指示でとらせなかった。

しかし、昼食、夕食は通常どおり。

午後4時には、他の参加者が甘酒を飲んでいるのを見て、

「飲んでいいですか」

と尋ね、与えられると、これも飲むなど食欲はあった。

コーチは 16 日夜、17 日午前中の 2 回、利次の体温を計ったが、平熱であった。

表情にも異常は認められなかった。

18 日。

日曜日なので、情緒障害児でない一般の子供たちのための日曜ヨットスクールが開かれ、情緒障害児と合同で訓練が行われた。

利次は、他の情緒障害児たちとともに、この訓練に参加した。

食事でも平常どおり 3 食とり、異常は認められなかった。

19 日。

一緒に合宿に参加した 11 人の生徒のうち 10 人は、この日をもって訓練を終了した。

しかし、利次 1 人は、帰宅させてもまだ登校する見込みがないので残って、訓練を続けることになった。

戸塚の自宅に預かったのは、ヨット以前に、まず、日常生活の基礎から訓練する必要があると判断したからである。

期間の延長、自宅預かりとともに追加料金を取らないのだから、利次を回復させたいとの好意から出たものであることは明らかである。

食事は 19 日も平常どおりであった。

20 日。

利次は午前 7 時ごろ、戸塚宅を脱走、近くの千種警察署今池派出所へ赴き、

「家へ電話をしたいので、電話を貸してほしい」

と頼んだ。

当直の警察官が不審に思い、利次にかわって親もとへ電話をかけたところ、母親が応答に出、利次を戸塚の所へ戻らせてくれるよう依頼した。

母親はさらに戸塚の自宅へも電話をかけ、息子の脱走を詫びたうえで、

「よろしく、お願いします」

と頼んだ。

利次は 3 食とも平常にとったうえ、脱走前には菓子を、連れ戻されてからは夜中に冷蔵庫内の食物を、ともに無断で食べるほど、食欲があった。

派出所の警察官も利次の体調に異常を認めていない。

21 日。

利次は午前 7 時に、コーチの 1 人に連れられ、車で三重県鳥羽市に赴き、そこに係留してあった戸塚ヨットスクールのヨットの整備を手伝って、再び戸塚宅へ帰った。

食事はこの日も平常どおり 3 食をきちんと、とった。

昼にはパン、牛乳、マンジュウ。戸塚宅へ戻ってからの夕食には、うなぎどんぶり 1 杯を残らず平げるほどの食欲であった。

22 日。

利次は戸塚の自宅で 1 日じゅう、ブラブラして過ごしたが、食事は平常どおりであり、腹痛の訴えもなかった。

23 日。

利次は 2 人のコーチに連れられ、午前 10 時ごろ、戸塚宅を出発、正午前、車で愛知県美浜町の合宿所へ戻った。

しかし、この日は悪天候であったため、海上においてヨットの帆走訓練を行うことが困難であった。

利次はコーチとともに合宿所で腹筋運動をやったり、本を読んだり、ゴロ寝をしたりして時を過ごした。

利次の食欲は、この日も異常を示していない。

名古屋の戸塚宅から車で美浜町の合宿所に向かう途中、本人の希望によって食堂に立ち寄り、とんぶり物のご飯を 3 分の 2 とみそ汁 1 杯を食べた。夕食にはコーチが作ったカップめん、焼き

いものほか、フランスパンを食べ、トマトジュース、身体を暖めるために作ったバター入り砂糖湯などを飲んだ。

就寝は午後 8 時 30 分ごろ。

以上が、死亡前日までの利次に関する記録である。

24 日。

死亡事故の当日。

利次は午前 8 時 30 分ごろ起床。9 時ごろから、朝食としてフランスパン 3 切れとオレンジジュース半分ぐらいをとった。

コーチの 1 人が利次に、合宿所の周囲を掃除するよう指示した。利次は最初、その指示に従ったが、やがて地べたに、両手を前について座り込んでしまった。

しかし、利次は極度の肥満体のためか、合宿参加当初から同じようにへたり込むことが再三あり、コーチはそれを異常とは感じなかった。

利次は昼に砂糖湯、オレンジジュースを飲んだあと、「手足が痛いから、病院へ連れて行ってほしい」と頼んだ。

これは 19 日まで行われた訓練において、利次がコーチの指示に従わず行動した結果、岸壁等に付着した貝で手足に多数の傷を受け、その治療を求めたものであり、原告の主張するような「腹痛」ではない。

利次は合宿期間中、腹痛で医師の診察を受けたいと希望したことは 1 度もなかった。

2 人のコーチが利次を車の後部座席に乗せ、合宿所から徒歩 3～5 分にある辻医院を訪ねた。土曜の午後だったので、コーチの 1 人が医師の所在を確認に行った。

この間、残ったコーチは利次と二、三言葉を交わした。その直後、バックミラーをのぞいたが利次の姿が見えない。後部座席をのぞいたところ、利次は口を半開きにし、座席に倒れていた。

コーチはすぐ、他の 1 人を呼び戻し、そこから車で 2～3 分の佐本外科へ運び、診察を受けた。

医師は、すでに死亡している、と告げた。

以上が、利次死亡までの事実経過である。

原告らは、戸塚とコーチたちが、合理的理由もなく利次に殴る、蹴るの暴行を加え、激しい腹痛を訴え、医師の診察を求めているのに無視、放置したばかりか、死亡当日にはその利次を寒風吹く戸外に、2 時間も正座させたと主張している。

利次の死がまことに不幸な出来事であり、両親の悲嘆が筆舌に尽くしがたいものであろうことを、被告は認めるに決してやぶさかではない。

しかし、健康体でない利次を健康体と偽って合宿に送り込むなど、自らの責任の重大さをかえりみることなく、以上のような事実関係をよく調べることもしないで、責任はあげて戸塚にあるとする主張は、明らかに不当である。

* *

桐山利次と同じ時期に戸塚ヨットスクールで訓練を受けた根津公男の両親、根津正穂と芳子が、長男公男が暴行を受けたとして戸塚宏らを傷害罪で告訴した訴えの内容は次のとおりである。

告訴人らは、公男に登校拒否の傾向があったので、戸塚ヨットスクールの合宿の実態を知らずに、同合宿により公男に登校拒否を治そうと考え、昭和 54 年 2 月 12 日から 16 日までの予定で始まる合宿に参加させた。

戸塚らは共謀のうえ、合宿所において、2 月 12 日午前 8 時ごろ、公男に対しヨットの組み立て作業が遅いことを理由に、顔面を殴打する暴行を加え、下唇裂傷の傷害を負わせた。

さらに、16 日午前 6 時すぎには、公男の柔軟体操が指示どおりでないことを理由に、顔面を蹴りつける暴行を加え、左頬部挫傷、鼻腔内裂傷の傷害を負わせた。

戸塚の経営する情緒障害児のためのヨット合宿においては、コーチの指示どおり訓練を行えない子供に対し、その肉体的、精神的限界を考えず、

「腕立て伏せができない、ヨットの組み立てができない」

とっては一方的に暴行を加え、子供の体に体罰としての程度をはるかに超えた傷害を負わせている。

公男も前記以外に、5日間にわたっておびたしい暴行を受けている。

そして、この暴力指導はコーチ全体に徹底されており、戸塚を先頭に毎日のように暴力を加えている。

また、10人もの子供を市街から離れた合宿所において5日間にわたって訓練させるにもかかわらず、医師、看護婦はおろか医療知識を有する者も置かず、また、薬品等もほとんど備えていない。

人的、物的に医療設備は皆無に等しいありさまであり、それゆえ、桐山利次の死亡事故が発生した。

告訴人らは、5日間にわたり恐怖と暴力の中で生活を余儀なくされた公男の今後に、極めて不安を感じている。

告訴事実についての厳重なる捜査と被告告訴人らに対する厳罰を求めるものである。

根津の場合は民事訴訟がなく、刑事告訴だけなので、戸塚ヨットスクール側は法的手続き上、反論を行う必要がなく、従ってここに紹介すべき文書は提出されていない。

また、警察は根津の訴えに関しては捜査を行っていないが、それは、いわば、桐山利次の死亡事故に関する告訴事件の支援、という性格を持ったものと解釈されているからであろう。

* *

55年11月4日に死亡した高松雄吉の遺族は、戸塚宏および、その他のヨットスクールのコーチたちを、傷害致死罪で罰する

ことを求めた刑事告訴を起こすとともに、3,238万5千円の損害賠償を求める民事訴訟を起こして、係争中である。

刑事事件に関しては、愛知県警が名古屋地検に戸塚らを書類送検している。

民事訴訟も目下、審理中である。

遺族による訴えの内容は次のとおり。

高松雄吉は弘、ちよ子の長男として昭和34年8月16日出生。47年同志社香里中学へ入学、53年同志社香里高校を卒業した。

53年4月から大学受験準備のため京都市の関西文理学院予備校に入り勉強したが、54、55年の2回にわたり大学受験に失敗した。

中学時代には250人中60番ていどの成績だったが、高校時代は成績が落ち、かつ、2度の大学受験失敗で、精神的に動揺していた。

55年10月10日ごろ、母親ちよ子が、新聞の夕刊で戸塚ヨットスクールの記事を見つけた。

「登校拒否児の精神訓練に効果がある」

と書かれていたので、ちよ子はヨットスクールへ手紙を出し、案内書等関係書類の送付を受けた。

10月22、3日ごろ、戸塚から電話があり、高松弘、ちよ子は大阪・梅田の新阪急ホテルロビーで戸塚、コーチの2人に会った。

戸塚は、

「31歳の人まで訓練によって治した経験がある。(雄吉は)21歳だから大丈夫です」

といいながら、治療実績を示すアルバムを見せ、

「安心してお預け下さい」

といった。

両親が、

「雄吉の健康に異常はないが、勉強のために運動不足になっている。急激、過激な訓練には耐えられないので、徐々に訓練していただきたい」

と、特に申し出たのに対し、戸塚は、

「練習は厳しいが、暴行とか傷害を加えるようなことはない。健康診断もするから、まかせてほしい」

と語った。

10月27日、ヨットスクールから30日に迎えに行くとの電話が入った。

30日、2人のコーチが車で高松の家まで迎えに来た。

雄吉は心進まず、同行を拒んだが、コーチたちは、

「すぐ親に感謝するようになる」

といて雄吉の両脇をかかえるようにして、車に乗せて行った。

11月1日。午後9時すぎ、戸塚から高松宅へ、

「雄吉は元気で、機嫌よく練習しているので安心するように」

との電話が入った。

家族は再度、

「息子は2年間も運動をしていないので、過激な運動は絶対に避けていただきたい」

と、強く頼んだ。

11月4日。雄吉死亡の日。

午前1時20分。真夜中、戸塚から、

「雄吉は訓練中に異状が見られたので病院に運んだが、さきほど死亡した」

と、電話がかかった。

家族が事情を詳しく尋ねたが、

「警察の手が入っているので、詳しいことは申し上げられない」

との返事であった。

戸塚ヨットスクール

父親高松弘は、義弟中井昌弘を伴って半田警察署に赴き、刑事の案内で棺に横たわる雄吉の遺体を見たが、驚きのほかなかった。

(イ)顔は両方の目が充血して紫色にはれ上がり

(ロ)唇が切れて血がにじみ

(ハ)口の周辺にも紫色にはれ上がった所、無数にあり

(ニ)家を出る時の長髪は丸刈とされ

(ホ)左の胸に凶器様のもので殴ったと思われる、紫色に変色した部分あり

(ヘ)腹部にも足で蹴ったような紫色の充血

(ト)両腕にも無数の充血箇所があった

上記の状態からして、病死ではなく、一見して暴行による傷害の結果、死亡したと思われる。

雄吉の死後、父親弘とその義弟中井昌弘が、雄吉が入校のさい健康診断に当たった医師から聞いたところによると、雄吉の心電図に乱れがあり、血液検査では白血球が異常に多く、普通値6,000ところ、雄吉は2万5,000もあり、さらに、尿に血がまじっていた、ということである。

両親は雄吉を預けるに当たって再三にわたり、長い間、運動をしていない身体であり、衰弱しているので、急激に、過激な運動をさせることは避けていただきたい、徐々にお願いしますと頼んだはずである。

それにもかかわらず、戸塚らはその頼みを無視して、過激な運動を雄吉に強要した。

そして、動作が遅いといっちは容赦なく殴りつけ、蹴とばすなどの行為を繰り返した。

そのうえ、雄吉が身体が自由がきかなくなっても医師の診察を受けさせず、入校6日目にして死に至らしめた。

高松雄吉の死亡に関して、両親から起こされた訴えに対する戸塚ヨットスクール側の反論。

雄吉の母親ちよ子から戸塚ヨットスクールにはがきで、
「東山晴利氏の住所を教えてください」

と照会があった。

東山晴利は、戸塚ヨットスクールで登校拒否を克服して見事に立ち直り、56年夏に催された神戸ポートピア博記念太平洋単独横断ヨットレースに参加、史上最年少の18歳で5位入賞を果たす快挙を成し遂げた少年東山洋一の父親である。

雄吉の母親ちよ子は東山から戸塚ヨットスクールの内容と、洋一が立ち直るに至った様子を聞こうとしたのである。

その後、雄吉の父親は戸塚の出張先まで電話を寄こして面会を申し入れ、やっと大阪・梅田の新阪急ホテルで雄吉の両親は戸塚と面談した。

55年10月23日前後で、戸塚にはコーチ1人が同伴していた。

両親の話によると、雄吉は高等学校1年の2学期から登校拒否を始め、成績は相当不振であった。

大学受験には失敗し、予備校にも3カ月にして通学を拒否しているとのことで、特に雄吉が21歳の成人に達しているという年齢のことを、気にしていた。

そこで戸塚は、31歳の成人を治したことがあることを説明した。

両親は、

「長い間、外に出ておらず、運動をしていない」

と説明。

それに対して戸塚は、

「健康診断をする」

と答えた。

その時両親は、

「検討のうえ、後ほど連絡する」

といって双方別れたが、間もなく両親から申し込みがあり、戸塚はそれを了承した。

戸塚ヨットスクール

その時、両親は雄吉について「覇気がない」「社会性がない」等の説明をした。

戸塚は両親の説明を聞いていて、雄吉に精神病の疑いなきにしもあらずの印象を受け、

「われわれの所は精神病を治す機関ではないので、様子によっては精神科の医師に診てもらってもいいかもしれない」

と両親にあらかじめ告げた。

両親はその時、

「雄吉をかつて1度、精神科へ連れて行って診てもらったことがあるが、はっきりわからなかった」

と打ち明けた。

55年10月30日。

2人のコーチが雄吉を合宿所に連れてくるため、車で枚方市にある高松宅を訪ねると、父親はニコニコしながら、コーチたちを出迎えた。

コーチが雄吉を車に乗せようとする、激しく抵抗した。父親は息子を殴ったり、蹴ったりして、車に押し込むのを手伝った。

2人のコーチは雄吉を車に乗せ、夕方、愛知県美浜町河和の合宿所に着いた。

車中、雄吉はおとなしくしていた。

31日。

雄吉は午前6時起床、10人ぐらいの生徒とともに体操を始めた。

しかし、雄吉は最初から、腰が抜けたような格好で座り込んでしまった。トレーニングはやらないに等しい状態であった。

朝食後の居室掃除を、雄吉はほとんどしなかった。

その後、入校生を対象とした恒例の健康診断を病院で行った。

雄吉については、

「尿蛋白が出ているが、訓練には支障なし」

という診断が出された。

健康診断が終わると、いつも世話になっている合宿所近くの『角屋』旅館で庭掃除の奉仕活動をした。

しかし、雄吉は乗ってきた車から降りようとしな。みんなで降ろすと、道に大の字になって寝ころんでしまった。

昼食に『角屋』がカレーライスを出してくれたが、雄吉は1人、食べることを拒んだ。

「僕だけにしか出来ない研究があるんだ。こんなことをやっている暇はない」

雄吉がそんなことを1人でブツブツつぶやいていたので、それを聞いた人たちは、

「あの子、おかしいんじゃないか」

と語り合った。

午後1時ごろ、ヨットの訓練開始。

雄吉はウエットスーツに着替えることを拒み、無理矢理、着替えさせられた。

生徒たちは海岸近くに置いてあるヨットの組み立てを始めた。

雄吉は途中までやっただけで、やめてしまったので、コーチが組み立ててやった。

雄吉は水を怖がり、ヨットに乗ろうとしなかった。水が膝くらいまでの所にくると、ヨットにしがみつき、ひっくりかえって水につかってしまう。コーチがヨットの上にかつぎ上げても、寝ころんで抵抗した。

他の子供を1人、同じヨットに乗せ、雄吉を教えさせようとしたが、雄吉は全くだんことをきかない。

しかも、いったん目を離すと、脱走の際をうかがい、助けを求める相手を捜すかのように、キョロキョロとあたりを見回している。

雄吉はヨットを動かしたが、すぐひっくり返ってしまい、口をあけたまま、水を飲み込むのもかまわず、仰向けに浮かんでいるというありさまだった。コーチは仕方なく雄吉に訓練をやめさせ、火にあたらせた。が、雄吉は火のあたり方も知らない。

しばらくして、コーチが、

「さあ、やるぞ！」

と、うながすと、雄吉はそのとたんに、ヘナヘナと座り込んでしまった。

11月1日。

午前中、炭焼きをするための穴掘り作業。雄吉は休んでばかりいて、無気力。

午後のヨット訓練後、20～30メートルの合宿所まで帰る時など1人で歩こうとせず、他の生徒の肩に支えられて、やっと。ところが、皆が目を放すと1人で歩き出すので、

「自分で歩け！」

と、不意を突くと、すぐまた、ヘナヘナと座り込む。

2日。

体操はなんとかやったが、ヨット訓練は拒否。昼に合宿所の庭で大の字に寝てしまうなど、ダダをこねた。

寒そうにしており、コーチが異状を感じて熱を計ると、35度しかない。

ストーブ2つをつけ、日当たりのよい場所で湯タンポを抱かせ、合宿所に寝かせた。牛乳を暖めて楽のみで飲ませようとしたが、雄吉は楽のみの口元をかんでつぶした。そして、寝袋や毛布を蹴とばすなど、暴れた。食事をとらせようとしても、とらない。

医師に診察してもらおうと電話したところ、体温が低いくらいで死ぬことはない、という説明。病院が休みでもあるので、様子を見ることにした。

3日。

午前3時ごろ、雄吉は、

「水をくれ」

とわめき、暴れた。コーチが水を与える。雄吉はさらに、

「神よ、わが愛を助けたまえ！」

など、意味不明のことを叫び続けた。異常を感じ、コーチが交代で不寝番を続けたが、肉体的苦痛の訴えはなかった。

他の生徒たちの訓練は平常どおり行ったが、雄吉には看護1人をつけて1日じゅう寝かせた。お茶を飲むでいど、食欲はない。

昼に病院へ電話したところ、

「緊急なら別だが、先生もいないし」

ということなので、様子を見守ることにした。夜に入って、雄吉の意識が朦朧(もうろう)とした感じになってきた。急いで病院へ運んだが、到着した時には死亡していた。

ヨットスクールにおいて、およそ訓練らしい訓練を始めないうちに、ロウソクの火が消えるようにスーツと生を閉じてしまった。

事故の波紋と苦悩する戸塚宏

「ボクは、この仕事、やめようと、思うんです」

戸塚宏は、言葉を一つ一つ選ぶようにしながら、沈痛な面持ちで、いった。

山本秀師、今井安栄、加藤豊の3人は、痛ましい思いで戸塚の言葉を聞いた。

「これまで随分、いいことをして、感謝もされているのに……」

3人はほぼ同時に、ためいきをついて、顔を見合わせた。

彼らは弁護士である。

死亡事故に関して戸塚の弁護を担当することになっているのだが、3人と戸塚の関係は単に弁護士と依頼人という以上に、友人であり、海の仲間である。

最初、山本と戸塚が知り合い、それに加藤と、さらに今井が加わった。ヨットでは戸塚が3人の先生という関係にある。

弁護士をしている3人は、多忙な仕事のあい間をぬって、河和の合宿所へやってきた。

そして、情緒障害の子供たちと一緒にヨットの練習をしながら、子供たちの受ける訓練の模様と、快方に向かって行く変化の状態を、つぶさに観察していた。

「われわれの子供だって、ああいうふうにならんという保証はないな」

3人は、次々とヨットスクールへ入校してくる情緒障害児たちの姿を見、その子供たちが、ごくふつうの家庭で、ある日、突然に発生するのだという事情を知ることになって、河和から帰る電車で揺られながら、暗たんとした気持ちにとらわれるのだった。

3人は、何度もヨットスクールへ足を運んだ。子供がいやがるのを無理矢理、厳しいしごきを受けさせられ悲鳴をあげている状態から、明るく素直な子供に変わっていく姿に接して、魔術を見ているような不思議な感慨と魅力にとりつかれていった。

しかし戸塚は、子供たちがなぜ、どのようにして変わるかについて理論的説明をあまり加えようとしなかった。

「理屈で子供が治るなら、苦勞はしない」

戸塚が吐いて捨てるようにいったのが、3人には気がかりであった。

「ボクは素人だから、専門の学者たちに、観察をして、理論化して見ていただけないかと頼みに行った。ところが彼らは、ボクのやり方で治るということ信じないばかりか、現場を見にくることもしないで"オカルト療法だ"といいやがった」

戸塚がそういったのは、かなりたってからのことである。

「カウンセラーや専門家といわれる人たちは、
"親の育て方が悪かったのだから、親や環境が変わらなければ子供は治らない"

という。そして、

"10年かかってこうなったのだから、治るのにも10年かかる。あせらずに……"

というようなことをいうんだ。

高熱を出して死にかかっている病人に対して"養生が悪かったからだ"と指摘することがどれほどの意味を持つんだろうか——」

3人は戸塚の説明を聞いてやっと、彼の、理論に対する敵意のような気持ちを理解した。

「しかし、なんとか体系化できんたろうか……」

そんなことを話し合っている矢先の、死亡事故だった。

戸塚宏は、他人に対して絶対に弱音を吐かない男である。

死亡事故に関する刑事事件で書類送検されたという記事が新聞にデカデカと出た時にも、親しい人が、

「先生、大変だねえ」

と励ましの言葉をかけたところ、戸塚はニコリともせず、

「宣伝になって、結構な話だ！」

と、突っ張った。

「ご心配をかけて、どうも……」

といった言い方ができない性質なのである。

死亡事故の時にも、戸塚はまるで何事もなかったかのように、顔色ひとつ変えず、背筋をピンと伸ばして、街を闊歩しているかに見える。

そういう彼の態度は、見る人の立場によって、全く正反対の2つの印象を与えていた。

戸塚をよく理解し、彼の仕事の困難さと意義を認識、評価している数少ない人々は、泣きごと、弁解がましいことも言わず、毅然として男らしい態度であると感嘆し、そういう態度でいられるのは、彼が最大限の努力を尽くしてもなお起こってしまった不可抗力の事故に違いないと、戸塚に同情した。

しかし、圧倒的多数の第三者は戸塚の態度を、傲慢不遜(ごうまんぷそん)であると非難し、暴力教室、人殺しと口をきわめてのしる者も少なくなかった。

「態度が無礼だ」

と怒った、死亡者の遺族たちはその典型である。

そうした非難があることを十分承知のうえで、なお、頑強に態度を変えないようなところが、戸塚にはある。

その彼が、ヨットスクールの仕事をやめると言い出した。

「余程、こたえているのだな」

海の仲間であり、弁護士でもある3人は戸塚の沈痛な表情に接して、何と励ませばよいのか、しばし言葉も見つからなかった。

事故の夜、心配して合宿所へ駆けつけた水谷巍(たかし)に対して、戸塚は「参りました……」と、率直に真情を吐露した。

水谷は、名古屋の女子名門校の1つといわれる「淑徳学園」の教師・カウンセラーである。

教師やカウンセラーには戸塚のやり方に対して批判的な人が圧倒的に多い。

その中で水谷は戸塚ヨットスクールに早くから刮目(かつもく)して自ら体験入校し「淑徳学園」の子女の指導に戸塚の教育方法のいくつかを採り入れている貴重な存在であった。

水谷は戸塚にとって、名古屋大学の先輩に当たってもいた。

戸塚は、外部に対しては傲然とした態度をとり続けながら、信頼するごく一部の人間には、真情を吐露していた。

戸塚ヨットスクールは、死亡事故の発生によって厳しい立場に立っていた。

夜中に、電話がリーン、と鳴る。

受話器をとると、

「人殺しッ！」

といって、電話が切れる。

毎日のように、それが続いた。

「ろくでなし」「人でなし」「暴力団」「ヤクザ」「犬畜生」「子供を返せ」「やめてしまえ」「死んでしまえ」「死んで詫びろ」……悪口雑言の限りが投げつけられた。

電話をとったコーチたちは神経が参ってしまい、リーンと電話のベルが鳴ると、ハッと息が止まる思いがした。

警察からは連日、呼び出しがかかって、厳しい取り調べが行われる。

「殴って、殺したろうがア、どうだ、エエッ！」

ドーン、と握りこぶしで机をたたく――。

何時間も、延々と続く取り調べが終わりに、ホッとして合宿所に帰ると、リン、と電話のベル。

「このオ、人殺しめがア……お前たちみたいなヤツは、死んじまえッ！」ガチャン。

それまで戸塚は講演に引っぱりだこだった。

太平洋横断ヨットレース優勝！

情緒障害児の回復に成功！

注目のヨット教育！

学校、PTA、企業、青年会議所、ロータリークラブ、ライオンズクラブ……。

「ご多忙とは存じますが、戸塚先生の貴重なご体験をぜひ、うかがわせていただきたいと思ひまして……」

九州、そして北海道。戸塚は席のあたたまる暇もないほど忙しく、全国を駆けめぐっていた。

その申し込みが、見事なまでにピタリ、と止まり、すでに日程が組まれていた分についてもキャンセルが相次いだ。

そして、肝心の入校申し込みもピタッと、止まってしまった。

すでに入校して訓練を受けている子供についても、心配した親たちが血相を変えて駆けつけてきた。

「やはり、子供は連れて帰ります」

戸塚たちがどれだけ説明し、説得しても、納得しない親が何組もあった。

「私は、以前からそう思っていたのだが、これはやはり、起こるべくして起こった事故、といえるのではないだろうか……」

教育評論家、心理学者といわれる人たちが、したり顔で語っている。

有為転変の人の世を、戸塚たちは身にしみて感じさせられていた。

「戸塚さん、あなたたちの責任じゃないよ」

と、山本秀師がいった。

「コーチの皆さんから、いろいろ話を聞いてみたけれども、不可抗力だな、これは」

「問題はね」

と、いったのは加藤豊である。

「200人近い生徒が全員、なんともなく、そのほとんどが情緒障害から回復しているのに、2人だけが死亡しているというところにあるのじゃないだろうか」

「体育の時間に行われたマラソン中、生徒が心臓マヒで倒れた。先生は罪に問われるだろうか。1人の生徒が心臓マヒで死亡したことによって、マラソンは、体育は、間違っていたということになるかね」

これは今井安栄の見解である。

「最初の桐山利次ね。あの子は全くの健康体だと親が保証し、それを証明する医師の診断書が添えられていた。

ところが、あとで調べてみると、兄が重症の知恵遅れ、自閉症で、その兄のために医者からもらった強い精神安定剤を弟も服用し、その結果、利次は異常に肥満し、内臓が衰弱していたことがわかってきた。

2番目の高松雄吉だが、この青年は高校時代から精神病のような症状を呈していたことを親が隠していたうえ、5年近くも部屋に閉じこもりきりで、まるで夜行人間のように太陽に当たると、すうっと消えるように倒れてしまうくらい、体力が衰弱しきっていた。

その他、2人についてはいろいろなことがわかってきているが、要するに、ヨットスクールへ入校するまでの長年にわたる親自身の責任を不問に付したままで、ヨットスクールに全責任を負わせようとする親の態度は、百歩譲っても、フェアだとはいいがたい」

と、今井はいった。

山本、加藤の両弁護士もうなずいて、今井の見解に同意した。

ありがたい、と戸塚は心の中でヨット仲間たちに感謝していた。

自分だって、方法論に誤りがあったとは少しも思ってはいない。裁判になって、具体的事実と経緯が一つ一つ明らかにされていけば、コーチたちの指導が誤っていなかったことが証明されるだろうという自信はある。

だから戸塚は袋だたきを覚悟のうえで、

「私のやり方は間違っていない」

と、記者会見でいい切ったのだった。

だが、事故原因の究明は究明として、自分の管理下にあるヨットスクールで死亡事故が2件続いて起こったという事実は、別の重みをもって戸塚に迫っていた。

* *

「ちょっと、困ったことになりましたなあ、先生」

愛知県知多郡美浜町の町長橋本喜久雄が医師の辻顕吉に話しかけた。

辻は、教育委員長を13、4年もつとめる、この町の名士である。

「ああいう問題を起こすようなところを、美浜町に置いておいていいのか、という声が、まあ、あからさまにはないが、私の耳にもちよくちよく入ってくるもんだから……」

辻の横には町議会副議長を長年つとめる岩本鋼一がすわっていた。岩本は旅館『角屋』の主人である。

「ヨットスクールが使っている建物は河和区のものだから、ああいうところへ区の建物を貸しているのは問題ではないかといってくる議員が、いないわけではない」

と、岩本もいった。

「この町の子供たちがヨットスクールへやっかいになり、治してもらったというような恩恵を受けたわけではないから、町の人たちにとっては親しみが薄いということもありますしねえ」

と、辻がいった。

ヨットスクールで起きた死亡事故の善後策について、3人は話し合っているのである。

数年前、河和の港でヨットスクールを開きたいという戸塚宏の申し入れを受け入れて、その開設のために支援と尽力を惜しまなかった中心人物も、この3人であった。

「先生、ヨットスクールの件については、どう思われますかな」

と、橋本町長は辻医師に尋ねた。

「私は、戸塚さんが依然として立派な方であり、立派な仕事をしておられるという考えに変わりはありません。

亡くなられた子供さんは大変お気の毒ではあったと思うのですが、しかし、事情をよくうかがうと、ヨットスクールへ来ないで家にいたとしても、いずれ人生の敗北者になっていたと思われる。

不運な死を問題にするあまり、助かるはずの数多くの子供とその親たちの人生を犠牲にしてしまうとしたら、その方がはるかに罪が大きいのではないだろうか……」

町長は目を閉じて、うなずきながら辻医師の話に耳を傾けていた。

「角屋さんのお考えは」

と、町長は岩本の方を見た。

「私も、辻先生のお考えに全く賛成だ」

と、岩本がいった。

「戸塚さんがヨットスクールを開きたいと申し入れてきた時、私はヨットスクールが将来、必ず美浜町に貢献するような存在になるという信念のもとに、受け容れに賛成し、及ばずながら微力を尽してきた。その考えは、今も変わっていません」

「いや、お2人にそういっていただくと、ありがたい」

と、町長はいった。

「やがて福祉大学と高校が名古屋から移転して来るし、美浜町は教育の町として育っていきますぞ。これからは教育が再び見直される時代になりましょうねえ。」

ヨットスクールへの批判の声に対しては、われわれで極力、説得につとめることにしようや」

町長の言葉を最後に、3人は立ち上がった。

「オイ、ヨットの連中は、風呂へ来とるか」

岩本鋼一は『角屋』へ帰ると、妻の菊枝に尋ねた。

「そういえば、姿を見とらん。遠慮しとるのかもしれんねえ」

と、女将。

「遠慮せんて、入りに来るよう電話してあげなさい」

気の早い女将はすぐにダイヤルを回し始める。

「それから、節子」

と、鋼一は娘にいった。

「今晚はなにか差し入れをしてあげなさい。みんな、しょげかえつて、腹をすかしているといかん。そうだ、お前が得意のハンバーグがいい。デッカいやつを、寒いから、あったかくして持ってってあげよう……」

* *

「イヤァー、戸塚先生、久しぶりですなあ……」

合宿所に突如、大きなダミ声が響きわたったかと思うと、威勢のいい中年の男が手を高々と挙げて飛び込んできた。

明子の父親原三郎である。

「長崎からわざわざ……」

と、戸塚。

「仕事が一段落したもんじゃけん、すぐと飛行機に飛び乗って、駆けつけてきたとです。アッコと家内からも、先生やコーチの皆さんにくれぐれも、よろしく申し上げてくれろということでしたい。

ハイ、これが松翁軒のカステラ。ここが本当の元祖で、長崎でしか買えんすもんね。

そして、これが雲龍のぎょうざ。覚えとられますか、思案橋の裏の、きったない店。うまかったとでしようがア……」

明子の父親はもともと元気のいい人だが、この日はとりわけ陽気に振るまおうとしているようであった。

「明子さん、元気にやってますか」

と、戸塚が尋ねた。

1万円札を燃やした、あの女の子である。

「元気どころか、先生、1人で店ば切り回しとります。このあいだは、明子ば嫁にくれんかという話がきましてなア」

父親は嬉しそうであった。

「嫁んことといえば、私んとこの前の娘が結婚ばしたとですが、その相手が共同通信社の記者ですたい。

私が戸塚先生のヨットスクールを知ったのは長崎新聞に載った共同通信の記事でした。あの記事がなかったら、私の一家は確実に、心中ばしとったとです。ですけん、共同通信社は私たち一家の命の恩人じゃ——結婚式のスピーチで、私はそういう話ばしたとですよ」

威勢のいい明子の父親がちよっとしんみりとした口調になった。が、またすぐ、元に戻った。

「先生に今日は、無理をお願いに来たとです。長崎の子供ば3人、入れてもらえる余裕があるとじゃるか。アッコの実例を見て、長崎では教育長以下、戸塚先生を大変評価しておる。しかし立場上、表立っていえんで、相談を受けるとすぐ、私んところへ相談に行けという。おかげで私ん所は、戸塚ヨットスクールの長崎支所ですたい。ウァッハッハッハ」

ありがたい、と戸塚はこの父親の思いやりで心の中で感謝した。死亡事故のことは一言も口に出さずに、長崎からわざわざ励ましに出てきてくれたのである。

こういう人に出会う喜びがあるから、情緒障害児たちとのシシュフォスのように報われない闘いを、自分は続けてくることができたのだと、戸塚は思うのである。

* *

「戸塚さん、あなたやっぱり、この仕事やめちゃ、いけないよ」

3人が口ぐちにいった。

3人の弁護士と戸塚は、死亡事故と刑事告訴、民事訴訟にどう対処し、ヨットスクールをどうするかについてそれぞれの立場で調査検討し、何度も話し合いを重ねてきた。

今日はその、大詰めの話し合いの日であった。

「非難、批判、中傷の電話や手紙は当然、あるだろうさ」

と、山本がいった。

「しかし、あなたの奥さんに尋ねたら、子供を治してもらった親たちからの激励の電話や手紙も、事務所にはたくさんきているそうじゃないですか」

「戸塚さんが責任を人一倍感じる気持ちは、わかるけれどもね」

と、今井もいう。

「ヨットスクールをやめたからといって、責任をとったことにはならないと思いますよ」

今井は、さらに続けた。

「ボクはむしろ、1人でも多くの情緒障害児を立ち直らせる努力を、今後も続けることで責任をとるべきだと考えるんですがねえ」

「そうだ。ボクもそう思う」

といったのは加藤である。

「今までだって、ヨットスクールによって助けられた子供と家族の数の方が圧倒的に多いわけでしょう。戸塚さんがやめてしまったら、これからもずっと先まで、助かるはずの、おびたしい数の子供とその家族とが救いの道を失ってしまうことになる。むしろ、その方が、責任の放棄になるんじゃないですか」

そして、3人が異口同音にいった。

「ここでやめてしまえば、やっぱり事故に対する責任があったのだという世間の非難を認めてしまうことになる。亡くなった子供たちの親御さんを相手に争うのは全く気の重い話だが、訴えられた以上、

避けて通るわけにはいなくなってしまう。あくまでも冷静、具体的に事実を明らかにして、戸塚さんたちの潔白を証明したい。

裁判のことは私たちにまかせて、戸塚さんたちは1人でも多くの子供を立ち直らせることに専心しなさいよ」

戸塚は、じっと目を閉じて、こもごもに語る3人の話に聞きいていた。

見違えるように明るくなって、手を振りながら合宿所から帰って行った子供たち、これが同じ子供とは信じられませんが、涙を流して喜んだ親たちの顔が、いくつも浮かんできた。

"神様"と"劇薬"のあいだで.....

毀誉褒貶(きよほうへん)あいなかばするという言葉がある。

何か事を興(こ)そうとするような人物は、褒める人もあれば、批判をする人もある。平穩無事(へいゑんむじ)にはいかぬものだ、ということである。

ヨットの訓練によって、情緒障害を直すという全く独創的な治療方法を開拓した戸塚ヨットスクールは、まさに、そうであった。

戸塚の方法は、医療における劇薬に例えることができる。

劇薬は、生死の境にある重症患者を甦(よみがえ)らせる素晴らしい効用を持つと同時に、患者の体力がそれに耐えられない場合には死に至る危険をはらんでいる。

劇薬は、劇薬であるがゆえに、救世主の栄誉と、死と隣り合わせの宿命を、常に負っているのである。

死亡事故を境に、戸塚ヨットスクールは、ごうごうたる非難の矢面に立たされ、人殺しとまで口を極めてののしられた。

だが、一方では、戸塚たちによって家庭の崩壊と、一家心中の危機を救われた親たちから激励の電話や手紙が続々寄せられ、長崎から駆けつけた明子の父親のように、わざわざ合宿所を訪

ねてくる人びともいた。死亡事故に関する警察の捜査に対して、告訴は不当であるとして証言を拒否した親たちもいた。そうした人びとは戸塚たちのことを「神様」だと言った。

劇薬だけに、評価もまた極端に分かれる。戸塚は「人殺し」と「神様」という対極の評価を同時に受けることになった。

まさに、毀誉褒貶(きよほうへん)あいなかばである。

そして、こうした厳しい試練の中から、戸塚ヨットスクールには新たな可能性の萌芽(ほうか)が生まれようとしていた。

明子の父が、3人の新しい情緒障害児たちを入校させてほしいという話を長崎からの手土産として戸塚たちの激励に合宿所を訪れたのと同じように、死亡事故と、それに対する世間の厳しい非難を承知のうえで、戸塚ヨットスクールへ、

「ぜひ、子供をお願いしたい」

と、申し込む親たちも、あとを絶ってはいなかった。

戸塚たちを非難する人々のなかで「当事者」は、死亡した2人の子供の親とその関係者だけである。それ以外の圧倒的多数は、情緒障害児を抱えて死ぬような苦しみをしたことのない「局外者」にすぎない。

ほどこすすべもなく悲惨な日々を過ごしている「当事者」たちは、戸塚たちの中の「神様」の部分に一縷(いちる)の望みを託そうとした。

その中に、東山洋一の両親がいた。

おなじみ、『角屋』旅館の大広間は、100人になんなんとする人いきれでむせかえていた。

広大な畳の部屋に仕つえられた何列もの座卓の上には、色とりどりの料理と飲み物がいっぱいに並べられ、談笑のざわめきが広がるなかで、来賓たちのあいさつが続いている。

教育委員長辻顕吉、美浜町議会議員富谷(ふかや)芳夫、河和中学校長日比千代久、河和小学校長田中満、町内会、隣組の代表等々。

町長の橋本喜久雄も所用が終わりしだい、駆けつけてくれることになっていた。

年の瀬を間近に控えた、戸塚ヨットスクールのパーティーである。

100人近い人びとの中には、ヨットスクールの子供たちの父兄も多数参加していた。

ふだんは、子供が厳しい訓練を受けている間、親は心配しながらも、戸塚の許可が出るまで面会も、電話をかけることも控えるようにといわれている。

この日だけは、そうした厳しさをしばし忘れて親子久しぶりの歓談に花が咲く。

つい1カ月前まで母親の首を絞めていた家庭内暴力の子供も、ここでは、

「東京から来ている○○です」

と素直に自己紹介をする"ふつうの子"になっている。

親にしてみれば、安心して味わうことのできる、久しぶりの団欒の時であったに違いない。

パーティーの趣旨は、大要、3つあった。

第1は、神戸ポートピアを記念して催された太平洋単独横断ヨットレースに参加した加藤忠志、境野貢両コーチと東山洋一の無事帰還、歓迎。

第2は、山口孝道と旧姓山本伸子、境野貢と旧姓古閑千恵子2組のコーチたちの結婚披露。

第3は、戸塚ヨットスクールが今年1年を振り返り、来たるべき新しい年に向かって、情緒障害児を立ち直らせるためにさらなる努力をかたむける決意を新たにす。

そして、これらすべてを含めて年忘れの会とし、この1年間お世話になった美浜町の人びとに感謝する——という会である。

パーティーの司会はこの家の主人であり、美浜町議会副議長でもある岩本鋼一によって進められた。

校長の戸塚宏がヨットスクールを代表して、地元美浜町の人びとの温かい支援に感謝の言葉を述べたのに対し、教育委員長の辻顕吉は、

「教育の混乱の中で、戸塚ヨットスクールの果たす役割はますます、重い」

と、励ました。

そして、東山洋一が立った。

「ボクも、登校拒否の情緒障害児でした。ヨットスクールで一所懸命努力すれば、誰でもボクくらいには、なれます。みんなも、頑張ってください」

東山洋一の挨拶は言葉少なく、控え目であった。

しかし、この18歳の青年の今日あるを知る者にとっては、さりげない彼の言葉の持つ意味は重い。

東山の家は神奈川県綾瀬市の新興住宅街にある。

洋一が登校拒否症にかかったのは県立座間高校に入学した直後の、1学期中間テストの直前、53年6月ごろであった。母親の博美が朝、起こしに行っても起きてこなかったのが、その始まりである。

その時は母親が「怠けるんじゃない！」と殴り、きつく、叱ったのがきいて、中間テストだけは受けた。しかし、その後再び登校拒否が始まり、そのまま、どんなに手を尽くしても学校には行こうとしなかった。

先生が心配してきてくれると、

「学校へ行きたいし、行かねばと思っているんです」

と、洋一はいう。

それじゃ、と朝迎えにきてくれると、頑として起きない。友達がきてくれても同じだった。

部屋に閉じこもり、昼夜逆転し、風呂に入らず、カーテンを引きちぎり、教科書を破り、親に当たり散らし……と、しだいに家庭内暴力に向かってエスカレートして行く。

若いころ、戦中戦後の混乱期で苦労した父親の晴利が、

「父さんたちは勉強がしたくてもできず、腹いっぱい食べたくても食べられなかったんだ！」

と、説得しても、きかない。

母親は横浜にある県立精神衛生センターへ毎週1回、8カ月にわたって通い、カウンセリングを受けた。

「なんでもお母さんが先回りしてやってあげるのを、やめなさい」

と、アドバイスを受けたが、時すでに遅しの感じである。

年を越した翌54年1月ごろ、高校の先生が教育の専門誌で見たのだが参考のために、といて教えてくれたのが戸塚ヨットスクールである。

両親はすぐ、ヨットスクールへ電話で問い合わせた。

「高校生では責任を負いかねる」

という返事だったが、ぜひに、と頼み込んで、入校を認めてもらった。

洋一は、ヨットはカッコいいから、やってみよう、くらいにしか思っていなかった。

では、出発、という矢先に、電話のベルが鳴った。

死亡事故発生のため、合宿は延期する、という連絡だった。

54年2月、最初の死亡事故の時である。

東山洋一の両親は、死亡事故の直後に、息子を入校させた。

不安がなかったといえば、うそになる。

しかし、

「1つの事故よりも、数多く治っているという可能性に賭けたかった。一縷(いちる)の望みでも、それにすがりたいというのが、ああいう状態にある親の真情ではないだろうか」

と、両親は語っている。

戸塚の目から見ると、入校してきた当時の洋一は、何をやらせても、ドジだった。ドジのうえに頑固であった。

他の子供たちが要領よくこなしてしまうことを、洋一はできない。こうして彼だけが残され、人一倍厳しくしごかれることになった。

ところが洋一は、どれだけしごかれても、立ち向かってくる。

当時は短期間の合宿を繰り返していたが、また来い、と家へ電話をすると、1人でちゃんとやってきた。しばらくたって、あいつも随分執念深くきているなあ、と、戸塚やコーチたちが改めて気づき、感嘆するという状態だった。

「ようし、それなら、どこまで伸びるか、とことん、しごいてやろう」という気に、戸塚はなった。

両親に話して身柄を預かり、特訓に次ぐ特訓を重ねた。見違えるほどの成長が始まった。

立ち直った洋一は自分から高校へ入り直したいと希望し、戸塚は、ヨットを通じて親しい副校長に頼んで、大阪の私立「清風学園」に預かってもらった。

洋一は高校に入ってからヨットの訓練を休まなかった。

神戸ポートピアを記念して太平洋単独横断ヨットレースが催されることになった。

「あいつを出してやろう」と、戸塚は考えた。

洋一はそれに耐えられる青年に成長していた。

昭和56年6月7日、サンフランシスコの港を11隻のヨットがいっせいにスタートを切った太平洋横断レース。

「タカラブネ号」を駆った東山洋一は51日余の孤独な闘いに見事うちかち、2人の先輩たちを押さえて第5位に入賞した。

18歳。世界最年少記録である。

あふれんばかりの人出でにぎわう神戸ポートピア会場では、両親が目頭を押さえながら、見違えるように成長した息子の生還を待ち受けていた。

「ヨットスクールへ入ると、どういう子供になりますか？」

と、戸塚はよく質問を受けることがある。

その時、彼は、決まってこういふことにしている。

「本人と両親が頑張りさえすれば、東山洋一のようになります」

年の瀬を控えた戸塚ヨットスクールのパーティーは、気さくでお祭り好きな『角屋』一家の軽妙な司会、進行によって、父兄、生徒、町内、隣組代表の自己紹介から"鬼のコーチ"たちの隠し芸まで飛び出し、ふだんのヨットスクールからは想像もつかない、なごやかな雰囲気につつまれていた。

東山洋一は隠していたらしいのだが、NHK青年の主張コンクールに出場した彼が、情緒障害を克服して太平洋横断に成功するまでの体験を「私の挑戦」と題して語り、大阪大会で見事優勝、代表に選ばれたというニュースが会場に報告されて拍手を浴び、パーティーに花を添えた。

パーティーに先だって、生徒たちは、もちつきを体験。『角屋』の人たちに教わりながら、心もとない手つきでキネを振り、料理、もちつきを手伝った両親たちと一緒に、あんこ、きな粉、大根おろしなどで、つくたてのもちに舌つづみをうつ。

マンション住まいの核家族では味わえない体験であり、家庭内暴力の陰惨な生活など想像もできないほど、むつまじい親子の姿であった。

実は、パーティーが催される数日前、死亡事故に関連して戸塚以下のコーチたちが書類送検されたとのニュースが大きく報道された。ヨットスクールにとっては死亡事故を想起される、いやな出来事だったに相違ない。

にもかかわらず、パーティーは来賓、父兄など100人に及ぶ盛会となり、事故当時のような非難、中傷の声もなく、子供を連れて帰る親もいなかった。

そればかりか、100組を超える親たちが、子供を1日も早く預かって欲しいと順番を待ち、その数は日々、増え続けている。

それは、病める日本社会のうめきであると同時に、戸塚ヨットスクールがさまざまな試練を乗り越えて、つちかかってきた評価にほかならない。

2つの生命が、理由はどうであれヨットスクールが預かっている間に失われたという事実を消し去ることはできまい。が、苦しんでいる情緒障害児たちを1人でも多く立ち直らせ、金属バットや子

殺しの悲劇を未然に救い続けるかぎり、その親たちにとって戸塚宏は「神様」であり続けるに相違ない。

さまざまな出来事のあったこの1年もやがて幕を閉じようとしているが、情緒障害克服の闘いに休日はない。

あと3日でやってくる新しい年の元旦、戸塚宏に率いられた子供たちは、身を切る寒風を帆にいっぱい、はらませながら、太平洋上を疾走するクルーザーの上で、初日の出を迎えることだろう。

* *

この年がまさに終わらんとしている12月28日、名古屋地検は第1回目の桐山利次の死亡事故に関して「不起訴処分とする」との判断を下した。

あとがき

登校拒否や家庭内暴力は現代社会が生み出した「心のガン」である。

ガンが肉体をむしばむように、ある日突然子供に襲いかかると、子供はものの怪につかれたように人間が変わってしまい、狂暴になるか、廃人のように無気力になるか、いずれにしても正常な人間としての人生はそこで終わりになり、一生を棒に振ってしまう。

そんな子供を1人かかえ込んだ家庭は親が自殺するか、子供を殺すか、一家心中か、あるいはその瀬戸際までいか。平和だった家庭は完全に破壊されてしまう。

しかもそれは、ガンと同じように原因も、決め手となる科学的治療法も解明されないまま猛烈な勢いで拡がり、祖母殺し、金属パット事件……と次々現代の悲劇を生み出している。いつ、あなたや私たちの家庭に襲いかかるかもしれない魔手である。

『スパルタの海』の取材を開始した私は、たちまちにして戸塚ヨットスクールの持つ魔力のようなものに引き込まれてしまった。2件も死亡事故が起こったことを知りながら、自分の子供を預かって欲しいと頼みにくる親たち。廃人のようにうつろな目をして入ってきた家庭内暴力の子供が2カ月で見違えるようにいい子になって喜々として帰って行く。信じられない、といった表情で子供の顔を何度も眺め感涙にむせぶ親との感動的対面。

それは、あまりにも刺激的な人間のドラマであり、まるで魔術を見ているような錯覚にさえとらわれた。

生徒たちと起居を共にしながら、合い間をぬって全国に散らばる卒業生やその父兄、学校、カウンセラー、病院、警察などを取材してまわったのだが、気がついてみたらそういう生活が半年以上も続き、現在もなお、時間をやりくりしてはヨットスクールを訪ねているほどに、そこで繰り展げられているドラマは刺激的である。

新聞に連載が開始されてからの反響の凄まじさは想像を絶するものであった。新聞社と戸塚ヨットスクールの電話は鳴りやまず、ヨットスクールに子供を預かって欲しいと順番を待つ家族の数が50、100、150……と見る見るふくれあがっていった。しかもそれは、むしろ恵まれた、ごくふつうの家庭、まさかウチの子がと思っていた家庭ばかりなのである。

日本の社会はこれほど病んでいたのか、と私は暗澹とした気持ちにとらわれ、だからこそ、より多くの人々に知ってもらいたいと思うのである。

この本は「中日新聞」「東京新聞」に長期連載したものを柱に、『中央公論ノンフィクション特集』に掲載された「そして子供たちは病んだ」の一部、さらに新しく書下した部分を加えて新たに構成した。登場人物中、生徒や父兄については仮名にする配慮をしたが、東山洋一、原明子両君とそのご家族は、「同じように苦しんでいる人々のお役に立つのなら……」と実名で登場する好意と勇気を示して下さった。

お名前を挙げて御礼を申し述べたい方々の顔を思い浮かべると数限りないほど、多くの方々のお世話になってやっと1冊の本が出来上がるわけだが、新聞連載を企画していただいた中日新聞

文化部佐橋嘉彦、本を担当して下さった東京新聞出版局米
山郁夫両氏に勝手ながらその代表をお願い申し上げたい。

昭和 57 年 4 月 15 日 上之郷利昭

ホームページ掲載にあたりご協力下さった著者・上之郷氏と、発行元の東京新聞出版局に厚くお礼を申し上げます。

尚、本著に書かれている学校の訓練内容は、現在とは若干違うところがあります。

映画「スパルタの海」について

「スパルタの海」は、ジャーナリスト・上之郷利昭氏が愛知県の戸塚ヨットスクール合宿所に泊り込んで取材し、スクールの実態と、登校拒否児などが実際に立ち直っていく様子を描いたノンフィクションです。昭和 56 年に、約半年間に渡って東京新聞に連載され、問題行動のある子供を持つ親などに大変な反響を呼びました。この原作を元に、西河克巳監督、伊藤四郎主演で製作されたのが、映画「スパルタの海」です。

そして、20 年程前のいわゆる“戸塚ヨットスクール事件”が起きる直前に完成し、封切を待つばかりの段階になっていたのですが、事情不明のまま、“お蔵入り”の状態が続いていました。

ところが、平成 17 年春、支援する会有志の方々のご尽力で、試写会が催され、関係者の方々に大変な好評を頂きました。また、今秋、有志の方々が映画「スパルタの海」の著作権を取得され、早速「VHS ビデオテープ」「DVD」化して広く会員の皆様に販売される事となりました。

戸塚校長役の伊東四郎氏はじめ、俳優の方々の名演技をご覧ください。スクールに入校してくる青少年の、当時と変わらぬ現実に、益々、スクールの存在意義を再認識します。